
ウルトラマンツイン

棒人間

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウルトラマンツイン

【Nコード】

N6731S

【作者名】

棒人間

【あらすじ】

「EARTH・ULTRA HERO」第1章

ウルトラマンダイナ最終回から7年、太陽系は平和が続いているようにみえた。しかし、崩壊したはずのルルイエが海上にその姿をあらわす。そして・・・。

これは、一人の人間と一人の宇宙人が融合したウルトラ戦士の物語。

最初に

はじめまして。棒人間です。今回僕の初めての作品ですので、駄文では、ありますがそれでも読んで頂ければ、僕としても嬉しいです。設定は、ダイナ（2020年）から、7年たった世界。地球を襲おうとする闇と、人類との戦いの中で新しい巨人の石像がみつかる・・という感じです。

もし、誤植等がございましたら、出来ればあたたかい目で見守ってください（笑）。

あと、「ティガ・ダイナ」で、出てきた登場人物も出す予定です。最後に、「ティガ・ダイナ」のなかで触れてはいけない部分に触れるかもしれませんが（クリッター等）。その点についてもあたたかい目で見守ってください。

急ではありますが、2030年から、2027年に変更しました。

理由は、シンジョウさんの年齢です（爆）

プロローグ

闇に覆われた海上では、かつて地球を滅ぼした邪神がいた。

その邪神の前には、銀と赤の巨人が威力の弱そうな光線を出し、牽制しつつ、邪神と対峙していた。

しかし、邪神は触手などを使い、巨人を苦しめる。

そして、巨人のカラータイマーが青から赤に点滅しはじめる。

焦ってきた巨人は右手を前に、左手を後ろに十字にし、光線を撃つ。

邪神に当たり、爆発を起こすが、特にダメージをくらってはいなかった。

巨人が驚いているうちに、邪神は自らの触手と、カニのようなハサミを持つ手で、巨人の腕を掴み、動きにくくさせ、紫色の光線を口からだす。

その光線は、巨人の胴体を貫通し、巨人は海に落ちる。

巨人は海に落ち、徐々にその体を石かしていく、

そして・・・。

この物語の主人公、「カンザキ・アキラ」が目覚めました。

世界観などの設定（前書き）

ネタバレもそれなりにふくみます。

世界観などの設定

2027年が舞台

TPC・・・基本設定は「ウルトラマンティガ・ウルトラマンダイナ」と同じ。

GUTS・2nd・・・主人公、カンザキ・アキラが属しているTPCのチーム。

ダイブハンガー（これまた「ティガ」と同じ設定）を中心に活動している。

名前の通り、「第二期GUTS」（平成セブンのウルトラ警備隊と同じ）

コスモ・ストライカー・・・隊長はカナダ。

アキモト・ルイが所属している。

宇宙を舞台に活躍している。

ライドメカ

ガッツウィング1号・・・色は黄色。性能は「ダイナ」に出てきたガッツシャドーと同じ。ネオマキシマブースターという装備をつければ宇宙へ向かうことも可能（この時の外見は黄色いスノーホワイト）。

ガッツウィング2号・・・今作ではスペシウム砲を装備されている。

ガッツウィングEX-J・・・性能は「ティガ・ダイナ」と同じ。
号を分離させればスペシウム砲を発射させることが出来る。

シャーロック・・・二人乗りの「GUTS・2nd」専用の車。

ガロワ飛行艇・・・「ウルトラマンティガ・ダイナ」にも登場している。基本性能は変わらないが、ステルス機能が追加されている。

コネリー09・・・アキラがよく乗る、TPCの新型の飛行艇。旧型であるコネリー07は救助艇であるため最低限の武装しかなかったがこの機体はガッツウィング1号と同等の戦闘力を保持している。

武装

スペシウム砲・・・火星でとれる「スペシウム」が原料である。
威力は1匹の怪獣を倒せるほど強い（ただしダメージは喰らうが、倒せない怪獣もいる）。

変身アイテム「ライトカトリッジ」・・・もともとはただのバズーカのエネルギー源である物。
それにツインの光が宿った。
それ以降、アキラが変身する際に使用する。

登場人物（前書き）

ここで、書くのもどうかと思うのですが、田中実さん、ご冥福をお祈りします。

話を変えてここではネタバレを含みますので、読みたくない人は読まないでください。

登場人物

「巨人」

ウルトラマンツイン

性格は軽い。しかし自分の仕事は最後までやる。なぜ石像になっていたかは不明。両腕にはアームドツインという装飾品がある。必殺技はセンチラル光線

「TPC・GUTS 2nd」

カンザキ・アキラ隊員

本作の主人公。23歳。男性。優しい青年だが、熱くなると後先のことを考えずに行動する。また疑問に思ったことはすぐに解決しないと気がすまない。ツインと出会い生活が一変する。孤児院出身で過去の事はあまり語らない。

サクマ・ミホ隊員

本作のヒロイン。22歳。女性。アキラとは、仲が良い。（そのためよく付き合っているのかと聞かれる）緊張するとどもる。ちなみに飛行機の操縦は、チームの中で1番上手い。

シンジヨウ・テツオ隊長

ご存知撃墜コンビの1人（笑）。46歳。男性。アストロノーツとしての自分の役目は終わったと考え、地球に帰還、GUTS・2ndの隊長となった。たまに「シーシミッサ」と言う。

オオツカ・ノブオ副隊長

36歳。男性。副隊長としてシンジヨウをサポートしている。ちなみに既婚者。あまり目立たない（笑）二児の父親であるためか、人の心を読むのは得意である

タグチ・ヒロキ隊員

32歳。男性。アナライザー担当でその経験を活かし、石像の解析を手伝った。趣味は、研究をすること。面倒臭がりである。

ワタベ・アヤ隊員

27歳。女性。通信担当。アキラのことを「カンザキ君」、ヨシオカのことを「ヨシオカ君」と呼ぶ。ミホとは仲が良い。何気に銃の扱いはシンジヨウ並みにうまい

ヨシオカ・ケンジ隊員

20歳。男性。チームの中で1番若い。そのため、パシリをやることが多い。死ぬことに対し、恐怖を抱いている？

「TPC・幹部」

ナカタ・ソウイチロウ総監

コンドウ参謀

イルマ・メグミ参謀

シバタ参謀

これより下はゲスト扱い

「TPC・その他」

ヤズミ（シンジヨウ）・マユミ

マイケル・パーカー

アメリカ支部のオペレーター。32歳。男性。性格はいい加減。片言の日本語で話す。

ヤマダ・トシヒコ

23歳。アキラとは同じ孤児院で育った。

アキモト・ルイ

23歳。コスモ・ストライカー隊に所属している。自分の名前にコンプレックスを抱いている。パイロットとしての腕前は一流。

カナダ

コスモ・ストライカー隊の隊長。

普段は冷静。

また、自己犠牲な性格である。

「民間人」

テジマ・ゴロウ

コウタ少年・・・9歳。『ウルトラマン』が大好きな少年。父親がTPCに勤務しているため、ちよくちよくダイブハンガー指令室に遊びに来る。

「第一期GUTS」

マドカ・ダイゴ

「ウルトラマンティガ」の主人公。かつてウルトラマンティガとして苦悩しながらも、仲間を守るため戦った。現在は火星で植物の研究をしており、今回は半年間の休暇で家族と一緒に地球に来ている。因みに恐妻家らしい。

マドカ・レナ

ダイゴの妻。GUTSにいたころは、エースパイロットでその腕は

まだ落ちていない。

第1話 古代の石像（前書き）

本格的に物語が始まります。

第1話 古代の石像

また、あの夢かとアキラは思った。最近、彼は同じ夢を見ていた。

銀と赤の巨人については分からないが、あのアンモナイトのような奴なら、分かる。

あれは「邪神 ガタノゾーア」だ。

（だけど、あいつは倒されたはずだ。ティガと光となった俺たちに）

そんなことを考えていながら携帯電話を見たら、なんと同じ人から、25件以上の、メールが来ている。

しかも、1時間前から。

・・・少し呆れた。

そう思いながら、彼は、パジャマのまま部屋を出た。

メールの送り主は、彼と同僚の、サクマ・ミホ隊員。

彼女とは、アキラが属している部隊「GUTS・2nd」の、同僚であった。

配属された時期こそ違うが、年が部隊の中で一番近いこともあり、仲はいい。

何かあったのか、そう思いながら、彼女からのメールに書いてあった待ち合わせの場所、「GUTS・2nd」の指令本部へと、向かった。

ミホ「遅いよ。カンザキ」

アキラ「俺は今日、非番なの。何だよ、用って？」

ミホ「残念ながら、休みはなしよ」

アキラ「はあ!？」

せつかく久しぶりの休みだったのに…、どうせ、また怪獣が出たんだ、と思いながらも理由を聞いた。

しかし、彼の予想は外れた。

ミホ「今日はね、ルルイエの付近から出てきた石像の輸送だって」
ルルイエは最近海上に姿を再び現せた。

これを不吉の前兆だと言う人もいたが、科学者は逆に古代文明について再び研究できると、チームをつくってルルイエに向かった。

アキラ「でもさあ、何で俺たちが、その輸送を手伝う必要があるの？」

ミホ「あんだ、勘違いしてない？その石像、ただの石像じゃないのよ」

アキラ「じゃあ、どついう石像だよ？」

ミホ「ウルトラマンに似てるのよ」

アキラ「え？・・・ってことは・・・」

ミホ「途中で怪獣と遭遇したら危険つてことよ。」

アキラ「ああ、それでか。じゃあ、俺制服に着替えてくるわ。・
・そつえばシンジヨウ隊長達は？」

ミホ「先に行つてるわ。あんだが起きたら1号で来いつて」

アキラが制服に着替えた後、2人はガッツウイング1号に乗った。

ちなみに前は、ミホで後ろは、アキラだ。（飛行機の操作は、ミホの方がうまい）アキラとミホを乗せた1号は、石像がある太平洋格納庫に到着した。

そこには、シンジヨウ隊長達が休憩室で、雑談をしていた。

シンジヨウ「遅いぞ。2人供」

ミホ「だつて、しょうがないじゃないですか。カンザキ隊員は、寝坊助なんですから。」

アキラ「サクマー!!」

オオツカ「ハハハハハ。カンザキ、そうあつくなるなって」

アキラ「……。それはそうとして、タグチ隊員。俺石像見たいんですけど」

アキラは、期待を込めた眼差しで、タグチを見る。

タグチ「わかってる。2番格納庫にあるよ。」

アキラ「ありがとうございます!!」

走っていったアキラを見ながらミホは、言う。

ミホ「あたしも見に行きます!」

そう言つて、ミホも走っていった。

シンジヨウ「若いつていいねえ」

2番格納庫に着いた2人の目には、例の石像が映る。

アキラは、驚いた。

なぜなら、巨人の石像は……

アキラ「夢に出てきた、銀と赤の巨人!？」

ミホ「？」

その時だ。

「怪獣がこちらにむかっています！！戦闘準備を！！繰り返します。怪獣がこちらにむかっています！！戦闘準備を！！」

怪獣の狙いは、巨人の石像。

GUTS・2ndはなんとしても、石像を守るため怪獣と激闘を繰り広げるが？

果たして、勝つのは、どっちだ！？

次回ウルトラマンツイン第2話、「復活の光」

次回も、皆で読もう！！

第1話 古代の石像（後書き）

タグチ隊員は、アナライザーということで。

次回予告は、最後だけレオのを真似しました。

もしリクエストがあれば、可能な限りやります。

第2話 復活の光

- 古代怪鳥 ウィゲル -

アキラとミホは、通路でシンジヨウ達と合流する。

アキラ「隊長！！怪獣の狙いって巨人のせ・・・」

シンジヨウ「そんなこと言わなくてもわかってる！！ワタベ」

ワタベ「はい！」

シンジヨウ「お前は、TPC本部に通信して援軍を要請、それと同時にスペシウム砲の使用許可をもらってくれ」

スペシウム砲は、2019年に開発され、2023年にそれぞれ配備された。

威力は、ネオマキシマ砲と比べたら少ないものの、怪獣1匹に対しては強大なものとなる。

しかし、それを使うには、TPC本部からの許可が必要なのだ。

ワタベ「わかりました」

ワタベは早速、通信機「PDI」を使って本部に連絡を入れた。

シンジヨウ「ここには、ガッツウィングは1号は2機、2号が1機、ガッツイーグルが1機ある。サクマ、カンザキ」

アキラ ミホ「はい！」

シンジヨウ「お前達は、1号と に乗れ！！オオツカ、タグチ、ヨシオカは2号に乗れ！！なんとしてでもウルトラマンの石像を守るぞ！！GUTS・2nd、出動！！」

アキラ ミホ オオツカ タグチ ヨシオカ「了解！！」

1号にそれぞれシンジヨウとミホ、 にアキラ、2号にオオツカ達を乗り、怪獣がいる所に向かった。

その途中でワタベから、スペシウム砲使用の許可が取れたが、援軍はあまり期待できないことを伝えられた。

かつてティガの地にあった石像を破壊したメルバに似ている怪獣は、太平洋格納庫に1番近い無人島の上空にいた。

そこに、GUTS・2ndの戦闘機が来た。

シンジヨウ「羽の付け根を狙え。鳥みたいな奴は、そこが弱点だ」

それを聞いた隊員達は、怪獣・ウィグル - の羽の付け根を狙った。

効果はあったようで、ウィグルは無人島に墜落した。

先程の攻撃がよほど痛かったのか、ウィグルはジタバタしており、反撃する気は無いようだ。

シンジヨウ「オオツカ、奴にスペシウム砲をお見舞いしてやれ！」

オオツカ「わかりました」

2号は機体前部を左右に展開させ、スペシウム砲を出した。

タグチ「エネルギー100%。怪獣に照準を合わせました」

オオツカ「よし、撃て！！」

ヨシオカ「はい！スペシウム砲、発射！！」

2号から出た光線は怪獣を直撃、爆発を起こす。

ヨシオカ「やった！」

アキラ「よし！」

皆が、勝利を確信した瞬間。

タグチ「待ってください！この反応・・・うわあああああああ
あ！！！」

煙の中から突如、光弾が飛び出し、2号を襲ったのだ。

シンジヨウ「！！ オオツカ、タグチ、ヨシオカ、すぐに脱出しろ

！そして地上から攻撃するんだ！！」

オオツカ、タグチ、ヨシオカ「了解！！」

オオツカ達が脱出した後、2号は地面に激突し、爆発した。

爆発した後ウィグルが現れ、残った戦闘機に攻撃を加えた。

ミホ「スペシウム砲が効かないなんて・・・」

アキラ「ちくしょう・・・諦めるか！」

が怪獣に攻撃を加える。

太平洋格納庫にある、巨人の石像にあるカラータイマーのようなものが突然赤く点滅し始めた。

シンジヨウ「カンザキ！無茶をするな！！」

アキラ「でも！あいつを止めないと、石像が破壊されるんですよ！！」

シンジヨウ「あいつは、もう飛べない。簡単には、この島から出られないぞ！」

ミホ「カンザキ、持久戦にすれば絶対に勝てるって！」

シンジョウとミホの説得も聞かず は、怪獣の近くへ・・・。

そして、

ミホ「アキラー!!」

は、撃墜された。

シンジョウ「カンザキ!! 脱出しろ! 早くするんだ!!」

しかし、に乗っているアキラは気絶しており、脱出はおろか、通信も出来ない。

同じとき、太平洋格納庫では異変が起きていた。

ワタベ「一体、何が起きたんですか？」

ワタベは、今格納庫のモニタールームにおり、近くにいる係員に聞いていた。

係員A「自分もよく分らないんですが、なんでも石像の胸にある突起物が輝き始めたらそうですよ」

ワタベ「そんなことって・・・」

その時。

係員B「おい！2番格納庫につなげてくれ！」

係員A「何があった？」

係員B「いいから早く!!」

係員Aはコンピューターを操作して、2番格納庫の映像を出す。

巨人の石像が眩い光を全身から発していた。

そして、一瞬動きを見せた瞬間画面から消えた。

ワタベ「これって今、流れている映像よね？」

係員A「は、はい・・・」

ワタベ「・・・隊長達に連絡しなきゃ」

ワタベは手を震わせながらPDIを持った。

も撃墜し、爆発した。

しかし、2号と違うのはパイロットが脱出しなかったことだ。

おそらく、アキラは死んだ。

誰もがそう思った。

そこにワタベから、通信が入る。

ワタベ「隊長！大変なことが・・・」

シンジョウ「あとにしてくれ・・・」

ワタベ「どうしたんですか？そんな暗い顔をして？」

オオツカ「カンザキが死んだ・・・」

ワタベ「え？それって・・・」

タグチ「まだ確認はしていないがあの状況だと・・・」

ワタベ「そんな・・・。カンザキ君が死んだ？」

オオツカ「用はなんだ？俺が聞こつ。」

ワタベは、泣きながらこたえた。

ワタベ「・・・はい。巨人の石像が消えました。」

シンジヨウ「なんだと!？」

ヨシオカ「隊長、聞いてたんですか？」

シンジヨウ「そんな・・・。まさか・・・。オオツカ!!」

オオツカ「はい!!」

シンジヨウ「お前は、カンザキが の近くにいるか、確認してくれ!!」

オオツカ「・・・？了解しました。」

シンジヨウ「タグチ、ヨシオカ!お前達は、怪獣を攻撃するんだ!!」

タグチ、ヨシオカ「了解!!」

シンジヨウ「サクマ!聞こえるか!？サクマ!!」

ミホ「は、はい。なん・・・ですか」

シンジヨウ「お前も、カンザキを探すんだ」

ミホ「・・・はい」

ミホは地上に1号をおろした。

シンジヨウ達は、ウイグルに攻撃を加える。

ウイグルもそれに負けじと口から、光弾を出す。

その光弾の一つが1号に当たってしまふ。

かすただけではあつたが一時的に操縦出来なくなり、ウイグルはそこを狙い光弾を出した。

もつ、間に合わない、シンジヨウが諦めた時…

突然目の前に眩い光が現れ、光弾は消滅した。

シンジヨウ「な、なんだ？」

その光が消えると、目の前にいたのは、数分前まで石像だった巨人が立っていた。

オオツカ「ウルトラ・・・マン・・・」

隊員達が驚いているうちに巨人・ウルトラマン・は、両腕につけている2つの装飾品から光の剣を出し走る。

驚いたウィグルは口から光弾を何十発と出す。

しかしウルトラマンはそれらを避け、避けきれないものは光の剣で弾き返す。

ウルトラマンはウィグルに近づいてきた。

そして…

鈍い音が聞こえたとき、ウルトラマンはウィグルの後ろにいた。

ウルトラマンが光の剣をしまったとき、ウイグルの首が落ち、残った体は真っ二つに割れた。

ヨシオカ「・・・やった。今度こそあいつを倒したんだ！」

タグチ「！？おい、巨人の様子が変だぞ！！」

タグチの言う通りだった。

ウルトラマンのカラータイマーが今まで青色だったが、突然赤く点滅しはじめたのだ。

ウルトラマンは力尽き、倒れる。

一瞬 が墜落したところを見ると透明となっていき消えた。

ヨシオカ「消えた...」

シンジヨウ「タグチ、ヨシオカ、大丈夫か？」

タグチ「あ、はい。こっちは大丈夫です。」

オオツカ「隊長！聞こえますか！？」

オオツカから通信がかかってくる。

シンジヨウ「どうした」

オオツカ「カンザキが、死にかけています！！」

シンジヨウ「！！生きているのか！？」

オオツカ「はい！ですが先ほど申したとおり…」

シンジヨウ「分かった！サクマの1号に乗せ、メディカルセンターに向かえ！！」

アキラを乗せた1号は早急にメディカルセンターに向かった。

その後、手術は成功したがアキラは眠ったままだった。

その夜、アキラの病室にはミホがいた。

しかし、付きっきりで看病(?)していたらしく、すでに寝ている。

その病室に小さな光が現れ、アキラの体の中に入っていた。

全てが闇に覆われたような空間にアキラはいた。

自分は死んだのか・・・、アキラはそう思っていると、突然その空間が輝き始めた。

それと同時に目の前には、アキラの夢に出てきた銀と赤の巨人・ウルトラマン・が現れた。

いや、巨人といってもアキラと身長は変わらないだろう。

アキラが戸惑っていると、ウルトラマンが話しかけてきた。

ウルトラマン「はじめまして・・・だな。地球人、俺が早く復活していれば君は助かっていた。本当にごめん。」

アキラ「君は・・・一体何者なんだ？」

ウルトラマン「俺は・・・かつての地球の守護者だ。」

アキラ「かつての？」

ウルトラマン「ああ、君が望めば今の地球の守護者になれる。だが・・・」

アキラ「本当か！？だつたらなつてく…」

ウルトラマン「残念ながら、今の状態じゃ無理だ。」

アキラ「へ？じゃあ、どうするんだよ。」

アキラからの質問にウルトラマンは答える。

ウルトラマン「君と俺が融合をするんだ。」

アキラ「ちょっと待て。何で俺と君が融合しなきゃいけないんだよ」

ウルトラマン「俺のエネルギーは今少ない。だからこそ普段からエネルギーを使うのは避けたい」

アキラ「そうか……。」

アキラは困惑していたが、

アキラ「……分かった。地球のためだ。俺の体を使ってくれ」

ウルトラマン「なんか誤解してないか？俺は話し相手にはなるが、君の私生活までには干渉しない。必要な時にだけ呼んでくれればいい」

アキラ「分かった」

ウルトラマン「じゃあ、融合をはじめろ」

アキラ「……そういえば君の名前は？俺はカンザキ・アキラって

言うんだ」

ウルトラマン「俺の名前は、ツイン。ウルトラマンツインだ」

アキラは目覚めた。

体中が痛かったが、気分は最高だ。

そして、ここが病室だと分かるのと同時に誰かがいるのに気づいた。

アキラ「さ、サクマ？」

ミホは寝ていた。

アキラはその寝顔が可愛いと思った。

そしてアキラもまた眠くなり、目を閉じた。

冷たい海から現れたのにとっても熱い怪獣、バーヌ。

そんな矛盾した怪獣は東京に向かっている！！

急げ、GUTS・2nd！

変身するんだ、カンザキ・アキラ！

次回ウルトラマンツイン第3話、「その怪獣、東京へ」

次回も皆で読もう！！

第2話 復活の光

- 古代怪鳥 ウィゲル - (後書き)

戦闘場面短ッ!! (汗)

・・・まあ、初登場(?) 補正だと思ってください。

ウィング1号に関してはダイナで登場したガッツシャドーと同等と
いうことで。

感想をお待ちしております。

番外編 part 1 (前書き)

今回はちょっと息抜きに作りました

番外編 part 1

久しぶりにダイゴが地球に帰って来る。

もちろんレナとその子供たちと一緒に。

俺は嬉しかった。

帰って来る日に休暇を取り（オオツカ、がんばれ）、彼らが乗ってくるロケットを待った。

ダイゴ「シンジヨウさん！今更ですが、隊長就任おめでとございます！」

ロケットから降りてきたダイゴはこう言った。

レナ「シンジヨウさん、お久しぶりです」

シンジヨウ「お二人さんは相変わらず仲が良いね」

ヒカリ「シンジヨウさん、お母さんとお父さんこの間喧嘩してたよ」

ツバサ「それでね、パパ謝ってたの。『ごめんなさい、二度としません』って」

ダイゴ「ツバサ！」

俺は笑った。

この2人がなんにも変わってなくて。

本当に嬉しかった。

その日の午後には2人共飛行機に乗って飛びたかったらしく、俺は知り合いが経営している航空会社にいた。

その会社はセスナしか扱っていないが、何年ぶりに飛ぶ2人にはちょうどいいだろう。

レナは子供たちを乗せ、空を飛んだ。

その腕は落ちてはいないようだ。

次はダイゴと俺がセスナに乗った。

ダイゴがレナたちと一緒に乗らなかつたのは、子供たちにお父さんのかっこいい姿を見せたいからだそうだ。

レナたちと交代する時にレナを見たら、不安そうな目をしていた。

・・・嫌な予感がする。

ダイゴが操縦するセスナは順調に飛んでいた。

ダイゴ「本当に懐かしいですね。あの頃に戻った気分ですよ」

シンジヨウ「ああ、全くだぜ。しかしレナと喧嘩したら、やっぱりお前が負けるのか？」

ダイゴ「え？・・・まあ、そうですね。」

俺は笑ってしまった。

ダイゴ「笑わないでくださいよ！・・・ん？」

シンジヨウ「どうした？」

ダイゴ「なんかプロペラ止まって・・・」

シンジヨウ「・・・」

•
•
•

ダイゴ シンジ ヲ「またかあああああああああああ
あああああ！！！！！」

番外編 part 1 (後書き)

結局、墜落コンビはいつまでたっても墜落コンビ(笑)

感想をお待ちしております。

第3話 その怪獣、東京へ - 火炎怪獣 パーヌ -

日本のどこかにあるTPC本部では、シンジヨウが呼び出され査問会が開かれた。

TPCの参謀達は、シンジヨウに質問する。

ナカタ「では、君はどう思うかね。新しいウルトラマンについて」

やはりそうきたか・・・、シンジヨウはそう思つと、こう答えた。

シンジヨウ「おそらく、彼は味方です」

コンドウ「なぜそう思つ？」

シンジヨウ「ウルトラマンティガとどこか雰囲気似ていたからです」

コンドウ「どうして分かる？」

シンジヨウ「あのウルトラマンは俺・・・あ、いや、私をかばいました。映像だと偶然に見えます。しかし、どこか別の場所からでも現れることは出来たはずですよ。私は、かつてウルトラマンティガと一緒に戦いました。彼もそういうことをしてきたのを何回も見えました。だからこそ、分かるんです。」

シバタ「ふん。くだらない」

シンジヨウ「どういう意味ですか？」

シバタ「所詮ウルトラマンは怪獣と同じだ。いや、あいつらさえいなければ他の怪獣は現れないんじゃないのか？今回の怪獣だって巨人の石像が目的だったのだろう。まったく人類からしたらウルトラマンがいるほうが迷惑だ。」

シンジヨウ「今なんて言った？」

シバタ「何？」

シンジヨウ「あんたは、自分の言ってることが分かっているのか！あの時、毎週のように怪獣が現れた。その中には確かにあんたの言う通り、ティガを倒すために現れた怪獣はいた。だが人類を狙って来たほうがほとんどだ！しかし、そいつらを倒したのは、ティガだ！あいつはきつと苦しんでいたんだ！それなのに人類は、あいつに對して何もすることが出来なかった！！それどころかあんたのような人間は、何も知らないのにそういうこ……」

イルマ「シンジヨウ隊長！熱くならないで！！」

シンジヨウ「あ……すいませんでした。」

ナカタ「ウルトラマンが味方かという議論は今度でいい。シンジヨウ隊長、今日は帰ってよろしい」

シンジヨウ「……はい」

シンジヨウは部屋から出ていった。

シンジョウが帰った後参謀達は、会議を開いた。

ナカタ「イルマ参謀、君はどう思う？」

イルマ「私は・・・多分彼は味方だと思います」

コンドウ「どうしてそう思うんだ？」

イルマ「勘・・・でしょうか」

シバタは、まったくだらないと言いたげにため息をつき、こう言った。

シバタ「そんなことよりも奴が敵だったことを考えて、ネオマキシマ砲を準備すべきだ」

コンドウ「シバタ、あれは駄目だ！危険すぎる！」

シバタ「だがあれを使わないと倒せないと私は思うね。スペシウム砲なんて効かないだろうよ。」

ナカタ「シバタ、そこまでにしる。」

ナカタは結論の出ない会議にイライラしていた。

ナカタ「ウルトラマンが敵であろうと今は怪獣が出てくる問題のほうが必要だ」

イルマ「それは・・・そうですね」

ウルトラマンツインが復活してから、早くも1ヶ月が過ぎた。

アキラの怪我は完治し、明日には復帰する予定だ。

しかし、なにかあるといけないので現在はまだ入院している。

そんな時に、アキラのいる病室に今、ミホが来ている。

アキラ「サクマ、明日会えるんだから、わざわざ来なくても・・・」

ミホ「いいの。あたしが来たと思って思ったから来ただけなんだからなんだそれ、とアキラは思ったが、それよりも聞きたいことがあった。」

アキラ「サクマさあ」

ミホ「何？」

アキラ「そういえば隊長が言ってたけど、俺が撃墜された時、カンザキじゃなくてアキラって呼んだらしいね」

ミホはすぐに赤面した。

ミホ「な、そそその、ああああのね」

アキラ「なんでそこまで動揺してるんだよ」

ミホ「だだだだってあの時、アキラって言ったか、今考えても分からないんだもの。……ってまた言っちゃった！？」

アキラ「……もう、俺のこと、アキラって呼んでいいよ。」

ミホ「え？本当にいいの？」

アキラ「うん。別に構わないよ。」

ミホ「じゃあ、あたしのこと……ミホって呼んで。」

アキラ「え？な、なんで？」

今度はアキラが赤面した。

ミホ「いいじゃない、あたしも構わないよ。特にアキラだったら。」

アキラ「じゃあ、み、ミホ……」

ミホ「アキラって、かわいい」

アキラ「笑うなよ！」

しかし、その後に病室では笑い声で溢れた。

ミホが帰った後、アキラは寝ようとしたが、頭の中で声が響いた。

ツイン「いい恋愛してるねえ」

アキラ「恋愛じゃないって！」

ツイン「けど、俺から見たら立派な恋愛だぜ。なあ、2人で過ごした夜はどうだった？」

アキラ「だから、そんな仲じゃないって！！俺はもう寝るぞ！！」

アキラとツインはこの1ヶ月の間でとても仲が良くなっていた。

誰も病室に来ないときには、2人で話し合っていたからだ。

次の日、アキラは制服に着替え、ダイブハンガーの指令室にいた。

アキラ「皆さん、本当に迷惑をかけてしまつて申し訳ありません。」

アキラは頭を下げる。

オオツカ「いいっていいって。」

タグチ「そうそう、命は一つしかないからね。その命、大事にするんだぞ。」

ワタベ「でも、どうしてたったの1ヶ月で治つたの？」

ヨシオカ「あ、それ僕も聞きたいです。」

アキラは悩んだ。

おそらく、怪我が早く治つたのは、ツインと融合したのが原因だろう。

しかし、それを言つたら・・・

ミホ「ヨシオカ隊員、そんなことアキラに聞いても分からないと思うわ。」

ヨシオカ「なんで僕だけ？」

アキラはほっとした、が次の瞬間、

シンジヨウ「カンザキ、退院おめでとう。」

シンジヨウはそう言いながらアキラにたくさんの書類を渡す。

アキラ「え？・・・これって・・・」

シンジヨウ「お前が1ヶ月休んでた分の始末書だ。期限は来週の火曜日までだ。」

アキラ「それって...ちょうど一週間後じゃないですか!!」

シンジヨウ「勝手に怪獣を攻撃して墜ちた罰だと思え」

アキラは助けを求めるように皆を見るが、誰もアキラを見ていなかった。

アキラ「そんなあ...」

1週間がすぎ（アキラはなんとか始末書を全て書き終えた）、アメリカ・アラスカに近い海では、TPC・アメリカ支部科学班が調査

をしていた。

何の調査かというところの付近では最近、異様なほどのエネルギーが出ていからだ。

隊員A「しかし、ここはいつ来ても冷たいですね」

隊員B「終わったら、暖かいコーヒーでも飲もうぜ」

この2人は小型潜水艦に乗っている。

また、海の上空ではこの小型潜水艦を運んできた飛行機がある。

その飛行機に乗っている隊長から、潜水艦に通信がきた。

隊長「どうだ。何か見つかったか？」

隊員B「いいえ、何も見つかりません」

隊員A「ぶっちゃけコンピューターのミスじゃないんで・・・なんだ、ありゃ？」

隊長「どうした？」

隊員B「か、怪獣です！」

隊員達がみたのは、確かに怪獣だった。

しかし、怪獣は氷に覆われていた。

まるで封印されているように・・・。

隊長「攻撃するんだ！厄介なものはすぐに倒した方がいい！」

隊員A「了解しました！」

この潜水艦には邪魔な岩等を破壊するために、最低限の武装がある。

隊員B「怪獣め、砕け散れ！！」

潜水艦から魚雷が発射され、怪獣に命中する。

だが・・・

隊員A「海の温度が急激に上がっています！」

隊長「なんだと！？」

隊員Bはもしかしたらと思い、怪獣の方を見た。

そこには氷は無く、怪獣が体を赤く光らせていた。

隊員B「怪獣が生きています！」

隊長「ダニイ！？・・・モンスターキャッチャーを怪獣に撃つてすぐに離脱するんだ！」

隊員A「了解！」

潜水艦から怪獣に向かってモンスターキャッチャーが出る。

それが当たるのを確認すると潜水艦は海上に向かった。

怪獣は、潜水艦を攻撃する気は無く西に向かって、海の中を歩き始めた。

それから2時間後、ダイブハンガーでは、

ワタベ「はい、こちらダイブハンガー、GUTS・2nd本部」

？「コチラハ、アメリカ支部デス。シンジヨウcommander
ニ報告ヲシタインデスガ・・・」

オオツカ「あれ、マイケルじゃないか！」

？「Mr・オオツカカイ？ソウイエバ、君ハココニ配属サレテイタ
ネ」

ミホ「副隊長、この人誰ですか？」

ミホがオオツカに尋ねる。

オオツカ「こいつは、マイケル・パーカー、アメリカ支部のオペレーターだ。以前俺がTPC一般隊員だった時にはじめてあった。・
・マイケル、シンジヨウ隊長は今いないから俺が話を聞くよ」

マイケル「I see・マア、簡潔二話スト怪獣ガソッチ二向カッテルヨ」

オオツカたちは驚く。

オオツカ「なんだって!？」

タグチ「ちよつとそれということですか!？」

マイケル「落着イテ。本当ハコッチガ倒ス予定ダツタケド、今怪獣ガイルノハソッチノ管轄ダカラ、ソッチ二任セルトイウノガ上ノ判断サ」

ヨシオカ「そんな人任せな…」

マイケル「怪獣二ハモンスターキャッチャーヲ撃ツテアルカラ、キツトスグ二分カルヨ。ソレジャ」

マイケルが通信を切った。

アキラ「どうするんですか!？」

オオツカ「・・・とりあえず、ワタベは怪獣の居場所を探知、それと同時にそいつがどこに向かうかも予測してくれ」

ワタベ「分かりました」

ミホ「ところでシンジヨウ隊長は今どこにいるんですか？」

アキラ「確かに隊長がいないと…」

シンジヨウ「俺ならここにいるぜ」

アキラたちが後ろを見ると、シンジヨウが立っていた。

タグチ「隊長！いつの間に！！」

シンジヨウ「5分前からだ。だから話は全て聞いた」

オオツカ「で、どうするんですか？」

シンジヨウ「その怪獣の進路によるが、まず怪獣が地上に上がった
ら上空と地上から攻撃といった感じかな」

ヨシオカ「それでスペシウム砲ですね！」

タグチ「でも地上に上がらなかつたら、どうするんですか？」

シンジヨウ「だから怪獣の進路によるって、言っただろ。ワタベ、
怪獣がどこに向かっているか分かったか？」

ワタベ「それが・・・東京です！」

シンジヨウ「なんだって！？」

シンジヨウたちは画面を見る。

画面には怪獣の現在の位置（浦賀水道）と、予測進路の先には東京があった。

GUTS・2ndは若州にいる。

怪獣の予定進路で地上に現れるのはここだからだ。

上空では、ミホが乗っている1号、オオツカ、タグチ、ワタベが乗る2号（スペシウム砲使用の許可は降りている）。

地上には、シンジヨウ、ヨシオカ、そしてアキラがいる（ちなみに、アキラはバズーカをもっている）。

シンジヨウ「もうすぐだぞ…」

シンジヨウの言葉に反応するかのように何かが水しぶき上げて海上に現れた。

火炎怪獣 バーヌだ。

シンジヨウ「攻撃開始だ!!」

アキラ、ミホ、オオツカ、タグチ、ワタベ、ヨシオカ「了解!!」

先制したのは、GUTS・2ndだ。

バーヌは悲鳴をあげるがすぐに口から火球を出して2号を襲う。

アキラはバズーカを走りながら撃ち、時々くる火球をなんとか避ける。

シンジヨウ、ヨシオカも持っているガッツハイパーガンを持ってバーヌを攻撃する。

戦いは、GUTS・2ndが優勢だった。

しかし…

オオツカ「うわぁ！」

2号が被弾してしまった。

シンジヨウ「脱出しろ！うわぁ！」

ヨシオカ「わああああああああ！」

シンジヨウとヨシオカは火球の爆発に巻き込まれてしまった。

アキラ「隊長！ヨシオカ！チクショー！」

アキラはバズーカを撃つ。

が、何も起こらない。

アキラ「そんな…こんな時に弾切れかよ！」

アキラはバズーカから15cmで円筒形のカートリッジを取り出す。

目の前ではバー又は1号を攻撃していた。

アキラは嫌な予感がした。

アキラ（駄目だ…。あのままじゃミホがやられてしまう！）

アキラ「そんなこと、させるかあああああああああああああ

あああああああ！！」

その時、アキラの体から光が出てきて、その光がカートリッジに入っていく。

アキラ（これは・・・ツイン、君なのか？）

アキラはまるで知っていたように、カートリッジを持っていた右手を上げる。

カートリッジは光を出す。

防戦をしていたミホの目の前に眩い大きな光が出る。

ミホ「これって、あの時の・・・」

そして光が消えた場所から巨人 ウルトラマンツインが現れた！

ツインはファイティング・ポーズをとり、バーヌと距離を置く。

バーヌは、火球を出した。

ツインはそれを避け、右手からダート光弾を放つ。

バーヌがそれに当たるのを確認して、ツインはバーヌを殴るため走る。

ピンチを察したバーヌは体を赤く発光させる。

ツインはバーヌを殴った。

バーヌは反動で後方へ飛ばされるが、ツインも手を持って痛がっている。

どうやら火傷を負ってしまったようだ。

バーヌはツインに尻尾を叩きつける。

ツインは反撃出来ずじっと耐えるが、隙を見てバーヌを殴り、押し倒した。

その時、ツインのカラータイマーが赤く点滅しはじめる。

ツインのカラータイマーの光が消える時、ツインは死んでしまうのだ。

バーヌはもう一度火球をだす。

ツインは避けきれないと思ったのか左腕を真上に上げる。

腕につけてある装飾品が^{アームドツイン}光を放ち、ツインの前に光のバリアが出て、火球から身を守る。

それと同時にツインは両腕をそれぞれ真横に伸ばす。

両腕を発光させ、ツインは胸の前で左腕を前に右腕を後ろに十字に組み、必殺技「センチラル光線」を出す。

光線はバーヌに直撃し、バーヌは爆発する。

ツインは両腕を真上に上げ、空へ飛び立った。

ミホは地上に降りてシンジョウたちの無事を確認したあと、アキラを探していた。

ミホ「アキラー！どこよー！」

ミホはまさかと思ったが・・・、

アキラ「ミホ！」

アキラが後ろからやってきた。

ミホ「アキラ！」

ミホはアキラに抱きつく。

アキラ「み、ミホ！恥ずかしいって！」

ミホ「バカ！死んじゃったって思ったじゃない！！！」

アキラはミホの顔を見ると、ミホは泣いていることに気づいた。

アキラはミホの頭を不器用に撫でる。

アキラ「俺は死なないって、絶対に……」

？「お熱いね」。2人共」

アキラとミホは、声のした方を見る。

するとチームの皆がアキラとミホを見ながら、笑っていた。

アキラとミホは素早く離れる。

笑う一同。

シンジヨウ「さて、帰るか」

ガッツウィング2号を直し、GUTS・2ndはダイブハンガーへ向かった。

1号の後部座席に乗っているアキラはツインに話しかけた。

アキラ＞なあ、ツイン＜

ツイン＞なんだ？＜

アキラ＞俺、君と融合して本当によかったって思ってる＜

ツイン＞俺はそう言ってもらえるだけで嬉しいよ＜

アキラはカートリッジを見つめる。

そしてこう言った。

アキラ＞これからも頑張ろうなく

宇宙から突然何かが降ってきた！
調査を進めるなかでタグチ隊員は、ある女性と出会うが・・・
次回ウルトラマンツイン、第4話「宇宙からの旅人」
次回も皆で読もう！！

第3話 その怪獣、東京へ - 火炎怪獣 バーヌ - (後書き)

なんかこれ書き終わったらすごく疲れた…

なんでだろう？

ご感想をお待ちしております。

番外編 part 2

セスナは軽めの故障で済んだけど、シンジヨウさんと一緒に会社の人に怒られた。

なんでシンジヨウさんと飛行機に乗ると絶対に墜落するんだ？

そんなことを考えても仕方がないので考えない。

明日は家族と全員で遊園地に行くから、なるべく暗いことは考えないようにしよう。

シンジヨウさんは明日仕事があるといってホテルの前で別れた。

一応、与えられた休暇は半年なのでこれからはこのホテルが家となる。

部屋は広く、4人家族が住むには十分じゃないだろうか。

ツバサ「パパ、僕もう眠いよ」

ヒカリ「じゃあ、部屋に行こう」

そう言って子供たちは自分たちの部屋に行く。

俺とレナは、その後に子供たちが寝たのを確認し、2人でベランダに出た。

レナ「やっぱり地球の夜景って綺麗ね」

ダイゴ「15年ぶりだしね。」

あ、でもレナは確か9年前にヒカリを連れて行ったよね。
あの時はビックリしたよ。

だって帰ってきたら、家に誰も居なかったんだもん」

レナ「ちゃんと手紙も書いたし、電話もしたじゃない！」

レナがちよっと怒りながら言った。

俺はレナと喧嘩して勝ったことが無いから慌て謝った。

するとレナはいいよと言ってくれた。

レナ「ねえ、今まで気になってたんだけど…」

レナが遠慮がちに聞いてくる。

ダイゴ「何？レナ」

レナ「・・・ウルトラマンにはもうなれないんだよね？」

ダイゴ「ど、どうしてそんなこと聞くの？」

俺は動揺していた。

レナ「だって…荷物、整理してたときに、スパークレンスができたんだもの」

ダイゴ「あ・・・。」

彼女にはもう隠し事は出来ない、俺は自分の分かる範囲内で話をした。

ダイゴ「多分・・・なれると思う・・・。」

あのあと1度もなかったことが無いから分からないけど・・・。」

レナ「じゃあ、ここに怪獣が現れたら、ダイゴはまた戦うの？」

ダイゴ「・・・今はこの地球には新しいウルトラマンがいるらしいから大丈夫だよ」

ダイゴはそう言ったけど、それは多分、いや絶対に私を安心させるために言ったのだ。

レナ「ダイゴ・・・別に無理して答えなくていいんだよ」

ダイゴ「無理なんかしてないさ。
でも変身する時はレナや、ヒカリとツバサを守りたい時だと思う。」

今のは偽りの無い本心だろう。

私は何故か涙が出てしまった。

ダイゴ「レ、レナ。

どうしたの？」

ダイゴが戸惑いながら、聞いてきた。

レナ「感動したのよ。

あなたの言葉を聞いて…」

そう言って私は彼の背中に両手を回す。

ダイゴ「レナ…」

ダイゴも私を抱いてくれた。

月が私たち1つの影を照らしていた。

番外編 part 2 (後書き)

フラグを立てたぞ(笑)

感想をお待ちしております

第4話 宇宙からの旅人 - 宇宙人 トラベ星人 機械獣 ガルソラ -

日本の愛知県にある宇宙観測所。

そこでは日々宇宙から何かが地球に向かっていないか、衛星を介して太陽系を監視している。

その衛星から何かがきたと報告がきた。

係員はすぐに確認をするが周囲の宇宙には、何も無かった。

しかし、「それ」はもう地球に来ていた。

ワタベ「タグチ隊員、聞こえます?」

タグチ「ん、何?」

ワタベ「いきなりで悪いんですけど今どこですか?」

タグチ「え?」

・・・今、名古屋のH動物園だけど・・・」

タグチは休暇をとり、故郷の愛知県名古屋市にいる。

ワタベ「よかった」。

休暇を返上してすぐに宇宙観測所に向かってカンザキ君と合流してください。」

タグチ「はあ、どうしてだよ？」

ワタベ「詳しくはカンザキ君に聞いてください。
それでは」

タグチ「お、おい！

・・・切りやがった・・・。

こっちは手こぎボートに乗ってまだ5分しか経ってないのによ」

払ったお金がもったいないので、それから15分間その場にいた。

それから1時間後：

タグチ「あいつ、来てねーじゃん」

タグチは宇宙観測所の前にいた。

しかし、肝心のアキラがなくて話にならない。

タグチは苛立ちながらPDIを手に持った。

その時だ。

？「うわあああああああ！

た、助けてー！」

誰かが叫んだ。

タグチは驚くが、すぐに護身用の銃を持ち、建物の中に入る。

そのあと建物の近くの駐車場にシャーロックが入り、その中からアキラが出てきた。

アキラ（あれ、タグチ隊員がいないけど・・・。
もう中に入ったのかなあ？）

そう思うとアキラも建物の中に入っていた。

タグチ「誰かいませんか？」

建物の中は異様なほど静かだった。

タグチは慎重に足を進める。

すると誰かの手がタグチの右肩を掴んだ。

驚いたタグチは、銃を後ろに向ける。

が、そこにいたのは・・・、

アキラ「ウワッ！
ビククリした」

タグチ「なんだ、お前か…」

タグチは、銃を降ろし、歩き始める。

アキラ「どうしたんですか？
銃なんか持つて？」

タグチ「誰かが悲鳴をあげたんだ。」

アキラ「え、それってどういう意味ですか？」

タグチ「知ってたら苦労しねえよ。」

・・・そっいえば俺が呼ばれた理由って何だ？」

アキラ「ああ、それは・・・」

今から何時間前に、宇宙観測所の屋上に「何か」が落ちてきた。

隕石か宇宙船か分からない「何か」を調査するため、タグチは呼ばれたのだ。

タグチ「で、なんでお前が来たの？」

アキラ「ああ、俺は助手です。」

なんだかすごく不安だ、と思いながら2人は角を横切る。

すると…

タグチ「あそこにいるのは誰だ？」

アキラはタグチの指を指した方向を見ると2人ほど倒れているのが見える。

タグチとアキラは走っていく。

1人は女性でもう1人は男性だ。

タグチは女性に声をかける。

タグチ「大丈夫ですか!？」

アキラは男性の方に近寄ろうとした時、

目の前の空間から突如裂け目のようなものが現れ、その中から触手が現れた。

その触手は男性を捕らえ、裂け目の中に連れていこうとする。

アキラ「ウワッ!？」

アキラとタグチは突然のことに驚くが、すぐに銃を触手に向ける。

が、間に合わず男性は裂け目の中に入ってしまった。

タグチ「すぐにここから出るぞ!！」

アキラ「はい!！」

タグチは女性を抱え、アキラと一緒に走った。

シャーロックの中、といっても一応2人乗りなのでアキラは外に出ている。

アキラはシンジョウたちに報告を、タグチは女性の看護をしていた。

そして、女性の目が開く。

女性「ここは…?」

タグチ「気がつきましたか?

あ、俺たちは怪しい者じゃないです。

俺たちはGUTS・2ndの一員です。

まあ、俺は私服ですけど外にいる奴を見れば分かります。」

女性「そう…ですか…」。

あのここにいっても大じ…」

タグチ「ここは大丈夫です。

空間の裂け目は、あの建物の外には出れないようです。

なんというか、建物の空間が歪んでいるみたいですから…」

2人は黙り込む。

その時アキラが窓を叩いた。

タグチはマナベに失礼、と言いつ外に出る。

タグチ「どうした?」

アキラ「とりあえず本部に戻った方がいいかなと思って…」

タグチ「じゃあ、頼むわ」

アキラ「え、俺1人でやるんですか?」

タグチ「俺は今日、休日なの。

それなのに働いているんだぜ?

だから今日の仕事はここまで」

タグチはアキラの肩を叩いた。

アキラ「じゃあ、あの女性はどうするんですか？」

アキラが聞く。

タグチ「俺が近場の病院まで連れていく」

アキラ「・・・仕事するんですね」

シャーロックを運転しながら、アキラは本部に通信を入れた。

アキラ「こちら、カンザキ。

ダイブハンガー指令室、応答して下さい」

ミホ「こちら、ダイブハンガー指令室。

アキラ、どうしたの？」

アキラ「あれ、何でミホが出てんの？」

ミホ「ワタベ先輩は今、ランチタイムなの。
それであたしが代理よ。」

そういえばもうそんな時間だな、とアキラは思った。

ミホ「でもう一回言っけど、用って何？」

アキラ「ああ、宇宙観測所で働いている人のリストをこっちに送ってくれ」

ミホ「分かった。
・・・送ったわ」

アキラはシャーロックを近くの駐車場に止め、送られたデータを見る。

アキラ「・・・ミホ、これ本物だよな？」

ミホ「え？
もちろん本物よ。
どうかしたの？」

アキラ「ちよつとタグチさんのとこに戻る」

ミホ「アキラ？
どうし」

通信を一方的に切ったアキラは来た道に戻った。

タグチは、自分の車でマナベを病院まで乗せて行った。

今まで黙っていたマナベが突然、話しかけてきた。

マナベ「あの・・・旅の途中で故郷に帰れなくなることについてどう思いますか？」

タグチ「え？」

・・・どうって言われても・・・。
うーん、分かんないなあ」

マナベ「あんまり深く考えなくていいです。
素直に感じたことでいいですから」

タグチ「・・・寂しい・・・かな？」

マナベ「やっぱり、そう思いますよね」

2人はまた黙り込んだ。

タグチが運転する車は病院の駐車場に入る。

そこにはシャーロックがあり、その側にはアキラがいた。

タグチ「カンザキ？」

お前、ダイブハンガーに戻ったんじゃないの？」

車から降りたタグチが聞いた。

アキラ「俺は、マナベさんに少し聞きたいことがあるんです」

マナベ「私にですか？」

マナベも車から降りながら、言った。

アキラ「あなたは宇宙観測所に勤務していないそうですね。それなのにどうしてあそこに居たんですか？」

タグチは驚いた顔で、マナベを見る。

マナベは動揺しながら言った。

マナベ「そ、その見学とかで」

アキラ「それは絶対に無理だ。

だって宇宙観測所は所長の許可がないと入れない場所です。一体あなたは何者なんですか？」

マナベは黙っている。

アキラ「何かしゃべったら、どうですか！」

タグチ「アキラ、落ち着け！」

マナベさんは今回の事件の被害者でもあるんだぞ！」

タグチはそう言いながら、マナベを見る。

マナベは笑っていた。

タグチは驚き、後退りする。

マナベ「いつから私の正体に気がついていた？」

アキラ「は？」

どういう意味だ？」

アキラは困惑した顔で、マナベを見る。

その時、アキラの頭の中で声が響く。

ツイン>アキラ！

こいつは宇宙人だ！

感じからして・・・トラベ星人だ！<

マナベは手から光弾を出す。

吹っ飛ぶアキラとタグチ。

そしてマナベは走る。

タグチ「くっ…あの方向は・・・宇宙観測所だ！」

マナベは宇宙観測所の建物の中で、球体にエネルギーを与えていた。

球体は徐々に大きくなっていき、手と足のような物が生えてくる。

そして、

アキラたちを乗せたシャーロックは宇宙観測所に着いた。

アキラが車から降りようとした瞬間、建物が爆発した。

タグチ「な、何だ！？」

爆発した後から、機械獣・ガルゾラ・が現れた。

アキラ「タグチ隊員！

近辺の住民の避難をお願いします！」

タグチ「分かった！

無茶はすんなよ!!」

タグチは走っていく。

アキラはシャーロックに乗り、人があまりいない場所へガルゾラを連れていこうとする。

ガルゾラが腹部から放つ光弾を避けつつ、シャーロックを運転するアキラ。

しかし、シャーロックに光弾が当たりそうになる。

アキラ「そう簡単に当たってたまるか!」

そう言つて、アキラは車から飛び降りた。

爆発するシャーロック。

アキラはガッツハイパーガンを持ち、ガルゾラを撃つが効果はあまりないようだ。

アキラ「くそっ!

行くぜ、ツイン!!」

アキラはツインの光が宿ったアイテム・ライトカートリッジを右手に持ち、頭上高く上げる。

眩い光が出てきて、ウルトラマンツインが現れた!!

ファイティングポーズをとりガルゾラと対峙するツイン。

ガルゾラは体から触手を出しツインを絡めようとする。

が、ツインは両腕につけているアームドツインから光の剣・ツインエネルギーソード・を出し、触手を切る。

ツインはそのまま走り、ガルゾラの首を切ろうとする。

ガルゾラは体を回転させ、腹部から光弾を出しまくる。

そのため、ツインは容易に近づけなくなる。

しかし、ここで諦めるツインではない。

右手からダート光弾を出し、ガルゾラの動きを止めようとする。

光弾は見事に直撃し、吹っ飛ぶガルゾラ。

ツインはガルゾラの近くまで来て腹部を殴った。

それにより、光弾を出すところが破壊され、ガルゾラは腹部を手で抑える。

ツインはバク転をし、必殺技・センチラル光線・を放つ。

爆発するガルゾラ。

戦いが終わったのと同時にツインのカラータイマーが赤く点滅し始める。

ツインはそれを確認すると、両腕を高く上げ、大空へ飛び立った。

タグチ「アキラ！無事だったか！」

アキラ「ええ、この通りピンピンしてますよ」

タグチは何故か浮かない顔をしている。

それに気付いたアキラは訳を尋ねる。

すると、タグチは、

タグチ「いや、マナベさんは宇宙人だったんだけどさ、あの人侵略者じゃない気がするんだよ」

アキラ「どうしてそう思うんですか？」

タグチ「あの人と話をした時、旅に出たまま故郷に戻れなかったらどうするかって聞いてきたんだ。

それにあの怪獣、どこか宇宙船みたいだった。

それだと思ったんだけどもしかしたら、地球には燃料とかを補給しに来ただけなのかなって思ってたさ…」

アキラ「でもその考えが当たってたら…」

タグチ「そう、俺たち人間が燃料っていうことになる」

2人は黙り込んだ。

アキラは話しかける。

アキラ「これから、どうします?」

タグチ「そうだな…」。

俺が奢るから、名古屋名物の味噌煮込みうどんを食いに行こうぜ」

アキラ「ああ、いいですね。行きましょう」

2人はタグチの車に乗った。

タグチ「・・・でも、お前そろそろ帰らないとシンジョウ隊長に怒られるんじゃない?」

アキラ「あ・・・」

宇宙から怪獣がやってきた!

しかも怪獣は5年前にも現れた強敵!

GUTS・2ndは、ウルトラマンツインはこいつを倒すことが出

来るか！？

次回ウルトラマンツイン第5話、「勝利への犠牲」
さあ、次回も皆で読もう！！

今回のを見て気がついたこと。

オオツカ「ノブオです…」

今回全く活躍しなかったです…

ノブオです…

前回はその前回は活躍しなかったとです…

ノブオです…」

オオツカさん、ごめんなさい(苦笑)。

感想、リクエストをお待ちしております。

まぐったー（前書き）

今回は、番外編 part3です。

すごく短いです。

読みたくなければ、回れ右です。

まぐつたー

サーベル暦 96514年 49月648日
目の前には青い星なう

サーベル暦 96514年 49月648日
軽々と侵入なう

サーベル暦 96514年 49月648日
日本なう

サーベル暦 96514年 49月648日
GUTSと書かれた黄色い車で男女がイチャイチャなう

サーベル暦 96514年 49月648日
車を攻撃なう

サーベル暦 96514年 49月648日
逃亡中なう

サーベル暦 96514年 49月648日
に、逃げ切れたなう

サーベル暦 96514年 49月648日
今日は寝るなう

サーベル暦 96514年 49月649日
おはよううなぎなう

サーベル暦 96514年 49月649日
双子怪獣召喚・・・来ないなう

サーベル暦 96514年 49月649日
しょうがないので自分が巨大化なう

サーベル暦 96514年 49月649日
街を俺様の手により破壊なう

サーベル暦 96514年 49月649日
黄色い戦闘機が攻撃、痛いなう

サーベル暦 96514年 49月649日
戦闘機を一機壊したな：と思ったらウルトラマンキタ
！なう

！

サーベル暦 96514年 49月649日
反撃できず、ぼこぼこなう

サーベル暦 96514年 49月649日
鶴ちゃん：愛してるなう

このサイトの管理人が行方不明になったために、このサイトは閉鎖
します。

今までご愛読ありがとうございました。

まぐったー（後書き）

一応記念すべき、第10部分目なのにこんなんでいいのか自分でも思っ
てしまいますf（^ー^）；

しかも短いし…

感想をお待ちしております。

第5話 勝利への犠牲 - 宇宙怪獣 ヲアツド - (前書き)

途中で出てくる、ガッツウイング1号ネオマキシマブースターは黄色いスノーホワイトだとおもってください。

隊員A「ヴァッドです！

奴がとうとう現れたんです！！」

隊長「何だと！？

早く本部に連絡を・・・ウワッ！」

突然、Z×1が揺れる。

Z×1の外にはコウモリのような姿をした、宇宙怪獣・ヴァッド・
がいた。

ヴァッドは5年前地球に飛来。

多くの被害者を出したあと宇宙に戻った。

所変わってダイブハンガーの指令室。

ワタベ「隊長！

本部より通信！

z x 1 が崩壊したとのこと！！」

シンジヨウ「何だと！？

一体誰がやった！？」

ワタベ「最期の通信によると、ヴァッドだそうです！」

オオツカ「ワタベ！

ヴァッドって、嘘じゃないよな！？」

ワタベ「私だってよく分かりません！

とにかく今は次の報告を待て、とのことですよ！！」

ヨシオカ「z x 1 にいる人たちは、脱出できたんですか！？」

ワタベ「報告には、絶望的だと…」

アキラ「俺がガッツウィングで飛びます！！」

ミホ「アキラ、私も行く！」

2人は指令室から出ようとする。

シンジヨウ「待て！

今行っても何も無いか、ヴァッドにやられるだけだ！！」

アキラ「でも！」

オオツカ「2人供、隊長の言う通りだ。
感情に任せて行動すると、必ず失敗する
とりあえず、冷静になれ」

ミホ「・・・はい」

アキラ「分かりました・・・」

シンジョウ「だが、いつでも出撃が出来るように、準備をしておけ」

アキラ ミホ「分かりました」

そして、30分後：

ワタベ「TPC本部より通信が入りました。
GUTS・2ndはD-39宙域でコスモ・ストライカー部隊と合
流後、N-55宙域に向かえとのことです。」

オオツカ「分かった。

隊長、ガッツウィングEX-J、発進出来ます」

シンジヨウ「よし。

カンザキ、サクマ、そっちはどうだ？」

アキラ「こちら、カンザキ。

ガッツウィング1号ネオマキシマブースター、いつでも発進出来ます」

シンジヨウ「よし、GUTS・2nd出撃だ！」

アキラ ミホ オオツカ タグチ ヨシオカ「了解!!」

ダイブハンガーから二機の戦闘機が宇宙に向け、飛び立った。

目的の宙域に着くとすでにコスモ・ストライカー部隊の戦闘機、ガロウ飛行艇が3機あった。

シンジヨウは回線をオープンにする。

シンジヨウ「こちら、GUTS・2nd、隊長のシンジヨウ・テッオです。
どうぞ」

？「こちらはコスモ・ストライカー、隊長のカナダ・カズヤです」

シンジヨウ「そちらの装備は何ですか？」

カナダ「ファイナルメガランチャーを装備しております」

ファイナルメガランチャーは凄まじい威力を持ち、西暦2018年、SUPER-GUTSのアスカ・シンが太陽系に侵入してきた直径200kmの彗星に対し、これを使い破壊した。

ヨシオカ「それは頼もしいですね」

タグチ「相手が相手なだけこちらでもそれなりに強い装備じゃないかな」

2人が話していると、カナダが言った。

カナダ「そちらはスペシウム砲は無いんでしょうか？」

シンジヨウ「いえ、ガッツウイングEX-Jに装備されています。と言っても、号を分離しないと使えませんが」

カナダ「それを聞いて安心しました。

それでは参りましょう」

小惑星帯であるM-55宙域、ヴァッドがいるであろう場所だ。

しかし、ヴァッドの影も形もない。

そこで3チームに別れてヴァッドを探すことにした。

ガッツウイング1号ネオマキシマブースターとガロワ飛行艇1機、
ガッツウイングEX-J、ガロワ飛行艇2機だ。

アキラは自分たちで組んだガロワ飛行艇のパイロットに通信を入れた。

アキラ「こちら、ガッツウイング1号ネオマキシマブースター。
カンザキ・アキラだ。

でもう1人がサクマ・ミホ。

そっちの名前は何だ？」

？「・・・答える義理がどこにある？」

アキラ「おいおい、俺たちは仲間なんだぜ？

教えてくれないんだったらお前のこと、隊員Aって呼ぶぜ」

ミホ「あ、アキラ。

いくら何でもそれはまずいんじゃないか・・・」

？「・・・は、俺の名前はアキモト・ルイだ」

アキラ「ルイ？」

あははははは、変な名前だなあ」

ミホ「失礼だって、アキラ！」

ルイ「だから、言いたくないんだ！」

アキラ「ああ、ごめんごめん」

アキラは謝ったが、顔はまだ笑っている。

ルイ「くっ…、とにかくヴァッドを探す方が先だ！」

そう言うと、ルイは通信を切った。

アキラ「あゝあ、怒られちゃった」

ミホ「当然よ。

名前は自分でつけるものじゃないんだから。

アキモトさん、可哀想に変な名前つけられて…」

アキラは何故かイライラしながら言った。

アキラ「なんでアキモトの心配なんかするんだよ？」

ミホ「良いじゃない。

っていうかなんであたしが怒られなきゃいけないのよ？

あ、もしかして嫉妬してるの？」

アキラ「へ？

ち、違うって！」

ミホ「あゝそうなんだ。

嬉しいな、アキラはあたしに惚れてるんだ」

アキラ「違・・・わなくは無いな・・・」

アキラの声はだんだん小さくなっていく。

ミホ「え、何言ってるか、聞こえないよ？」

アキラ「いや、気にしないで」

ミホ「変なの」

そこに通信がはいってきた。

ヨシオカ「カンザキさん、サクマさん、聞こえますか？」

アキラ「こちら、カンザキ。

どうしたヨシオカ？」

ヨシオカは用件を伝える。

ヨシオカ「カナダさんたちがヴァッドを見つけたそうです。
今すぐ僕たちと合流してください。」

アキラ「O・K・・・！」

アキラはルイに通信をかける。

アキラ「ルイ、聞こえ」

ルイ「分かってる！
すぐに行くぞ！」

ガロワ飛行艇2機は距離を保ちつつ、ヴァッドを監視している。

ガロワ飛行艇にはステルス機能があり、今回の探索（？）任務に適している機体だった（念のため書いておくが、ガッツウィングにもステルス機能はある）。

小惑星の地帯で休憩をとっていたヴァッドにバレないように近付いていくガロワ飛行艇。

そこにガッツウィング1号とEX-J、ルイの乗るガロワ飛行艇が来た。

カナダ「遅いですよ。

シンジヨウ隊長」

シンジヨウ「申し訳ありません。

作戦は先程話した感じで良いですね？」

今回の作戦は、まず1号とEX-J 号、ガロワ飛行艇1機がヴ
アッドを奇襲。

それによりヴァッドは機体を攻撃しようと、戦闘機を襲いに来る。

そこにスペシウム砲とファイナルメガランチャーを撃ち込む、とい
う作戦だ。

因みにEX-J 号にはすでにヨシオカが乗っている。

緊張しているのか、ヨシオカは微かに震えている。

シンジヨウ「ヨシオカ、怖いのか？
だったら俺と代わるか？」

シンジヨウが画面越しに聞いてきた。

ヨシオカ「いえ…でも凄く不安です。
もし、僕のせいで作戦が失敗してしまうと考えると・・・」

シンジヨウ「なるほどな。

お前の気持ちはよく分かる。

俺がアストロノーツだった頃にはこんなことをしたら失敗はしない
だろうと色々考えたら、よく失敗したんだ。
宇宙じゃ、地球と勝手が違う。

要するにここでは気ままにやれってことだ」

ヨシオカ「そう・・・ですよね」

ヨシオカは操縦桿を震えながらも握りしめた。

カナダ「よし、作戦開始だ！」

ルイ「了解！」

俺に続け！！」

ルイの乗ったガロワ飛行艇の後に1号、 号が続く。

そしてヴァッドへの攻撃範囲に近づく。

がその時、ヴァッドは口から白色の輪を出し、戦闘機を逆に攻撃した。

ルイ「まずい、超音波だ！」

カンザキ、サクマ、ヨシオカ、避ける！」

ヴァッドの口から出す超音波は機械などを一時的に狂わせる効果がある。

その為、5年前に多くのパイロットから犠牲者が出た。

だんだん大きくなっていく白い輪をなんとかかわした3機の機体はすぐに攻撃をするかわす。

アキラ「どうする？」

ルイ「」

ルイ「とりあえず攻撃するしかないだろう!!」

3機の機体からミサイル等が出る。

ヴァッドはそれを避けつつ、目からレーザーが出てきた。

ミホ「このままじゃ、あたしたちがやられてしまっわ!

一旦、退却した方が良くないの!?!」

ヴァッドに真正面から立ち向かうのは死ぬことに等しい。

その為の奇襲作戦は失敗に終わった故に、今は逃げるしかない。

しかし、ヴァッドから逃げられた者はいない。

ルイ「あいつに見つかったら、倒すか倒されるかだ!

だが、ここで俺がおとりになれば...」

その時カナダから通信がかかってくる。

カナダ「アキモト!

何を格好つけている!

お前たちは一時的に撤退するんだ!

こうなった以上、一気にケリをつけるしかない!!」

ルイ「でも隊長!!」

カナダ「これは命令だ!!」

ルイのガロワ飛行艇では怒声が響く。

カナダのガロワ飛行艇が前に出る。

ルイ「隊長!!」

死ぬ気ですか!？」

シンジヨウ「カナダ、考え直せ!!」

しかし、カナダから通信は来ない。

カナダのガロワ飛行艇はヴァッドに弾を発射させる。

ヴァッドは超音波を口から出しまくる。

ガロワ飛行艇はファイナルメガランチャーを発射しようとするが…

ルイ「俺も行きます！

その間に皆は逃げてくれ！」

ルイのガロワ飛行艇は戻ろうとする。

シンジヨウ「アキモト！

今はカナダに任せるんだ！

あいつが為し遂げようとしている事を邪魔するな！」

ルイ「しかし！」

コスモ・ストライカー隊員「アキモト！

今のお前じゃ足手まといだ！」

ルイ「くっ・・・！

分かりました」

アキラたちは戻ろうとする。

ルイはその時、カメラでカナダのガロワ飛行艇とヴァッドが戦っている場所を見た。

そこには爆発による煙しかなかった…

最悪の状況！

とうとう地球に飛来してきたヴァッドに、GUTS・2ndはアキモト・ルイを迎え、反撃に出る。

ルイ、ウルトラマンツインよ、カナダの仇を討て！！

次回、ウルトラマンツイン第6話「怒りの一撃」。

さあ、次回も皆で読もう！！

第5話 勝利への犠牲 - 宇宙怪獣 ヴァッド - (後書き)

まさかの前後編になるという・・・

ぶっちゃけ、1話だけじゃ書けませんでした。

感想をお待ちしております。

第6話 怒りの一撃 - 宇宙怪獣 ヴァッド -

カナダの乗るガロワ飛行艇は爆発した。

アキラたちの戦闘機は急いで撤退するが、ヴァッドはその事に気づきすぐに追いかけてくる。

ヨシオカ「こ、このままじゃ逃げ切れません！」

シンジヨウ「ここを抜けたら、ネオマキシマでワープするまでの辛抱だ！とにかく逃げ！！」

ヴァッドはさらにスピードを上げ、追いかけながらレーザーを出してきた。

アキラ「ミホ！避ける！」

1番後ろにいたガッツウィング1号は機体を横に傾け、ギリギリでかわすことに成功する。

ヴァッドは今度は口から白い輪、超音波を出してきた。

その時である！

ガロワ飛行艇の一つが突然動かなくなったのだ！

コスモ・ストライカー隊員「な、何だ！？エンジンが、こんな時に……！！あ、ああああああああああああああ……！！」

白い輪に包まれ、爆発するガロワ飛行艇。

ルイ「副隊長!!」

ヴァッドは更にスピードを上げてきた。

誰もが間に合わない、と思った。

ヴァッドが悲鳴をあげ、苦しんでいる素振りを見せた。

ヴァッドの近くにはTPCの戦闘機の一つであるパッションレッドがヴァッドを攻撃していた。

パッションレッド・パイロット「こちら、レッド・ファイターズ。援護にきた。」

シンジヨウが答える。

シンジヨウ「援護ありがとうございます。ですが、今は逃げるしかありません。そちらもすぐに退却を」

パッションレッド・パイロット「分かりました。ですが、こちらはあいつをなるべく引き寄せます。」

そう言うとパッションレッド・パイロットは通信を切った。

小惑星帯を抜け出したシンジヨウたちはすぐにネオマキシマ・オーバードライブを発動し、地球へ向かった。

1時間後、ダイブハンガー指令室ではルイを迎え、レッド・ファイターからの通信を待ったが、何もこなかったため全滅したのではとオオツカが言った。

シンジヨウ「だが、パッションレッドにはゼロドライブが搭載されている。何とか退却は出来ただろう」

シンジヨウは笑いながら言ったが、その笑顔は無理矢理なものだと誰もが思った。

その時、指令室のドアが開いた。

誰もが驚いた。

何故なら、そこにシバタ参謀が立っていたからだ。

シバタ「まず、君たちに聞きたいことがある。何故ヴァッドから逃亡した？TPCという組織が軍隊であれば、立派な罪になるぞ」

シンジヨウが答える。

シンジヨウ「奇襲作戦は失敗に終わり、あのままじゃ我々は全滅していたでしょう。カナダ隊長はそのことを避けるために我々を逃がしたのです。それよりも聞きたいことがあります。レッド・ファイターズはどうなりましたか？」

シバタ参謀はため息をつく、質問に答えた。

シバタ「彼らは無事だ。モンスターキャッチャーをヴァッドに撃つた後、すぐに退却した。少なくとも君たちよりも活躍はしている」

オオツカ「なら、ヴァッドは今、どこにいるんですか？」

シバタ「ヴァッドは地球に向かっている。後8時間で到着するだろう」

シンジヨウ「つまり…我々が奴を倒せとあなたは言いたいんですか？」

シバタ「いや、君たちは地球で待機だ。一応地球の前にはアウターブルー隊がいる。もし、彼らが破れたときの保険として戦ってもらう。が、また逃げ出したら…分かっているな？」

シンジヨウ「…分かりました」

シバタ「分かっているならよろしい」

シバタ参謀は指令室から出ていった。

シンジヨウは部屋を見渡し、口を開いた。

シンジヨウ「これから5時間休憩だ。その後は戦闘準備に取りかかるぞ。アキモト、君も協力してくれ」

ルイは分かりましたと、小さく呟いた。

3時間後、アキラはミホと食堂で昼食を食べていた。

2人はなるべく暗い話はせずに、明るい話をしていた。

ミホ「でさ、ナカタ何て言っただと思う？」

アキラ「うーん…分かんない。あ、ルイ！一緒に食べないか？」

食堂にルイが入ってきたので、アキラが話しかける。

ルイはアキラを無視した。

アキラ「何だよ、あいつ。ミホ、悪いけどちょっと待てって」

アキラはそう言つとルイの所まで走った。

アキラ「ルイ、何で無視するのさ？」

ルイ「別にいいだろう？お前たちと話す気分じゃないんだ」

ルイはそう言つと食堂から出ていこうとする。

アキラ「どういう意味だよ？・・・もしかしてカナダさんが死んだのは、自分のせいだって思つてんのか？」

ルイがピクリと動く。

アキラ「まあ、誰だつてそう思うのは不自然じゃないけどさ、それを引っ張るっていうのはおかしいっ俺は思う。俺は」

突然ルイは、アキラの胸ぐらを掴んだ。

遠くから見ていたミホは驚き、2人の所に走っていく。

ルイ「お前に何が分かる！お前に大切な人が殺されるって言つ気持ち分かるか！！」

ルイの問いに対し、アキラも叫びながら言つた。

アキラ「ああ、分かるさ！俺だつて昔家族を怪獣に殺されたんだ！悲劇の主人公を気取つてメソメソしている奴見てると腹がたつてるんだ！てめえだけが苦しんでるんじゃないぞ！！」

そう言つて、アキラはルイを殴り、食堂から出ていった。

ミホ「アキラ！あ、そのごめんなさい。大丈夫ですか？」

ルイは殴られた頬をさすりながら、言つた。

ルイ「・・・いや、別に大丈夫です」

ワタベ「副隊長：指令室の通信機を使って長電話するの、止めてください」

ヨシオカ「そうですよ、もし本部から大切な通信が来たらどうするんですか？」

オオツカは家族と電話で話していた。

何故PDIを使わないかというと、現在充電しているからだ。

オオツカ「うん、パパ頑張るからね。・・・うんじゃあね」

オオツカは通信を切った。

タグチ「副隊長、家族と話すなら公衆電話使えばいいじゃないですか？」

オオツカ「いやあ、電話だと顔見せられないじゃないか。だから、これ使わしてもらったんだよ」

ワタベはイライラしながら言った。

ワタベ「でも1時間ぐらい話していたじゃないですか！それって迷惑です！」

オオツカ「最近、家に帰れてないから、それくらい話すのは当然だつて」

オオツカは反省していない。

駄目だこりゃと3人は思った。

シンジョウはPDIを使って、親友であるホリイ・マサミと話をしていた。

シンジョウ「ホリイ、隈が出来てるぜ。どうしたんだ？」

ホリイ「アホう。これでもヴァッド対策の新アイテム開発しとったんや！」

シンジョウ「・・・新アイテム？」

ホリイ「せや！ヴァッドが来たって聞いてすぐに作ったけどなかなか

かの優れモンや。名付けて、『イー・プロテクト・システム』」

シンジヨウ「『イー・プロテクト・システム』？直訳して・・・耳を保護する？」

ホリイは「もともとは市販用の商品で外の雑音がうるさい時にこれを使うと外からの音が何も聞こえなくなるシステムやったんだけど、このホリイ・マサミがちょこつと改造すればなんと人間だけではなく、機械もヴァッドの超音波による狂いも無くなるっちゅうわけや」

勝手に説明をするホリイに呆れつつも、シンジヨウは『イー・プロテクト・システム』の凄さに驚いていた。

ホリイ「ただし、まだ試作品だから3回までしか使えへん。そこに注意しときや大丈夫やろ」

シンジヨウ「ああ、ありがとな、ホリイ」

画面越しでホリイは照れながら言った。

ホリイ「お前にありがとうって言われると気持ち悪くなるわ」

そう言っただけでホリイは通信を切った。

シンジヨウはPDIをポケットにしまい、格納庫へ向かった。

そして、5時間たった。

ダイブハンガー格納庫では、ガッツウイング1号にアキラとミホ。

ガッツウイングEX-J 号にオオツカ、タグチ、ヨシオカ。

号にシンジヨウ。

そしてルイの乗るガロワ飛行艇だ。

計器を調節しているアキラに、ミホはねえ、と話しかける。

アキラ「何？」

ミホ「さっき、家族が殺されたって言うてたじゃない？それがちよつと気になって…。あ、その、気分悪くしたらごめん・・・」

アキラはため息をつき、別にいいよと言った。

アキラ「でも今じゃないと駄目？正直、そのことについてはさ、話したくないから」

ミホ「うん今度でいいよ」

アキラとミホは作業に戻る。

ワタベから通信がきた。

「ワタベ、アウターブルー隊がヴァッドと戦闘に入りました」

アウターブルー隊の主力戦闘機『ガッツウイングブルーートルネード』とガッツウイング2号（色は青）はヴァッドと交戦中だ。

ブルーートルネードはミサイルを使い牽制しつつ、ガッツウイング2号の配置されている場所へ誘導している。

痛みを感じているようでヴァッドは悲鳴のような声をあげている。

が、ヴァッドはそれに気づいたのか、突然ガッツウイング2号が配置されている場所にレーザーを出した。

いきなりなことでは術もなく、破壊される2号。

そして、ブルーートルネードに超音波を出した…

G U T S ・ 2 n d と ル イ を 乗 せ た 戦 闘 機 3 機 は、 ヲ ア ッ ド が 地 球 へ の 落 下 予 定 地 点 に 向 か っ て い た。

あ と 3 0 分 で も す れ ば ヲ ア ッ ド は 地 球 に 来 る だ ろ う。

だ が、 ヲ ア ッ ド は ス ピ ー ド を 上 げ る こ と が 出 来 る。

も し 遅 れ た り し た ら、 被 害 が た く さ ん 出 る。

そ の 為 に G U T S ・ 2 n d は 急 い で い た。

落 下 予 定 地 点 に 到 着 し た G U T S ・ 2 n d は ヲ ア ッ ド を 待 つ。

緊 張 か ら か、 誰 も が 黙 っ て い る。

そ の 時、 赤 い 火 の 玉 が 宙 か ら 落 ち て き た。

そ の ま ま 地 面 に 衝 突 し、 爆 発 音 と 共 に 巨 大 な 煙 が 出 る。

煙からヴァッドが出てきた。

シンジヨウは通信で皆に言う。

シンジヨウ「オオツカ、 号を切り離せ！そのまま攻撃開始だ！！」

アキラ、ミホ、ルイ、オオツカ、タグチ、ヨシオカ「了解！！」

ガッツウイングEX-Jから 号が切り離され、

シンジヨウ「シーシミッサ！！」

すぐにヴァッドに向かってビームを出す。

それに続き1号、EX-J 号、ガロワ飛行艇がビームを出す。

ヴァッドは口から超音波を出す。

が、GUTS・2ndの戦闘機にはホリイが開発した『イアー・プロテクト・システム』があるために効果は無かった。

驚く素振りを見せたヴァッドにビームを当て続ける4機の戦闘機。

ヴァッドは反撃できず、ついに倒れた！

アキラ「やった！！」

シンジヨウ「油断するな！オオツカ、すぐにスペシウム砲の準備だ！！」

オオツカ「了解！！タグチ、すぐにかかれ！！」

タグチ「もうやってます！」

タグチの言う通り、 号の真ん中から砲身が出てくる。

その時、倒れたままのヴァッドの目からレーザーが出た！！

ヨシオカ「うわ！？」

号は何とか避けるが、真上を飛んでいたガッツウィング1号が左翼に被弾いや、貫通した。

そのまま墜落していく1号。

ルイ「カンザキ、サクマ！脱出しろ！！」

が、ルイが言い終わるとすぐに地面に不時着した。

ヴァッドは立ち上がり、レーザーを出す。

号、 号、ガロワ飛行艇は反撃できず、レーザーを避けていた。

アキラ「ミホ！起きてくれ、ミホ！！」

1号のコクピットではミホは気絶をされていて、アキラは起こそうとする。

が、ミホはなかなか起きない。

外を見ると、ヴァッドがこちらを向いている。

アキラは内ポケットから『ライト・カートリッジ』を取り出す。

アキラ「行くぜ、ツイン!!」

『ライト・カートリッジ』は光り出す。

ヴァッドの前に眩い巨大な光が出てくる。

その光が消えると同時に銀と赤の巨人が現れた。

ルイは呟く。

ルイ「ウルトラマン…ツイン…!」

ファイティング・ポーズを取り、ヴァッドと距離を置くツイン。

ヴァッドはレーザーを出してきた。

ツインは右腕のアームドツインから光の剣『ツインエネルギーソード』を出してそれを真二つに切る。

そして光の剣を腕ごと真上に向かって振り、三日月状のカッター『ソードスラッシュ』を放った。

それはヴァッドに直撃、鈍い音とともに左翼が吹き飛んだ。

痛がるヴァッドを倒すべく、ツインは走り右手で殴ろうとする。

その距離あと数mと言うときに、ヴァッドは口を大きく開き、白い輪を出した。

白い輪はツインの顔を包み、ツインは頭を押さえた。

超音波にやられてしまったツインを遊ぶかのようにヴァッドは右足でツインを蹴り飛ばす。

後ろに飛ばされたツインは頭を振ると、ファイティングポーズを取ってヴァッドと向き合う。

次にヴァッドはレーザーを出して攻撃を始めた。

ツインは側転をして何発か撃ってくるレーザーをかわすが、何回か側転をしている内に右肩に当たってしまった。

右肩を抑え立ち上がろうとするが、ヴァッドは執拗にレーザーを放ってきて、反撃が出来ないツイン。

ヴァッドは徐々にツインに近づいていく。

少し、フラフラしているツインは顔を上げるとヴァッドは口を大きく開いている。

そして……

ヴァッドの口は突然爆発を起こした。

ツインは後ろを見ると、ガロワ飛行艇と 号がビームを出して攻撃をしていた。

すぐにツインはヴァッドをタックルをして押し倒した。

ガロワ飛行艇はツインの前行き、ルイはコクピットかツインに向かってうなずく。

ツインは後ろに下がって両腕を真横に伸ばし、センチラル光線を放った。

直撃するがヴァッドはなんとか耐えている。

それでもツインは光線を出し続ける。

その真上ではEX-J 号がスペシウム砲を発射させた。

これも直撃し、とうとう爆発を起こすヴァッド。

ツインはガロワ飛行艇にサムズアップをしたあと、大空へ飛び立った。

1週間後、ダイブハンガーの格納庫でガロワ飛行艇の計器を調整していたルイのもとに、アキラとミホがやって来た。

ミホ「アキモトさん、今までお世話になりました」

アキラ「ルイ、これからどうするんだ？」

ルイ「今更だがルイって呼ぶのは止めてくれ。・・・まあ、コスモ・ストライカー部隊に戻るよ。今回のことでほぼ全滅になっちゃったけど、一応新しい人が来るらしい」

アキラ「ふゝん……あのさ、悪かったな、殴ったりして」

いつになく、暗い顔をしているアキラを見てルイは笑った。

ルイ「いや、いいんだって、むしろ感謝してるし。あのあと考えたんだけどさ、俺たちは悲しんでばかりはいられない。前を見て進んでいくしかないんだってな」

アキラ「なるほどね」

そう言つとアキラは右手を差し出した。

ルイはそれに答えるように同じく右手を出して握手をした。

そんな二人を見てミホは微笑む。

ルイ「あ、そうだ。お二人さんが結婚する時は呼んでくれ。宇宙に
いようがすつ飛んでくるからさ」

そのお二人さん、アキラとミホは赤面する。

アキラ「な、何言つてんだ、お前は!？」

ミホ「そ、そうよ!？」

ルイは大きな声で笑いながらこう言った。

ルイ「からかったただけだよ」

その夜、ガロワ飛行艇が宇宙に向けて飛び立った。

ペットショップの動物たちが全部買われた。

別にたくさんのお金があればおかしくはない話だが、買った人間には秘密があった！

次回、ウルトラマンツイン第7話「実験の果てに」

さあ、次回も皆で読もう！！

第6話 怒りの一撃 - 宇宙怪獣 ヲァッド - (後書き)

後書きなんですが長くなりそうなので、読まなくてもいいです。

シンジヨウが途中で「シーシミッサ」と言いましたが、やってやるぜという意味だそうです(本編で使ったので載せました)。

アウターブルー隊のガッツウイング2号が青色と書きましたが、TPCのチームごとに機体の色が変わるという話を聞いたのでブルートルネードが青色だから2号も青色にしました。

今回の話は最初の構想とは結構違うんです。

まず題名、気付いた人は多いと思いますが、「勝利の犠牲」から「勝利への犠牲」に変更となっています。

次にアキモト・ルイはアキラとミホと同年代というイメージで書いたんですが、オオツカと同年代にする予定だったんです。

そして、婚約者が5年前にヲァッドに殺されたためヲァッドを倒すべくコスモ・ストライカーに入隊。

ヲァッドが見つかり、彼が無茶な行動をしたせいで、コスモ・ストライカーは全滅。

その後、地球でヲァッドの喉を潰し超音波を出させなくするも、レーザーを食らい、死亡するという展開でした。

つまり「勝利の犠牲」は彼の予定でしたが、なんかすごく書きづらくて(汗)、変更となったんです。

そしてシンジヨウとホリイの会話、あれはもともとホリイの代わりにイルマ参謀を出す予定でした。

が、その内容が気に入らなくて・・・だったらホリイにしてやるのかなと思い、こうなりました。

まあ、そんなわけで個人的に力量の無さを感じた作品でした。

感想、リクエスト（『ウルトラマンティガ・ダイナ』の設定、戦闘機、登場人物など）をお待ちしております。

番外編 part 4

バーヌが倒され、ダイブハンガーに戻ったアキラたちではあったが、ヨシオカのある一言で大変(?)なことに気がついた。

なおシンジヨウは参謀たちに呼ばれ、ここにはいない。

ヨシオカ「そういえば新しいウルトラマンの名前、決めていませんでしたね」

タグチ「ああ、確かに」

アキラ「それじゃ」 オオツカ「じゃあ、自分が決めてもいいですか？」

(目立たない) オオツカに言葉を遮られ、少しイラっとくるアキラ。
オオツカ「今回のウルトラマンは剣を出すから・・・ウルトラマンダブルブレード!」

一瞬の沈黙の後…

ワタベ「・・・ダサイです。副隊長」

ミホ「ワタベ先輩にさんせい」

ヨシオカ「僕も…正直ダサイと思います」

タグチ「右に賛成」

アキラ「俺も同じく」

オオツカは結構ショックを受けたようだ。

オオツカ「だったら、お前たちで考えろ！」

そう言つて、部屋から出て（逃げて）いくオオツカ。

タグチ「んじゃ、ウルトラマンマックスなんてのはどうよ？」

ワタベ「マックスって…なんかダメな気がしますけど。
だったらウルトラマンクウガ！」

ミホ「そっちの方がアウトな感じがしますよ…ワタベ先輩」

全く結論が出ないため、とうとうアキラは口を開いた。

アキラ「あの…ウルトラマンツインなんてのはどうでしょうか？」

ヨシオカ「なんでツインっていうのにしたんですか？」

アキラは必死で理由を考える、そして思い付いたことは…

アキラ「あ、腕につけてる装飾品みたいのが二つあるからさ」

タグチ「確かにそうだけどさ、単純すぎね？」

ミホ「そうよ。」

アキラもネーミングセンス無いね」

アキラ「喜びながら言っなよ、ミホ！」

アキラは少し憤慨しながら言う。

？「俺はいいと思うけどな。」

ウルトラマンツイン「

ワタベ「あ、シンジヨウ隊長」

査問会から帰ってきたシンジヨウは、自分の席に着きながら言った。

シンジヨウ「だってウルトラマンティガだって名前は『ティガの地』から来てるんだぜ。」

それだったらシンプルかつ覚えやすいので良いじゃないか？」

そう言いながら、シンジヨウはアキラに向かってウィンクをする。

ヨシオカ「僕もそれでいいと思います」

ワタベ「隊長が言うなら、ねえミホ？」

ミホ「よかったね、アキラ」

アキラ「お前って日和見だな……」

こうして正式に新しいウルトラマンの名前が、『ウルトラマンツイン』と決まった。

番外編 part 4（後書き）

名前決めるのすっかり忘れていた…

感想、リクエストをお待ちしております。

後、感想なんですがユーザーの方じゃなくても出来ますので時間に余裕がありましたら、書いてください。

それでは

番外編 part 5 (前書き)

次の回は、この回を読まないといけない部分があると思います。

番外編 part 5

ダイブハンガーの食堂、アキラは、昔からの親友からの手紙を読んでいた。

そこにはこう書かれている。

『カンザキ・アキラへ。

そっちは元気か？俺は元気だ。こうしてお前に手紙を送るのは、初めてだから少し緊張してるけどな。

さて、俺達は同じ時期にTPCに入ったが、お前は攻撃部隊に入っ
て苦労してないか？お前は昔から運動神経悪いからな。何かあつ
たら連絡をくれ。相談に乗るからさ。

あとさ、今度、孤児院を卒業した皆で集まりをやるんだって。お前
も来るか？来るんだったら、やつぱり連絡をくれよな。あと彼女連
れてこいよ。楽しみにしてるからさ

ヤマダ・トシヒコより』

アキラは口元を少し緩めながら、手紙をポケットにしまおうとする。

が誰かに手紙を取られてしまった。

突然のことだったのですぐに顔をあげるアキラの前にはミホが立っていた。

ミホは手紙を読みながらこう言った。

ミホ「ふうん、アキラって運動神経悪いんだ」

アキラ「何だよ、悪いか？」

ミホは無視し、口を開いた。

ミホ「ヤマダ・トシヒコって誰？」

アキラは答える。

アキラ「トシヒコは俺にとって兄弟のような存在だ」

ミホは言いづらそうに話す。

ミホ「その・・・同じ孤児院出身なの？」

アキラ「ああ。正直、あいつがいなけりゃ、ここにはいなかったと思う。ミホにも会えなかっただろうし」

ミホ「へへ、あつ。アキラの彼女って誰…」

アキラ「そ、それは…トシヒコが勝手に書いたんだろうよ…多分」

ミホ「じゃあ、あたしが彼女として行こっか？」

アキラ「何でだよ!!」

アキラは即座に突っ込むが、ミホは続ける。

ミホ「いいの、別に行って帰ってきたあとに、『別れました』って言う感じであなたも手紙を送ればいいんだから」

アキラ「そういう問題じゃねえだろう…」

ミホ「それに…あたし、アキラのことをもっと知りたい」

アキラ「へ？それどういう意味で？」

ミホ「…仲間としてよ」

少し膨れっ面になりながらもミホはアキラの右手に触れる。

アキラ「じゃあ、連れてく…」

そう言いながらアキラは、アキラの右手を掴んでるミホの右手を握る。

お互いに顔を赤くしつつも、どこか嬉しそうだった。

番外編 part 5 (後書き)

感想、リクエストをお待ちしております。

第7話 実験の果てに - 異形進化怪獣 オーガヌ グライプ スネープ -

ミホ「キヤー！カワイイ」

アキラとミホはペットショップ『カワサキ』にいる。

今日、2人はシャーロックに乗り、パトロールに出ていたが、ミホのわがままにより、ここに来ていたのだ（この時点で2人は職務怠慢…）。

勿論、アキラは不安で仕方なかった。

ペットショップはそれなりに人はおり、うるさい場所である。

もし、本部から通信がかかってきたら…

ミホ「どうしたの、アキラ？浮かない顔して？もしかして、動物…嫌い？」

アキラ「いや、そういうわけじゃないんだけど…」

ミホ「あつ。もしかしたら、本部から通信が来るんじゃないかって不安になってるんでしょ？」

アキラ「まあ、そうだけど…。そろそろ帰らない？」

ミホ「うん…もうちょっと居たかったんだけどな。ま、いつか。帰ろう、アキラ」

そう言い、アキラの右手首を掴むミホ。

アキラ「ミホ！離せよ！」

ミホ「いいから、いいから」

ミホに引つ張られるアキラだが、その顔は少し嬉しそうだ。

出入口の近くにあるカウンターの前を通る2人。

そこへ電話で話している店員の声が聞こえてくる。

店員「はっ？店にいる動物を全部ですか？」

ミホ「やっぱ、お金持ちはいいわね。自分が買いたいと思うもの、全部買えるんだから」

アキラは尋ねる。

アキラ「うちの職場の給料もつと高けりやいいのにつて、思ってない？」

ミホ「アキラだってそう思ってるんでしょっ？」

アキラ「まあね」

2人はシャーロックに乗った。

ある建物の部屋の中には、いろんな機械がたくさんあった。

そして、部屋に蛇の入っているケースを持った男が入る。

男はケースを机に置くと、ポケットから注射器を取りだし蛇の首に射す。

蛇は狂ったように暴れだす・・・

ダイブハンガーに帰ってきたアキラとミホはその夜に報告書を書き上げ、寝ようとそれぞれの部屋に戻ろうとした時、警報が鳴った。

ワタベは通信に応答する。

ワタベ「こちら、ダイブハンガー指令室。どうしましたか？」

オペレーター「G・58地区に怪獣出現。GUTS・2ndは直ちに向かってください」

ワタベ「分かりました。・・・隊長！」

シンジヨウ「ああ、GUTS・2nd 出動だ！」

アキラ、ミホ、オオツカ、タグチ、ヨシオカ「了解！」

ガッツウィング1号2機にそれぞれアキラとミホ、2号にシンジヨウ、オオツカ、タグチ、ヨシオカを乗せ、G-58地区に到着した。

そこには蛇のような怪獣・スネープがいた。

体長は体全体を伸ばすと80mだろうか。

シンジヨウは隊員たちに攻撃開始の合図を行う。

了解と言ってスネープを攻撃を始めるGUTS・2nd。

ビームに当たり、痛がるスネープ。

アキラの乗る1号は旋回してスネープに追い討ちをかける。

スネープはそれを払うかの様に尻尾を振る。

アキラ「危ねッ！」

何とか避けた、アキラの1号はもう一度攻撃を仕掛ける。

シンジヨウ「スペシウム砲を発射する。アキラ、ミホ！怪獣から離れるー！！」

アキラ、ミホ「了解！！」

1号2機はスネープから離れる。

が、タグチが待ったをかける。

タグチ「ダメです！あいつが細すぎてロックオンが出来ません！もし、出来たとしても動き回るから、外れる可能性がありますー！！」

オオツカ「だったら、アイツにギリギリまで近づくまでだ！ヨシオカー！！」

ヨシオカ「了解！！」

スネープに近づく2号。

それを見ていたアキラは1号の操縦を手動から自動に変える。

そして、ポケットからライト・カートリッジを取り出す。

アキラ「行くぜ、ツイン！」

空中から赤く光る球体が出てきて地上にぶつかり、爆発。

その爆発の煙りの中から、ウルトラマンツインが出てきた！

2号はスネーブに近づいていたが、ツインを見たヨシオカはスネーブから離れる。

ツインはジャンプをしてスネーブの前に着地、一発殴り、スネーブを投げる。

エネルギーソードを右腕のアームドツインから出すツイン。

そして、投げられたスネーブの元へ走り、その首を掴みエネルギーソードで切ろうとする。

が、スネーブはエネルギーソードを噛みきった。

ツインは驚きながらも、蹴りを何発か入れる。

ミホの乗る1号もスネーブに向かってビームを撃ちまくる。

ツインはスネーブの体を掴んだ。

2号を見て、首を縦に振るツイン。

シンジヨウはその意味を理解し、タグチに命令する。

シンジヨウ「スペシウム砲の発射用意だ！」

タグチ「分かりました!!」

2号の機体中部から前部にかけて半分に分かれる。

そこから砲身が現れた。

砲身から青白い光線が出てきて、スネープに直撃。

ツインは離れ、その直後に爆発するスネープ。

ツインはそれを確認すると夜空へ飛んでいった。

一週間後、ダイブハンガー指令室にはコンドウ参謀が来ていた。

コンドウ「シンジョウ隊長、今日私が来た理由は分かっていますかな?」

シンジョウ「?・・・いや分かりませんが」

コンドウ「まず、先日の怪獣、スネープだったかな。奴の出所が恐らくではあるが分かった」

ヨシオカ「本当ですか!？」

コンドウ「うむ。場所は勝山ビルと言うところだな。スネープが出たところに近い場所にある」

タグチ「待ってください。ビルの中から出てきたんですか？」

コンドウ「最初に言っただろう?まだ確定ではないのだ。そこで君たちにはこのビルを調べてもらいたい。内部や周辺を含めてだ」

ワタベ「それって、警備局の仕事じゃないんですか？」

コンドウ「警備局は今、別の仕事をしているからな。そこでスネープを倒した、君たちにやってもらうこととなったのだ」

アキラ「まあ、やるしかないってことですね？」

ミホ「その建物に怪しい人物はいないんですか？」

それだ、と言ってコンドウは話を続ける。

コンドウ「ビルには経営者のマツダ・ブンと言う男が一人だけいる。もちろん怪しいのはその男しかない。しかも、マツダは…」

タグチ「マツダ・ブン博士は生物学の権威と呼ばれている人ですね。けど、今は引退して開業医になっているって聞きました」

オオツカ「タグチ、何でそんなこと知っているんだ？」

タグチは自分を指で指しながら、こう答えた。

タグチ「俺だって科学者の端くれですよ」

コンドウ「オッホン。・・・話を続けて良いかな？」

タグチ「あ、すいませんでした」

コンドウ「別に謝れとは言っていない。とにかく、マツダ博士には注意をしておけ。以上だ」

指令室からコンドウは出ていく。

シンジヨウ「さて、配置を考えるぞ」

タグチとワタベは雑誌の記者として、ビルに潜入することとなった。

アキラ、ミホ、ヨシオカはビルの外で情報収集を、シンジヨウ、オツカはもしも怪獣が出てきたときのためにダイブハンガーで待機だ。

そしてタグチとワタベはビルの入り口に立っている。

ワタベ「で、気になってるんだけどマツダ博士ってどうして引退したの？」

タグチ「それは分らないんだ」

ワタベ「分らないって…ふーん、あ、私が押すわ」

そう言つて、エレベーターのボタンを押すワタベ。

小さな病院のある2階に着いた二人はドアの前にあるインターホンを押す。

ピンポンと音が鳴り、5秒と経たない内に、低い声が聞こえてきた。

マツダ「・・・はい。今日はお休みですよ」

タグチ「先ほど、電話で話したんですけど雑誌『ウィークヒルカワ』の者です」

マツダ「ああ、少しお待ちください」

それから2分経ってドアが開き、マツダ博士が出てきた。

マツダ「さ、どうぞ中へ」

中に入る2人。

マツダ博士は紅茶を持っておきながら、こう言った。

マツダ「申し訳ありませんが、この後用事がありまして30分ぐらいしか話せません。それでもよろしいですか？」

ワタベ「はい、正直に言いますとあまりページを使わないと思いますので構いません」

マツダ博士は突然笑い始めた。

マツダ「フフ、いや失礼。こちらはもう引退した身ですので目立ちたくない。だからページが少ないと言つのはありがたいですね」

タグチ「その気持ち、良く分かります。それでは本題に」

それから20分後・・・

一通り、話を終えたタグチとワタベは次に何の話をしようかと悩んでいたが、タグチが部屋にある段ボールを見てこう言った。

タグチ「動物、好きなんですか？」

マツダ「ん？ああ、そうですね。昔から生物学1本でやってきたか

らでしょうか。動物を見ると興奮するんですよ」

ワタベはなんとなく、段ボールを見ていた。

タグチは話を続ける。

タグチ「ところで、2027年に出したあの論文には感動しました。いや、あんな考え方が出来たなんて、凄いです！」

マツダ博士はどこか嬉しそうだ。

マツダ「あの論文は個人的に失敗したと思っておりますが、実は……」
話が長く続きそうなので、ワタベはトイレに行きたくなった。

ワタベ「あの、トイレは？」

マツダ「ああ、トイレは廊下の左側にありますよ」

ワタベ「ありがとうございます」

ワタベは席を立ち、廊下に出る。

タグチとマツダ博士は話がかなり盛り上がっているようだ。

用を足した（レディに失礼なこと書くな、俺：）ワタベは廊下を歩いていると、ドアが開いている部屋を見つけた。

なんとなく入ってみると、そこには椅子と机、その上にはパソコンが置いてある。

ワタベは閃く。

このパソコンのデータを少しばかり拝借して本部へ持って帰ろうと・
・

ワタベはPDIをパソコンへ繋げる。

パソコンを起動させパスワードを確認する画面が出る。

PDIで簡単にパスワードを解読させた後、すぐにパソコンのデータを全てコピーする。

そしてパソコンを切って、何事も無かったかのようにタグチが待っている部屋に戻った。

3時間後、ダイブハンガー指令室ではワタベがコピーしたデータを

見ようとしていた。

ヨシオカ「でも、これって犯罪じゃ……」

ワタベ「大丈夫、参謀にちゃんと事情は説明したわ。それで怒られもしなかったから」

ミホ「先輩、それでもやっちゃいけないでしょ、それは」

アキラ「そうそう。ミホの言う通りですよ」

ワタベ「……とにかく、このデータを見ればきっと事件はスピード解決よ」

そう言つて、コンピュータを操作して画面にそのデータを出す。

そこには、生き物を怪獣にする方法などが書かれていた。

最後のところにはオオトモ博士と書かれている。

ヨシオカ「オオトモ博士って……」

タグチ「オオトモ博士はネオ・フロンティア時代最悪の博士と呼ばれている人だな。人間が操られる怪獣を生み出そうとしたが逆に怪獣に殺されたんだ」

ワタベ「本当に詳しいのね、あんたって……」

ミホ「その人のデータがあるってことは……」

シンジヨウ「間違いないな。彼が犯人だ」

アキラ「じゃあ、すぐに行きましょう！マツダさんを止めないと！」

シンジヨウ「そんなこと言われなくても分かってる！GUTS・2nd、出動！」

アキラ、ミホ、オオツカ、タグチ、ワタベ、ヨシオカ「了解！！」

アキラとミホが乗るシャーロック、デ・ラ・ムにはシンジヨウ、オオツカ、ワタベが乗る。

タグチとヨシオカはバイクのオートスタッガー1号、2号にそれぞれ乗り、走行している。

マツダ博士のいるビルに到着し、車から降りた7人はシンジヨウを中心として作戦の内容を確認する。

シンジヨウ「もう一回確認するがまず、俺とタグチ、サクマがビルに入る。そして、オオツカ、ワタベ、カンザキ、ヨシオカはビルの外で待機。もしも、俺たちが失敗してマツダ博士が逃げ出したら、お前たちが捕まえる。質問がある奴はいるか？」

アキラたちはそれぞれ首を横に振る。

シンジヨウ「それじゃあ、作戦開始だ！」

シンジヨウ、タグチ、ミホはビルの裏口から入る。

それを見ながら、アキラは何故か嫌な予感がするのを感じた。

シンジヨウ「マツダ博士、あなたを逮捕します」

シンジヨウたちは、マツダ博士のいる部屋に到着していた。

マツダ「ふん、君たちはどうせ、私の研究してきたデータを勝手に見たのだろう。タグチ君、君には失望したよ」

タグチ「ずいぶん、諦めが早いんですね。それと、俺もあなたには失望しましたよ」

ミホはガッツハイパーガンを構えながら、部屋にあるワタベが見ていた段ボールを一瞬見る。

そこには、『カワサキ』と書かれている。

マツダ博士はニヤリと笑い話を始める。

マツダ「失望した理由は何かな？イメージがだいぶ違ったからか？それとも私がこんな実験をしていたからか？後者だったら誰もが私のことを失望するだろうな。だが、私は、自らの行いに後悔なんてしていないよ」

マツダ博士はポケットに入っていたスイッチのようなものを取りだし、それを押す。

どこからか、大きく鈍い音が聞こえてきて、部屋に人間大の怪物が入ってくる…

30分後、ワタベのPDIに通信がかかってきた。

ワタベ「はい、こちらワタベです。どうかしたんですか？」

画面越しに映るシンジヨウは汗をかいていた。

シンジヨウ「マツダ博士に逃げられてな。いや、それだけなら良かったんだが・・・」

ワタベ「分かりました。こちらで捕まえます」

シンジヨウ「そっちは後回しだ！入り口を固める！！」

ワタベ「？・・・それってどういう意味で・・・」

ヨシオカ「うわ！何ですか、こいつは！？」

アキラ「知るか！」

ワタベは声のした方向を見ると、猿のようだが人間より少し大きい怪物がアキラたちを襲っていた。

ワタベ「だいたいは分かりました！」

そう言っただけで通信を切って、ワタベはガッツハイパーガンを手を持ち、怪物に向かって撃った。

ワタベは普段はオペレーター担当だが、銃を持つと百発百中のスナイパーと呼ばれるほど必ず当たる。

勿論、怪物の心臓部分に当たり、怪物は倒れた。

倒れた怪物を見ながら、ヨシオカは叫んだ。

ヨシオカ「本当に何なんですか！？」

ワタベ「多分、マツダ博士がオオトモ博士のデータを基に作った怪物でしょうね。隊長が言うには、マツダ博士には逃げられた。多分その時に包み隠さず全部出してくれんたんだと思います」

オオツカ「だとしたら、隊長たちが危ないな。カンザキ、ヨシオカ、お前たちは隊長たちを助けにいつてくれ」

アキラ「了解！」

ヨシオカ「でも、外に出ようとする怪物はどうするんですか？」

オオツカ「それについては心配するな。ここにはワタベがいるし、シャーロックやデ・ラ・ムがある」

ヨシオカ「なるほど、分かりました。カンザキ先輩、行きましょう！」

アキラ「お前に言われなくても分かってるぜ！！」

二人は建物の中へ入っていった。

中に入ったは良いものの怪物は今までに何匹もいて、アキラとヨシオカはなんとか倒していった。

ヨシオカは息切れしながら言う。

ヨシオカ「ハアハア、このままじゃ…隊長たちのところに着くまでに…僕達死にますよ」

アキラ「だったら、お前だけ帰ってもいいぜ。正直、死にたくはないだろう?」

ヨシオカ「確かにそうですね…でも行かなきゃ」

アキラ「その感じだ、若者よ」

アキラとヨシオカは走り出す。

が、その時だ!

二人の目の前に先ほどワタベに倒された猿に似た怪物が突然現れた!

ヨシオカは殴られてしまって、後ろの壁にぶつかる。

アキラ「ヨシオカ!」

アキラはガッツハイパーガンを撃ちまくるが、怪物はそれにビクともしない。

アキラ「チキシヨー!」

そう言うとアキラは怪物を殴ろうとする。

ドン!

鈍い音がしたかと思ったら、怪物は倒れていた。

アキラは偶然か、と思ったが、もしかしたらとも思いもう一度殴りにかかる。

また鈍い音がして怪物は悲鳴のような声を上げた。

アキラは自分自身に驚いていた。

アキラの運動神経は悪い方だ。

正直言つて、喧嘩などでは勝ったことはない。

それなのに怪物はこうして倒れている。

どうしてだ、アキラは考えていると一つの理由が浮かぶ。

アキラ（俺が・・・ツインと融合したから？それで体が強化されたのか？）

きつてこれが答えだと思い、アキラは怪物を持ち上げた！

そのまま近くの窓に投げる。

バリンという音と共に怪物は落ちていく。

アキラは窓から下を見ると怪物は動いていない、恐らく死んだのだ

ろっ。

アキラは思い出したかのようにヨシオカの所まで行く。

アキラ「ヨシオカ！大丈夫か！？」

ヨシオカは反応しない。

どうやら屍：気絶しているようだ。

アキラ「ったく。こんな時に」

ヨシオカを背負って行くわけにもいかない。

アキラは少し考えることにした。

シンジヨウたちは怪物を倒しつつ、マツダ博士を追っていた。

マツダ博士が逃げるときに、シンジヨウの機転で発信器を着けたから見逃したが、捕まえることは出来る。

その途中でタグチは二つの人影を見つけた。

シンジヨウたちは人影に近づいていく。

その内の一人はこちらに気がついた。

アキラ「あ、ミホ！隊長も無事でしたか！」

シンジヨウ「カンザキ！それにヨシオカもどうしてここにいるんだ？・・・ってヨシオカは気絶してるじゃないか！？」

アキラ「副隊長の命令です。ヨシオカは怪物に襲われてこうなりました」

ミホ「アキラは大丈夫なの？」

アキラ「俺はこの通りピンピンしてるぜ」

タグチ「そんなことよりマツダ博士だ！・・・隊長！！後ろです！！」

シンジヨウ「何？うわ！？」

またしても怪物が現れた。

シンジヨウは殴られてはしまったが、ヨシオカのように気絶はしていない。

タグチとアキラはガッツハイパーガンを使うが、弾が出ない。

タグチ「マジかよ！？」

アキラ「この野郎！」

アキラは先ほどのように殴り倒そうとするが、返り討ちにされてしまった。

アキラ「どうしてだ！？さっきはやれたのに!？」

さっきの怪物は弱い方だったのだろうか。

とにかく、アキラは怪物に殺されてしまう!

タグチ「サクマ!撃つんだ!」

タグチはガッツハイパーガンのカートリッジを変えながら叫んだ。

ミホは銃を構えながらも、撃つことが出来ない。

それどころか額から汗を出し、激しく息切れをしていた。

アキラも命の危険を感じ、叫んだ。

アキラ「ミホ!撃つてくれ!!」

バンという音が響く。

怪物はゆっくりと倒れた。

アキラの近くに、ガッツハイパーガンを持ったシンジヨウが近寄ってくる。

シンジヨウ「二人とも、今色々なことを言いたいが、それは後回し

だ。カンザキ、サクマ、お前たちはヨシオカを連れて、ここから脱出しろ。タグチ、お前は俺と一緒に来い」

アキラ、ミホ、タグチ「了解」

アキラとミホはヨシオカを背負い、歩き始めた。

マツダ博士は自らの車に乗って、二匹の猿に注射を射った。

そして二匹の猿を外に出し、車を走らせる。

少し遠くまで行くと、電子ライターを着火させる。

マツダ「さらばだ」

そう言って助手席に置いてある液体の入っているペットボトルにライターを入れた。

アキラとミホは何とかして、外に出たらオオツカとワタベが出迎える。

オオツカ「隊長とタグチは無事だったか!？」

アキラ「ええ、無事でした。とりあえずヨシオカをデ・ラ・ムで休ませたいんですが…」

オオツカ「分かった。後は俺がやろう」

オオツカはヨシオカをデ・ラ・ムまで背負って運んだ。

ワタベは隊長に通信をかけると言って、アキラとミホから離れる。

一応二人きりになったアキラとミホは黙り込んだままだった。

アキラは聞きたいことがあるがどうしても言えない。

ミホは謝りたいことがあるものの、口が開かない。

何処からか、爆発したような音が聞こえる。

何だろうと二人は思うと、そこから西の方向に大きなものが目に写る。

異形進化怪獣・グライブだ！

突然のことに驚くが、アキラはじぶんのすべきことをするためグライブに向かって走る。

ミホ「アキラ！」

アキラ「ミホは後から来て！」

アキラはガッツハイパーガンを持って走り、撃ちまくる。

勿論効果はない。

グライブは口を大きく開くと、青色の光弾を出した。

アキラはそれをなんとか避けると、ミホや他の隊員がいなかったかを確認し、内ポケットからライト・カートリッジを取り出す。

ワタベから通信を受けて、マツダ博士搜索を断念し、外に出たシンジウとタグチの目にはグライブとウルトラマンツインが立っていた。

右腕を前に出し、左腕は曲げ、ファイティング・ポーズを取るツイン。

ツインはジャンプをして、空中で一回転をするとグライブに蹴りを入れた。

倒れたグライブの尻尾を掴み、そのままグライブを回しながら持ち上げていく。

尻尾を離し、投げ飛ばされたグライブは地面に激突、相当なダメージを喰らったらしくとても痛がっている。

ツインは気合いを入れるため自分の頬を叩くと、グライブを殴る。

グライブは悲鳴を上げる。

その声に反応するかのようにまたもや爆発音が聞こえる。

ツインは音のした方向を見ると、新たな怪獣・オーガヌ・がいた。

かなり弱っているグライブを無視してツインはオーガヌを倒すため、走る。

近くまで寄り右手を使って殴る。

が、オーガヌは全く動じない。

ツインは右手、左手を交互に繰り出す。オーガヌにとってそれは痒いだけのようだ。

今度は、オーガヌが攻撃を加える。

右手でツインを叩きつけると、ツインの左腕を掴み肩に噛みつく！

ツインは痛みを堪えているようだが、やがてそこから血の代わりに光が出てきた。

今度はグライブが立ち上がり、青色の光弾を放つ。

ツインは光弾に直撃し、その時からカラータイマーが赤く点滅し始めた！

ウルトラマンツインは地球上では3分しか活動できない。

その光が消えるとき、ツインは死んでしまう！

グライブが光弾を放とうと口を大きく開いた瞬間だった。

GUTS・2ndが攻撃をして、グライブの動きを止めた。

ツインは力を振り絞り、体を赤く発光させる。

オーガヌの口から煙りが出てきた。

その瞬間を狙ったのか、ツインはオーガヌの顔を殴り、左肩から口を離れたすきに前転をして離れる。

そしてツインは両腕を真横に水平にのばして『センチラル光線』をグライブに向けて発射させる。

直撃して跡形もなく爆発するグライブ。

続いてオーガヌの止めを刺そうとするツインだが、周囲を見渡す。

オーガヌがいない…逃げたのか、ツインはそう思うと、エネルギーが限界に近づいていると感じ、両腕を下に向けてクロスさせ、光となり消えていった。

光が消えた後、地面にはアキラが立っていた。

アキラは左肩に違和感を感じた。

もしやと思い、服を脱ぐと肩からは血が出ているではないか！

アキラ「どうして…だ……」

意識が朦朧とし始め、アキラは気絶した…

オーガヌを探すため、ピーパーに乗ったオオツカとヨシオカだが、そこに魔の手が忍び寄る。

そしてアキラは左肩を見てあることを思い付く！

次回ウルトラマンツイン、第8話「立て！アキラ！！」

さあ、次回も皆で読もう！！

第7話 実験の果てに - 異形進化怪獣 オーガヌ グライブ スネーブ - (後

なんか長くなってしまいました…

感想、リクエストをお待ちしております

第8話 立て！アキラ！！ - 異形進化怪獣 オーガヌ - (前書き)

最近、文章力無いなと改めて思い始めている近頃であります(苦笑)

第8話 立て！アキラ！！ - 異形進化怪獣 オーガヌ -

アキラ「痛！！」

メディカルセンターではアキラの叫び声が響く。

マユミ「あなたは男の子でしょ。
この程度何ともないわ」

シンジヨウの妹であるヤズミ・マユミがアキラの傷の手当てをしている。

アキラ「でも、痛いものは痛いですよ」

マユミ「全く、前線で戦う人ってどうしてこんなに無茶したがるんでしょうね」

そう言いながら、マユミはシンジヨウを見る。

咳払いをするシンジヨウ。

シンジヨウ「その事は置いておいてだな、マユミ。アキラの怪我の具合はどうだ？」

マユミ「全然大丈夫よ、何て言うか…体質はダイゴさんとアスカ君に似てるわね。もしかしてあなた…」

アキラ「へ？」

マユミ「いいえ、何でも無いわ。それよりも、あなのことを心配している人がいるってことを忘れないこと。今日は帰っていいわよ」

アキラ「あ、はい。分かりました。今日はありがとうございました
…シンジヨウ隊長は戻らないんですか？」

アキラは制服の上着を着ながら言った。

シンジヨウ「俺はマユミと雑談でもしたら戻るよ。オオツカたちにそう伝えてくれ」

アキラ「分かりました。それじゃあ、失礼します」

アキラは通路に出た、外ではミホが待っていた。

アキラ「ミホ？どうしたの？」

ミホ「その…ごめんなさい。あたしのせいでもあるよね。その怪我…」

ミホは躊躇しながらも左肩を見る。

アキラ「何でミホのせいになるのさ？これは明らかに自業自得だよ。勝手に怪獣を攻撃した罰だよ」

ミホ「謝るのはそれだけじゃないわ。あなたが怪物に襲われた時、あたしは撃てなかった、ううん撃ちたくなかったの」

アキラはミホが最後に言った言葉に驚いたが、それは聞きたいことでもあった。

アキラ「・・・なんで撃ちたくなかったの？」

ミホ「一週間前、アキラと一緒にペットショップ行っただの覚えてる？あの時動物を全部買うつて話、電話の相手は…マツダ博士だったのよ、きつと。あたし見たの、部屋にあった段ボール箱に書いてあった店の名前…同じだったわ」

アキラ「！！じゃあ、あの怪物たちは…」

二人は黙り込んだ。

あとのことは何故か恐ろしく言葉にできない。

しかし、何かを言わなければ…先に口を開いたのは、アキラだった。

アキラ「それで、撃てなかったのか？」

アキラの言い方はどこか非難に近かった。

同情なんてない、そういう感じだった。

ミホは少し戸惑いながらも、答える。

ミホ「・・・うん」

アキラ「・・・くだらない」

ミホ「え？」

アキラ「怪獣との戦いにそういう感情はいらないんだよ。あいつらは悪魔だ。同情してると殺されちまう。だか…」

ミホ「待つてよ！あたしの話理解して言ってんの！？あの子達は被害者なのよ！人間のしょうもない実験のせいで勝手に改造されたかわいそうな存在なのよ！！それなのに、あなたは どうして そう 酷い こと と言えるのよ！？」

アキラ「酷いだって！？ミホだって、自分の大切な人が怪獣に殺されれば、考え方は変わるだろうさ！！」

アキラはミホに背を向けて、歩き始めた。

ミホは追いかける気にもなれなかった。

ただただ、その寂しそうな後ろ姿を見ているだけだった。

アキラは腹をたてていたため、忘れていたが10分くらい経つと肩の痛みを感じてくるようになっていた。

命を共有しているからこんなことになったのだろうか、そして自分の体が強化されたこと、ツインはオーガヌに勝てず逃げられたことを考えていた。

オーガヌ…もし、また現れたらツインは勝てるのだろうか？

自分に出来ることはないのだろうか？

傷が疼く…アキラはそう思っていると、名案が浮かぶ。

アキラ（ツインが受けた怪我は俺にも受ける。だったら逆に…）

アキラは指令室に向かった。

1日後、指令室に入ったタグチは部屋に一人いないことにすぐ気づく。

その一人は勿論…

シンジヨウ「ああ、カンザキは1週間の休暇をとった」

タグチ「あいつ、そこまで悪かったんですか？」

ワタベ「何でも、最近、うつ病になりかけているから、休ませてほしかったんだって」

タグチ「カンザキがうつ病だって！？……人一倍、いや3倍元氣のある奴も精神的には弱いんだね。」

オオツカ「タグチ、それは違うな。カンザキは絶対にうつ病なんかになる男じゃない」

ヨシオカ「どうしてそう言えるんですか？」

オオツカは少し唸ったあと、答える。

オオツカ「まあ、休暇の報告の時にあいつ俺とシンジヨウ隊長の目を真っ直ぐ見ていなかった。俺の長男は嘘をつく時、人の目を真っ直ぐ見ないのと同じだな、うん。因みにその時の長男の仕草が可愛いよ」

ミホ「それって副隊長のお子さんだけじゃないんですか？」

ミホは冷たく言った。

ミホ「どうせ、カンザキはもう怪獣退治はやりたくないって感じで、仕事をサボってるんですよ」

そう言うとミホは指令室から出ていく。

ヨシオカ「ワタベさん…カンザキさんが休んでいる原因はサクマさんと喧嘩したからじゃないでしょうか？」

ワタベ「あり得ると言ったらあり得るけど、それじゃあカンザキ君が休む理由とは繋がらないわよ」

ヨシオカ「ですよね……すいませんでした」

ある岩山、そこでは重そうな機械を持って登っている男がいた。

その男こそ、ダイブハンガー指令室で色々言われていたアキラだった。

彼は何をやっているかと言うと中古車から抜き取ったエンジンを持って岩山を登ることで、自らの体を鍛えていた。

いや、正確にはツインを強くするためと書くべきだろう。

ツインが受けたダメージは同じ体で共生しているアキラにも現れてしまう。

だったら逆にアキラは自分の体を強くすればツインはもっと強くなれる、そう考えたのだ。

アキラは息が切れており、足もフラフラしている。

いつか転んでしまいそうだが、アキラはそう思っているとそれが現実になってしまう。

足下には小さな石があったのだが、アキラはそれに気づかなかった。

何故、無事だったのかは分からない。

エンジンはを見ると、炎上していた。

一体何があったのか？

アキラはエンジンにはまだガソリンがあり、それが何らかの形で引火したのだらうと思った。

そうでなければ納得できない、そう思うとアキラはそこら辺にあった大きな岩を持ち上げた。

そして4日後、オオツカ、タグチ、ヨシオカはGUTS・2ndが所有しているドリルタンクピーパーに乗って地下を進んでいた。

この地下では巨大な生命反応があり、GUTS・2ndが調査することになったのだ。

ピーパーはドリルを回転させ土を掘り進む。

土の中は何も見えない程暗いが、ピーパーのコクピットはとても明るい。

そのコクピットの明るさ対象に3人は緊張しているのか、何も話さない。

いつの間にか、大量にあつた土が無くなり、ぽつかりと大きな穴がある空間に出ていた。

タグチ「副隊長、生命反応はここから出ています」

オオツカ「分かった、ヨシオカは地上にいるシンジヨウ隊長に通信で着いたと伝える」

ヨシオカ「了解」

オオツカ「それじゃあ、先に進むぞ」

止まっていたピーパーは前に進み始めた。

アキラはまだ岩山にいて、特訓をしていた。

しかし、アキラは違和感を感じていた。

アキラ（何かが来る、俺は感じる……。方角は北西？）

そう思うと、アキラは北西に向かって走り出した。

地上ではガッツウイング1号が二機、待機してある。

その近くでは仮設本部が設置されており、シンジヨウ、ミホがいた。

シンジヨウはミホに語りかける。

シンジヨウ「サクマ……、お前この仕事嫌いか？」

ミホ「好きですけど……どうしたんですか？いきなり、そんな質問をして？」

シンジヨウ「この間、カンザキが殺されそうになった時、お前は撃てなかった。どうして撃とうとしなかったかは聞かない。だがな、中途半端でこの仕事をやってるんだったら、辞めた方がいい」

ミホ「そんな中途半端なんて……」

シンジヨウ「怪獣との戦いは生きるか死ぬかだ。それを肝に銘じておけ」

サクマ「……分かりました」

その時、ピーパーから通信が来た。

あたしが出ます、と言ってミホは通信機を操作する。

ミホ「こちら、サクマです。副隊長、どうかしましたか？」

オオツカ「サクマか、急いで隊長に代わってくれ！」

シンジヨウ「どうしたんだ？」

シンジヨウが出てきてオオツカにそう言った。

オオツカ「この間の逃げた怪獣がいやがりました！今から、コールドビームで氷付けにしますが、念のため戦闘準備をしてください！」

シンジヨウ「待て！その場からすぐに……畜生、あいつ切りやがった！サクマ、今度は撃てよ！！」

ミホ「はい！」

地下ではオーガヌに向かって、ピーパーがコールドビームを放つ。

オーガヌの左肩に直撃してそこから氷が発生、徐々に体を包もうと

する。

しかし、オーガ又は前回ツインがこの怪獣の牙から逃げるため使った技のように体を赤く発光させた。

それに伴い、氷は水蒸気を出しながら溶けていく。

ヨシオカ「副隊長！あいつにはコールドビームが効きません！！」

タグチ「このままじゃ退却するしかありません！」

オオツカ「分かってる！後退するぞ！」

ピーパーはキャタピラを回して、機体を前に向けたまま後ろに進み始めた。

オーガ又はそれを逃さないと口から青白い光線を出した。

後退していたピーパーはギリギリでそれには当たらなかったが、当たった地面は氷を張り始めた。

ヨシオカ「コールドビームと同じ効果じゃないですか！？」

タグチ「そうか！アイツは自分が喰らった攻撃の効果を吸収できるのか！！だから、ツインが使った技もさっき使えたんだ！！」

オオツカ「ご丁寧な説明アリガとよ！けどな、今言っても、それは無意味だ！！」

オーガ又は光線を出しまくる。

ピーパーは何としても当たらないと、全速力を出す。

が、ピーパーのキャタピラに当たってしまった！

ヨシオカ「うわ！？」

オオツカ「タグチ、キャタピラを動かせるか！？」

タグチはコンピュータを操作しながら叫んだ。

タグチ「駄目です！畜生、それでも駄目か！！」

ヨシオカ「そんな……動かしてくださいよ！タグチさん！！」

タグチ「俺を焦らせるな！ヨシオカ！」

オーガヌはピーパーにゆっくり、ゆっくり近づいてくる……

ヨシオカ「あ、ああ副隊長……あいつがこちらに……嫌だ！！僕は死にたくない！！」

オオツカ「ヨシオカ！落ち着け！絶対に俺たちは助かるんだ、そう
思え！！タグチ、フューザーZ用意だ！！」

タグチ「了解！！……フューザーZ準備完了！！発射します！！」

ピーパーのドリルの先端から、熱線？フューザーZ？が飛び出し、
オーガヌの右目に直撃した。

オーガ又は右目を押さえ、地上に出ようと土を堀始めた。

タグチ「助かった……。ヨシオカ、大丈夫か？」

ヨシオカは息切れしつつも、首を縦に降る。

オオツカ「タグチ、隊長に連絡だ」

タグチ「分かっていますよ」

オーガ又は地上に現れた時、シンジヨウとミホはオオツカたちから連絡を受け、ガッツウイング1号に乗っていた。

シンジヨウ「出たな！サクマ、分かっていると思うが……」

ミホ「大丈夫です。・・・多分」

シンジヨウの乗る1号はオーガ又は足を狙って、ビームを連射させた。

足を撃たれたオーガ又はその反動で前に倒れる。

ミホは躊躇うが、アキラが怪物に襲われているところを思い出す。

ミホ（もし、あたしが撃てなかったら今度は死ぬ人が出てしまう……。だからアキラはあたしにくだらないうって言ったんだ。お願い、あたしの手、動いて）

操縦桿のスイッチをゆっくりとはあるが、ミホは押した。

黄色の飛行物体から出る緑色のビームはオーガヌに当たった。

シンジョウ「よし、いつもの調子に戻ったな、サクマ！」

オーガヌは倒れていたが、口から今度は熱線を出した。

なんとか回避し二機は攻撃を仕掛ける。

その光景は正に一進一退だった。

しかし、シンジョウの機体に熱線が当たってしまった！

アキラはその時にやって来た。

ガッツウィング1号の右翼から煙を出しているが、誰が乗っている

かは分からない。

アキラは迷わず、ズボンのポケットからライト・カートリッジを取り出す。

アキラ「あいつ、この間の奴か。特訓の成果・・・見せてやる・・・行くぜ、ツイン！！」

シンジヨウの乗る1号は地面に墜落する寸前に眩い光に包まれた。

シンジヨウはあまりの眩しさに目を閉じるが、光が消えたと思って外を見ると、巨大な手のようなものが見える。

そう、ウルトラマンツインが立っていたのだ！

ツインはガッツウイングを地面に下ろすとオーガヌと向き合い、フアイティング・ポーズを取る。

先制を取ったのはオーガヌ、熱線でツインを狙う。

ツインはそれをジャンプで避けてオーガヌを飛び蹴りで吹き飛ばす。

オーガヌに反撃の機会を与えさせないため、ツインは走っていき右手を突き出した。

オーガヌは腹にめり込んだパンチの効果によって苦しんだ。

シンジヨウ「よし、今のあいっだったら怪獣に勝てるぞ！」

そう言っつてシンジヨウはガッツハイパーライフルを持って、ツインを援護すべくオーガヌを撃つ。

シンジヨウも射撃の名手だ、撃った弾は全てオーガヌに命中した。

がオーガヌはそれには効果は無かったようだ。

ミホ「だったら、これでどうよ！」

ミホはオーガヌに向けて1号のミサイルを放った。

ミサイルは直撃し、爆発によりオーガヌは悲鳴をあげる。

ツインはさらに追い打ちをかけるため、左腕で殴ろうとした。

オーガヌはそれを避けて、前の戦いのように肩に噛みつこうとする。

しかし、歴史は繰り返すが良い方向に進むというものだ。

ツインは噛みつかれないためにもオーガヌの顔を殴り飛ばした！

牙が折れたオーガヌは冷凍光線を口から出した。

迫り来る青白い光線に対してツイン両腕を前に出して、エネルギーバリアを形成した。

光線はバリアに吸収されていき、ツインはそれを球状に小さくして

いきながら、左腰に両手を添える。

そして、腕を前に突き出して（右手を上、左手を下に拳を半開き状態にした）、『リバー光球』をオーガヌに発射した！

オーガヌは避ける間もなく、『リバー光球』に当り仰向けに倒れ、爆発した。

その後、ツインは何かを感じたのか、飛び立とうともせずオーガヌが地上に出てくるために掘った穴の中へと入った。

ピーパーはまだ動かせずにいた。

タグチ「ああ、もう！動けって言ってんだろー！！」

オオツカ「ヨシオカ、外の感じはどうだ？」

ヨシオカ「駄目ですね。完全に氷が張っています。タグチさん、ピーパー熱くすることは出来ないんですか？」

タグチ「それが出来たらとつくの昔にやっとなるわ」

ヨシオカ「ですよ……あ、あれってもしかしたら！」

オオツカ「どうした、ヨシオカ？」

ヨシオカは喜びながら叫んだ。

ヨシオカ「ウルトラマン！ウルトラマンツインが助けに来たんです
！！」

タグチ「何だって！？」

ヨシオカはピーパーのコクピットに入ってきた。

オオツカ「お前さん、俺たちを助けに来るためだけにウルトラマン
が来る、ウワッ！？」

ピーパーが突然揺れたかと思ったら、外には巨大な手が見えた。

それから15秒後、3人は明るい場所が視界に入ってきた。

ツインはピーパーを地上に置くと、今度こそ飛んでいった。

2日後、ダイブハンガー指令室ではアキラの大きな声が響いていた。

アキラ「申し訳ありません！勝手に休んでしまつて！！」

シンジヨウ「そう言いなさんな。それに勝手に、というわけじゃないだろ？」

アキラ「え、でも……」

シンジヨウ「早速で悪いが、パトロールに出てもらう。今回の相棒は……ヨシオカだな。格納庫で待つてるはずだから、すぐに行け」

アキラ「あ、はい。了解しました」

格納庫のシャーロックが置いてある所ではヨシオカ……ではなく、ミホがいた。

アキラ「ミホ？どうしてここに？……ヨシオカは？」

ミホも驚きながらも答える。

ミホ「それはこっちのセリフよ。ワタベ先輩じゃないの？」

アキラ「?・・・ま、いいつか。行こう」

二人はシャーロックに乗ってパトロールに出た。

その途中でアキラはミホに話しかけた。

アキラ「ミホ、まだ怒ってる?その、俺」

ミホ「謝らなくていいの。あれはあたしが悪かったんだから」

アキラ「でも俺、ミホに」

ミホはまた、アキラの話を遮る。

ミホ「もし、あなたが自分の方が悪いと感じるんだったら、あたしは頼み事するけどいい?」

アキラ「頼み事……分かった。何でもいいよ」

ミホ「一週間、あたしの命令を聞くことね」

アキラ「命令を聞くことだって!?!そりゃ無いぜ!」

ミホ「今さっき、何でもいいよって言った人はどこのどいつかな?」

アキラは観念したかのように言う。

アキラ「分かったよ……。で、お姫様、命令第一号を教えてくださいですが、どのようなものなのでしょうか?」

アキラの畏まった話し方にミホは笑いつつ、こう言った。

ミホ「まずはシンプルに、ランチを奢ってほしいな」

アキラは時計を見ると、もう12時前だ。

アキラ「分かりました。それでは参りましょう」

シャーロックは十字路を右折した。

アキラはミホに過去を語らない、ウルトラマンツインはアキラに過去を語らない。

このどこか似ているアキラとツインに、恐怖の怪獣が襲い来る！

次回、ウルトラマンツイン第9話「古き記憶」

さあ、次回も皆で読もう！！

第8話 立て！アキラ！！ - 異形進化怪獣 オーガヌ - (後書き)

はい、まず、今回の話は『帰ってきたウルトラマン』第4話『必殺！流星キック』を下敷きにしたというのは言うまでもありません。

えーと、それだけです(爆)

感想、リクエストをお待ちしております。

さらに後書き

次回はホラーじゃないですよ？(笑)

第9話 古き記憶 - 超古代恐竜 ルオード -

アキラはツインと融合する前に見ていた夢を忘れかけていた。

しかし人間はきっかけがあれば思い出す。

今回の物語はダイブハンガーの資料室から始まる。

アキラは資料室で今から約20年前のデータを映像で見ている。

画面にはゴルザ、メルバ、エボリユウ、レギュラン星人、キリエロイド、ゴルドラス、そして・・・

アキラ「邪神・・・ガタノゾーア・・・」

ガタノゾーアと戦っているティガだが、次第に追い詰められていく。

そして敗北し、石像となって海の底へ沈んでいく。

そこでアキラは画面を切る。

まだ続きがあるのだが、視聴を止めた理由は二つある。

一つ目はその後の結末を知っていたから。

いや、知っていたと言っても見ていたと言った方が適切だろう。

因みに戦いの結末は石像になったティガを蘇らせるため当時のGUTSがマキシマ・オーバードライブを使うも失敗してしまうが、最後まで諦めなかった世界中の子供たちが光となりティガと融合、グリッターティガとなり、ガタノゾーアを倒した。

その中の一人にアキラもいた。

アキラはその事を昨日のように覚えている。

もう一つの理由はツインに聞きたいことがあった。

ツインと融合して早3ヶ月、アキラはツインのことをその前から知っていた。

彼は、ツインの夢を見ていた。

ガタノゾーアに負ける夢を…

この3ヶ月に色々なことがあったせいか、アキラはすっかり夢について忘れていたのだ。

アキラはツインに呼びかける。

・・・しかし、ツインは反応しない。

何故だろうとアキラは思っていると、彼のPDIに通信がかかってきた。

アキラ「はい。こちらアキラです」

ワタベ「怪獣出現。すぐに指令室に来て」

GUTS・2ndはガッツウイング1号、2号に乗って、怪獣が出たと言う山脈に来ていた。

そこには怪獣・ルオード・がいて、火球を出して1号、2号を近くには寄せない。

アキラは地上から攻撃を仕掛けていた。

バズーカを使ってルオードを狙い撃つが、効果はあまり無いようだ。

アキラ「効かないんだったら、俺たちの实力を見せてやろうぜ。．．
・行くぜ、ツイン！」

アキラはポケットから出した、ライト・カートリッジを右手で持つて、頭上高く掲げる……が、何も起こらない。

アキラ「どうしたんだ！？ツイン、反応してくれ！」

アキラはライト・カートリッジを何回も上げるが、やはり何も起こらなかった。

ルオードは火球を1号に連射した。

1号には、シンジヨウとタグチが乗っている。

1号はなんとか避けるが、いつか当たってしまいそうだった。

アキラは咄嗟の判断でライト・カートリッジをバズーカに装填する。

エネルギーが一気に増えたことにより、バズーカから出た弾は強大なものとなり、ルオードに直撃した際には結構な爆発を起こした。

アキラ「やったぜ！」

が、ルオードはアキラの方を見始めた。

ピンチを察したアキラはルオードに背を向け、走り始める。

ルオードは火球を何回もだして地面は爆発を起こす。

その爆発の一つに巻き込まれ、アキラは気絶してしまった……

山の中には何体ものウルトラ戦士がいた。

彼らは傷つき、1体を残して全員倒れていた。

その1体、ウルトラマンツインはルオードと対峙している。

ルオードの火球を両腕で弾き返しつつ、ツインは距離を縮めていく。

ルオードにパンチを何発か加えたが、効果はほとんど無いようだ。

だったらと、ツインは右足で回し蹴りをした、がルオードは尻尾を使ってツインを吹き飛ばした。

吹き飛ばされたツインは、地面に倒れつつもすぐにダート光弾を放つ。

ルオードも火球を出して光弾に当て、爆発させる。

この戦いを有利なものにするため、今度はソードスラッシュでしばを切るうとするがこれは避けられてしまった。

続いてツインはセンチラル光線を発射するため、両腕を左右に伸ばした。

ルオードは目を怪しく光らせ、自らの体に光るようなものを纏った。

ツインに十字に組んだ腕からセンチラル光線が飛び出て、ルオードに直撃する。

だが、ルオードの体に当たった光線は跳ね返りツインに向かってくる。

いきなりのことだったので、ツインは光線に為す術もなく当たってしまった。

ツインは力尽きたかのように倒れ、何回も起き上がろうと腕を立てるがやはり倒れてしまう。

そうしている内にルオードはツインに止めを指すべく足を一歩ずつ踏み出す。

ズシンズシンと大きな地響きの音に気がついたツインは他の戦士のようにならないためにも立ち上がろうとするが、それは不可能に近かった。

ツインは頭をあげる。

ルオードが口から煙を出していた。

そして……

白い光線がルオードの体に当り、爆発を起こした。

ツインは後ろを見る。

そこには銀と赤と紫色のした光の巨人・ウルトラマンティガが立っていた。

アキラが目を覚ますと、皆が下を向いて彼の顔を覗いていた。

ミホ「アキラ！ああ！良かった！！」

アキラ「……ミホ、どうしたんだ？……ああ、皆死んだのか」

オオツカ「馬鹿野郎！生きてるわ！」

アキラ「じゃあ、俺も生きてるんですね？良かった良かった」

タグチ「全く……全てが良い訳じゃないぞ」

アキラ「どういう意味ですか？」

シンジヨウ「まあ、怪獣には逃げられてな。こうして仮設本部を作

「つてお前の看病をしていたわけだ」

アキラは改めて周囲を見渡した。

確かにテントのようなものが骨組みにしたがって組み立てられている。

そして中には自分が寝ているベットを始め、色々な機械が置いてあった。

アキラ「で、これからどうするんですか？」

シンジウ「一応、モンスターキャッチャーは撃つておいた。反応によると、この辺りをうろついているわけだが俺たちから行動を起こしても危険が増えるだけだ。だから休憩ついでにあいつを待つのだ。あ、そうだ。ワタベはコネリー09に乗ってこっちに向かっている」

コネリー09は新型のTPCの飛行艇だ。

旧型であるコネリー07は救助艇として最低限の武装しかなかったが、最初から戦闘機として開発されたコネリー09はガッツウイングと互角な戦闘力を持っている。

アキラ「分かりました、ちょっと外の空気を吸ってきます」

アキラはそう言うと、ベットから降りる。

が、降りた瞬間足がふらついて倒れそうになってしまう。

一番近くにいたミホがかろうじてアキラの体を支えた。

アキラ「ミホ……ありがとう」

ミホ「どういたしまして」

オオツカ「よし、またカンザキが倒れるかもしれないから、サクマもついていけ」

ミホ「あ、分かりました」

アキラはまだミホに支えられ、仮設本部から出ていった。

やはり自然の空気は都会とは全く違う、どこか癒されるとアキラは思った。

するとミホが突然話しかけてきた。

ミホ「アキラって、どうして今日は浮かない顔してんの？」

アキラ「俺が浮かない顔してるって？そんな風に見えるのか？」

ミホ「うん見えるわ。なんというか、知りたいことを知ることが出来ないからって言うか……」

アキラ「え？まあ、確かにそう思ってるけど、ミホもそんな感じだぜ？」

ミホ「……あたしも？うーん、あるとしたらアキラのことね」

それを聞いて、アキラは少し困惑した。

ミホは言いづらそうに話を続ける。

ミホ「昔の話、あれをまだ、あなたから聞いていないもの」

アキラ「ああ、今言わないとだめかい？」

ミホ「別に今じゃなくていいけどね。出来れば早い方がいいなって思ってる」

アキラ「じゃあまた今度で」

二人は黙り込み、アキラは考える。

アキラ（俺はツインと似ている。俺はミホにあのことを語らないし、ツインは過去に何があったか語らない。こんな俺達が融合したのは偶然か？）

そして、夢で見たツインとルオードが戦っている場面を思い出す。

（あの怪獣、ツインは恐怖を抱いているから戦えないのか？ツイン、君は完璧じゃないんだね。だったら怪獣は……）

コネリー09がこちらに向かってくる。

そして、ミホのPDIに通信がかかってきた。

ヨシオカ「コネリー09が着きました。それと同時に怪獣が地上にあと3時間出てくるそうです」

ミホ「分かったわ。アキラ、行こう」

アキラ「……ああ」

約3時間後アキラはコネリー09に乗っていた。

彼が自ら志願したのだ。

理由は、ツインはルオードに恐怖を抱いているため、満足に戦うことはできないだろう。

だったら自分が止めを指すと決めたのだ。

ガッツウィング1号にはミホ、2号はシンジヨウ、タグチ、ワタベ、地上からはオオツカとヨシオカが攻撃する。

タグチはコンピュータを見ながら、通信機を使って皆に言った。

タグチ「怪獣出現まで15秒！・・・10、9、8、7、6、5、4、3、2、1、来ます！！」

大きな爆音、そして煙と共にルオードが姿を現した。

シンジヨウ「攻撃開始だ！！」

コネリー09、ガッツウィング1号が先陣し、ルオードにビームで攻撃を加える。

それからオオツカとヨシオカ、2号もルオードを倒すべく動いた。

ルオードは火球を口から何発も出すが全く当たらない。

戦いはGUTS・2ndが優勢のまま、続いた。

コネリー09からは、弾切れを起こすのでは、と言わんばかりにビームやミサイルが出る。

体中に爆発を起こすルオードだったが、ツインと戦った時のように目を光らせシールドを体に纏う。

それによりビームは反射されるようになってしまった。

タグチ「あいつはビーム系の攻撃を跳ね返せるのか！？どっかの宇宙戦争の光の剣じゃ無いんだぞ！！」

シンジヨウ「だったらミサイルで攻撃するぞ！」

ワタベ「了解。ミサイルはどれくらい放てばいいでしょうか？」

シンジヨウ「ありったけだ！」

2号からミサイルが飛び出る。

ミサイルはルオードに当たった。

しかし、ミサイルはルオードにはあまり効果は無いようだ。

コネリー09はルオードに近付いていく。

シンジヨウ「カンザキ、そいつから離れろ！あの時のように墜落する気か！？」

アキラ「まあ、見ててください！」

ルオードは人間が五月蠅いハエを叩くかのように、右手を降った。

が、コネリー09はルオードの頭上まで急上昇して、ナパーム弾を何発かを落とした。

大爆発を起こし、ルオードは悲鳴のような叫び声をあげる。

アキラ「ざまあみる！」

アキラはそう叫び、直ぐに離れようとした。

しかし、爆発の後に出てくる煙の中から赤い火の玉が飛び出して、コネリー09に被弾した。

ミホ「アキラ！脱出して！！」

言われなくても彼は作業に取りかかっていた。

たかがレバーを引く、ただそれだけで脱出は可能だ……何も異常が無ければの話だが……。

どうやら、異常があったようだ。

何回引いても、脱出が出来ないのだ。

アキラはパニックに陥った。

ここでさっさとツインと変われよ、と思う人がいるだろう。

がアキラはそれすらも忘れるほど焦っていたのだ。

あと、地面まで数百mというところまで来はじめた。

なんかこの展開は前にもあったな、そうアキラは思った時、胸が光り始める。

その光はアキラを包み始め、やがてコクピットから出ていった。

そして、コネリー09は墜落する直前に何かに掴まれる。

その何かはウルトラマンツインだった。

ゆっくりとコネリー09を地上に置くと、ツインはルオードに向き合った。

ファイティングポーズを取るが、後ずさりをつインはしている。

ルオードは足をゆっくりとではあるが前に出していった。

ツインは別のルオードに破れた時のことを思い出す。

もし光線を出したら、また敗北してしまうだろう、かと言ってエネルギーソードは効かない可能性がある、有効な手段は……自分の体を使うことだ。

ツインはアキラの勇敢な行動を思い出した……いや、無茶と書くべきか。

とにかく、勇気を振り絞らなければいけないのだ。

ツインは覚悟を決めた。

ツインが突然飛び立った。

GUTS・2ndは彼が逃げたのでは、と疑うほど速く飛んだのだ。ルオードも驚きはしたが、すぐに彼らを攻撃し始めた。

GUTS・2ndも反撃に出るがルオードはその攻撃による痛みは感じないようだ。

戦いはまだ続く……………

飛び去ったツインはどこに向かったかという地球の外、宇宙だった。

そこから大気圏に突入する際の熱を利用してルオードのところまで一直線に体当たりを仕掛けるのだ。

もちろん、外せば彼は大ダメージを喰らい、ルオードに再び破れてしまう。

だが、これしか彼には思い付かなかった。

ウルトラマンは勝たなければいけない、負けるなんて論外だ。

しかもくどいようだが彼は一度ルオードに負けている。

この戦いに破れることは彼のプライドが許さない。

ツインは再び地球に向かった。

地上ではGUTS・2ndが劣勢になりつつあった。

ルオードはビームが効かない体になっていたためにミサイルで攻撃をしていたが期待できるほどの効果はありやしない。

1号に乗っていたミホはアキラを救助しに行きたかったがそれよりも先に怪獣を倒さなければならぬ、そう思っていた。

しかしこのままでは……。

その時、大空から赤い何か降ってきた。

それはルオードの真上に落ちようとしていた。

気がついたルオードは物体に火球を放つが、勢いは止まることは出来ない。

物体はそのままルオードに直撃して大きな爆発そして、土煙を起した。

煙が収まるとルオードは倒れており、その上にはツインが乗っていた。

ルオードは一瞬何が起きたか分からなかったが、尻尾を使ってツインを弾き飛ばした。

ツインは横に投げ飛ばされたが、ファイティングポーズを取ってルオードと対峙する。

ルオードは立ち上がるがもうフラフラだ。

ツインは試しにダート光弾を撃ってみた。

ルオードは光弾を跳ね返して、ツインは右腕のアームドツインでそれを払った。

今度はルオードのところまで走っていつて右手を突き出してパンチを入れる。

体がボロボロだったためか、簡単にルオードは吹き飛ばされる。

さらにツインは蹴りを入れた。

反撃出来ないまま、やられるルオード。

次にルオードの尻尾をつかみ、ルオードの体を回し始めた。

何回か回したあと、尻尾を放してルオードをとばした。

ざっと700mはとんだだろうか、ルオードは立ち上がらなかった。

ツインはダート光弾をルオードに放つ。

当たったが跳ね返してこなかったから、ツインはセンチラル光線を発射する。

遺体が爆発するのを確認すると、ツインは飛び去っていった。

アキラ「おーーい！」

夕暮れの中、どこか陽気な声が聞こえてくる。

シンジヨウはその姿を見つけ、やって来たアキラに対してこう言った。

シンジヨウ「お前って奴は本当に生き残ることに關してはしぶといな。ミラクルマンと呼ばせてもらっぜ」

アキラ「いえ、運が良いだけです」

ミホはアキラの側まで寄り、耳を引っ張った。

アキラ「イタタタタ！何するんだよ！？」

ミホ「こうでもしないと早く死にたがる症候群が治らないでしょ？」

アキラ「俺はあと70年は生きたいから、そんな症候群じゃないぜ！」

ミホ「本当かどうか分からないところね」

シンジヨウ「よし、カンザキはコネリー09を直してからダイブハンガーに戻ってこい」

アキラ「ええ！？ひどいですよ！隊長！！」

シンジヨウ「確かに一人じゃ大変だな。よし、サクマも手伝ってやれ」

ミホ「何ですか！？」

シンジヨウ「恨むならカンザキを恨め」

ミホはアキラをシンジヨウたちが帰ったら殴ってやろうかと思った。

コネリー09を直し、ダイブハンガーに戻っている最中にアキラはほつぺたをさすりながら、操縦しているミホに話しかける。

アキラ「ミホ・・・、ここで言うのもどうかと思うんだけどさ、いいか？」

ミホ「何、アキラ？」

アキラ「俺の昔のことだよ」

アキラはそう言うと言話を続けた。

アキラ「まあ、14歳の時にさ俺の住んでいた所に怪獣が現れたんだ。俺は父さんと母さんと一緒に逃げただけど間に合わなくて怪獣に踏まれた。あの時、俺も終わりだなんて思った。けどそこにダイナが来て助けてくれたんだ。そのあと、俺はTPCの職員に助けられた。で、孤児院に入ったわけよ」

ミホは戸惑いながら言う。

ミホ「……その、やっぱりごめん。話したくなかったのに言わせちゃって」

アキラ「いや、いいよ。俺もスッキリしたし。それに……」

ミホ「それに？」

アキラ「俺も変わらなきゃなって思ってたさ」

ミホ「どういう意味で？」

アキラ「ただの独り言だから気にしないで」

ツインと自分は似ている、だからアキラはミホに過去の話をすればいつかツインも自分に話しやすくなるだろうと思ったのだ。

もちろん、簡単にいくとは思っていない。

いつでもいいから話してほしいとアキラは思った。

コネリー09は夜空を飛ぶ。

隕石はごみ捨て場に落ちた。

GUTS・2ndは調査に向かうが、そこにいたのは怪獣だった！

次回、ウルトラマンツイン第10話「臭いを辿れ！」

さあ、次回も皆で読もう！！

第9話 古き記憶 - 超古代恐竜 ルオード - (後書き)

まあ、前回と同様に『帰マン』第4話を下敷きに書きました。

前회가体の成長なら、今回は心の成長でしょうか。

感想、リクエストをお待ちしております。

第10話 臭いを辿れ!! - 吸収怪獣 スメラン -

一つの巨大な隕石が地球に向かっていている。

ゆつくりとはあるが、確実に近づいている。

そこへ、ガロワ飛行艇が3機やって来て攻撃を開始した。

その中のパイロットの一人であるアキモト・ルイは隊長機に通信をかける。

ルイ「隊長、効果はありません。スペシウム砲を使ってもよろしいでしょうか？」

隊長「そんなこと、自分で考える！」

ルイ「了解しました！」

ルイはコンピュータを使い、準備をする。

ルイ「エネルギー100%、ターゲットロックオン。スペシウム砲、発射!!」

スペシウム砲から出た青白い光線は隕石に直撃、粉々に爆発した。

ルイ「やった！」

隊長「よし、これより帰還する」

3機は宇宙ステーション『Zx2』へ戻った。

粉々になった隕石の欠片の一つが地球に向かっていているの知らずに…

運転手「なんか今日臭くないか？」

従業員A「ここに来る度変な臭いするんだから、気にするなって」
軽トラックに乗っている3人はゴミが不法に放棄された場所にやって来ていた。

3人の仕事は、ここにあるゴミを出来るだけ撤去すること。

従業員B「まあ、さっさと仕事を終わらせようぜ」

運転手「賛成だ・・・よいしょつと」

ゴミを軽トラックに積んでいく3人。

その時、空から赤く燃えている物体が降ってきた。

ドンと大きな音と共に地上にぶつかる。

作業員たちは近くによると、隕石は発光し始める。

作業員 A「おい、これって俺たちの仕事か？」

運転手「んな訳あるか！TPCの仕事に決まってるんだろ！」

3人は逃げるように車に戻る。

そのあと、隕石は周りにあったゴミを吸収し始めた。

それから1日後、そこにはGUTS・2ndのオオツカ、タグチ、ヨシオカが調査をしに来ていた。

ヨシオカはオオツカのところまで来て、少しイライラしながら言った。

ヨシオカ「副隊長、隕石なんてどこにもありませんよ。あの人たちは嘘を言ったんじゃないんですか？」

オオツカ「それでも俺たちが調べなければな。最も、今回は無駄足だったようだが……。そういえばタグチはどこに行った？」

そこへ噂をすればなんとやら、タグチがやってきた。

タグチ「副隊長、今回の調査は無駄足ではありませんでしたよ。これを見てください」

タグチは右手に掴んでいる物をオオツカに差し出す。

オオツカはそれの第一印象は・・・

オオツカ「これは……ただの石ころか？」

ヨシオカ「タグチさんはあの人たちのデタラメな話を信じるんですか？」

タグチは少し苛立ちながら、話をする。

タグチ「この石ころからは変な電波が流れ出ているんです。それにここを見てください。なんか溶けたあとがあるでしょ？きつと大気圏に突入した時に出来たんですよ。だから、これは隕石です」

ヨシオカ「でも、ここは不法とはいえごみ捨て場ですよ。だからおかしいものがあってもおかしくはないと思うんですが？」

オオツカ「分かった分かった。まあ、今日はこれを戦利品とするか。タグチ、分かっていると思うが……」

タグチ「ええ、この隕石を調べるんですよね？」

オオツカ「その通りだ。それじゃ帰ろう」

また1日がたつて、ダイブハンガー指令室ではタグチが白衣を来ており、色んな道具が入っている箱を持って入ってきた。

タグチ「やっぱりこいつは宇宙から来たんですよ。しかもこいつは生物なんです」

ワタベ「隕石が生き物？タグチ、石が生きているわけないじゃん」

タグチは箱から隕石の破片が入ったガラスケースと釘を取り出しながら言った。

タグチ「まあ、見とけて。この釘を隕石に近づけると……」

言った通りの行動をすると破片は釘をを磁石のように引っ付かせるとそのまま吸収した。

アキラ「すごい。こんな事ってあるんですね」

タグチは破片に釘を与えると、その数に比例して大きくなっていった。

アキラ「へー、なんかヤバイですね」

その時、破片が釘を放ってきた。

釘はそのまま直線に飛んでヨシオカの右肩に当たってしまった。

アキラ「ヨシオカ！」

アキラはガッツハイパーガンを手に持ち、撃つが当たらない。

破片はミホにも釘を放とうとした。

が、一瞬の光と共に破片は消え、跡は黒く焦げていた。

アキラは周囲を確認すると、シンジヨウはガッツハイパーガンを、ワタベがレディスミスを持っていた。

シンジヨウ「ヨシオカ、大丈夫か？」

ヨシオカ「・・・多分大丈夫だと思います」

ワタベ「隊長、今倒したのは私でいいですね？」

シンジヨウ「な、今のは同時に撃つたんだから引き分けだ」

ミホは疑問に思ったことをタグチに向かって言う。

ミホ「あの、隕石が落ちたのって、ごみ捨て場なんですよ。だったら危なくないですか？」

タグチ「その通りだ、サクマ。俺たちの仕事は残りの破片を見つけること。ですよ、隊長？」

シンジヨウ「ああ、分かってる。GUTS・2nd、出動だ！」

アキラ、ミホ、オオツカ、タグチ、ヨシオカ「了解！！」

ヨシオカ「相変わらずここはゴミがたくさんありますね」

ミホ「終わったら、ここのゴミを運ぼうよ」

シンジヨウ「ああ、全くだ」

ごみ捨て場に到着したGUTS・2ndはそこにいた一人の人間と一匹の犬がいたのに気がつく。

アキラ「何ですか？あの人達？」

シンジヨウ「？いや分かんねえな。オオツカ、分かるか？」

タグチが話に割り込む。

タグチ「彼らは俺が呼びました。なんたった人脈の広いタグチ・ヒロキですからね」

アキラ「そんなこと初めて聞いたんですけど」

シンジヨウ「俺も初耳だ」

タグチ「隠していたわけではありませんがね。とにかく彼を呼んだのは、場所が場所なだけに隕石を探すのは大変ですしね。彼が言うには匂いさえあれば人間に分からないものでも犬にも分かるのとこのですので呼びました」

そう言いながら、彼らは青年に近づいていった。

タグチ「よう、テジマ久し振り」

テジマと呼ばれた青年は同じように返事をする。

テジマ「ああ久し振りだな、タグチ。シンジヨウさん初めまして。このワン公はサーチって言います。早速だがタグチ、臭いのもとは持つてるよな？」

タグチ「ああもちろん。実験用とは別にサンプルをとっておいた」

タグチはそう言うと破片の入ったカプセルを取りだし、サーチに嗅がせた。

ヨシオカ「本当に大丈夫なんですか？」

テジマ「こいつの嗅覚をなめてもらっちゃあ困るなあ」

サーチは臭いがどこから来るのかを探すと、突然走り始めた。

デジマ「おっと見付けたようだ」

シンジヨウ「よし、俺とカンザキとタグチとサクマで行くぞ。オオツカ、ヨシオカはここで待機だ。デジマ君、申し訳ないがついてきてほしい」

デジマ「もちろんですよ。さあ、行きましょう」

サーチが止まったのはあれから30分くらいがたつた頃だろうか。

サーチはここ掘れワンワンと言いたげに地面を前足で掘っていた。

デジマ「この下に何かあるようですね。シンジヨウさん、スコップとかありますか？」

シンジヨウ「そんな持っていませんよ。だけどガッツハイパーガンを使えば……」

シンジヨウはアキラたちに目配せをする。

頷く三人はガッツハイパーガンを手を持つ。

テジマはなにをするか分かったのか、サーチを抱き上げた。

シンジヨウ「合図をしたら、集中的に撃てよ！いいな！」

アキラ、ミホ、タグチ「了解！」

そう言うと、地面に向かって三人は撃ってしまった。

シンジヨウ「お前ら・・・命令聞けよ・・・」

地面には穴が開き、五人はその中を覗く。

そこには大きな目のようなものがあり、こちらを向き始めた。

ミホ「えっと、どうしますか？」

シンジヨウ「もちろんオオツカたちの所まで走るしかないだろう」

タグチ「テジマ・・・サーチを持ったまま走れるか？」

テジマ「いつでもどうぞ」

五人は走っていき、それから10秒ぐらいがたつと地面が揺れ始め地割れが起き、怪獣・スメラン・が現れた。

その外見はたくさんゴミが重なりあってまるでどこかの芸術家がつくるようなデザインだった。

シンジヨウたちはガッツハイパーガンを連射するが、スメランの皮膚の代わりになる粗大ゴミが落ちていくだけだった。

スメランはそれを痒いかのように撃たれていく場所を搔いていく。

そうこうしている内に戦闘機の所に到着したシンジヨウたちはすぐにアキラたちに命令をする。

シンジヨウ「オオツカ、ヨシオカは俺と一緒に2号に、サクマは1号、カンザキはコネリー09に乗れ。タグチはデジマ君を連れてこの場から離れる。GUTS・2nd、攻撃開始だ！」

アキラ、ミホ、オオツカ、タグチ、ヨシオカ「了解！！」

スメランはただ当てもなく歩いていると、後方からGUTS・2ndの戦闘機による攻撃が当たった。

スメランは後ろに振り返り、口から粗大ごみを吐き出した。

その勢いはとても強く、そして速かったがアキラたちはなんとか避けることに成功した。

さらに攻撃を加え、旋回するコネリー09。

1号もそれに続いてビーム撃ちまくる。

火花を出してスメランは倒れる。

が、スメランはゴミを吸収してそれまで受けたダメージを回復した。

そのまま立ち上がりもう一度粗大ごみを出す。

その一発にコネリー09は当たってしまった。

アキラ「うわ！？コントロール不能だ！地上攻撃に切り替えます！」

シンジヨウ「分かった！無茶はするなよ！」

土煙を撒き散らしながら地面に墜落したコネリー09。

アキラはすぐにコクピットから飛び出し、機内に積まれていたバズーカを使ってスメランを狙撃した。

とはいうもののやはりゴミが落ちるだけで、効果はあまり無さそう
だ。

アキラはこれ以上やっても意味がないと感じて内ポケットからライ
ト・カートリッジを取り出す。

アキラ「行くぜ、ツイン！」

スメランの目の前に目映い光が現れ、それが消えるとウルトラマンツインが立っていた。

ツインはノーモーションでセンチラル光線を放った。

威力は弱いものの直撃し、当たった場所は爆発する。

爆発した場所には穴が開いており、隕石のような物体が見えた。

あれが本体なのだろうか？

ツインはスメランの近くまで走り、回し蹴りをしてスメランを倒す。

スメランの右手を掴むと右腕のアームドツインからエネルギーソードを出して右肩を切断した。

切られた右腕はもともとはゴミの塊であつたために原型を留めることが出来なくなり、崩れ去った。

さらにツインはスメランの顔を殴り、左腕を掴んで背負い投げをする。

痛みによりスメランは体をねじ曲げると追い討ちをかけるように2号のスペシウム砲に当たった。

ツインはそれを見届ける。

やがて爆発を起こし、それによる煙が現れ消えたかと思うと、隕石が姿を全部見せた。

ツインは隕石を持ち上げ飛び立った。

そして、ツインが見えなくなったと思ったら、空が白く輝いた。

1号と2号を地上に降ろし、ミホはコネリー09のところに行くとすでにアキラは故障した部分を直していた。

アキラ「前の時のように殴られるのはごめんだからね。先に直しているんだ」

ミホ「ふうん、隊長が呼んでたわよ」

アキラ「分かった、もうちょっと待ってて」

アキラ「隊長、何ですか？」

二人はシンジヨウのところまで来た。

シンジヨウ「よし、コネリー09にここにあるゴミを運べる限り積むんだ」

オオツカ「念のため言っておくが、俺たちも運ぶからな。これも地球のためだ」

アキラ「ああ、分かりました」

そう言つて、準備をしてくるとアキラはコネリー09のところに行った。

その道中でアキラはあの隕石のことを考える。

隕石はどうして地球に落ちたのだろうか？

ただの偶然かもしれないが、アキラはどこか引っ掛かる。

空を見上げると、青空が広がっていた。

雲一つも無い空に、逆にアキラは不安を感じた。

懲りずに登場、ミジー星人!!

彼らの今度の新兵器はガラオンではなく、なんとあのゼット・・・
ンなのか？

次回、ウルトラマンツイン第11話「ゼットソ、襲撃」

さあ、次回も皆で読もう!!

第10話 臭いを辿れ!! - 吸収怪獣 スメラシ - (後書き)

コネリー09はアキラがよく乗る戦闘機にしようかなと思っており
ます。

次回は色んな元ネタがある回になりそうです。

感想、リクエスト(ティガとダイナに出てきた飛行機、設定、人物
など)をお待ちしております

ある幸せそうな家庭、まだ9歳であろう子どもが父親に話しかける。

子ども「パパ。ウルトラマン、見ていい?」

父親「ああ、いいとも」

ありがとうと言って、リモコンを手に持ちテレビを着ける。

テレビの画面には『ウルトラQ』と書かれた文字を突き破り、『ウルトラマン 空想特撮シリーズ』と題名が出てきた。

そして、『さらば、ウルトラマン』という文字と共に主題歌が流れる。

ある寂れたマンション。

そこには3人の宇宙人、ミジー星人がいた。

3人のそれぞれの名はドルチェンコ ウドチェンコ カマチェンコ。

ここでミジー星人について少し説明しよう。

彼らは2017年に地球にやってきた。

その目的はもちろん、地球侵略。

が、彼らの作戦は3回中3回も失敗して挙げ句の果てには故郷に見捨てられ、地球全体に宇宙人であることがバレってしまった。

そのためにもう使われなくなってしまった建物を転々としながら生活が続けていたのである。

最後の侵略が失敗してもう7年がたつ。

しかし、彼らは諦めていなかった。

この7年間は自動販売機の下に落ちていた10円玉を何枚も集めていたのだ。

そして今はもう一生10円玉には困らないであろう数に倍増している。

そんな彼らはウルトラマン最終回を見ていた。

画面でウルトラマンはスペシウム光線を撃つがゼットンはその両手で吸収して、ウルトラマンに向かって強力な光線を放った。

突然のことだったのでウルトラマンはなす術もなく光線に当たってしまう。

さらにゼットンは光線を撃ち、ウルトラマンは力尽き、うつ伏せに倒れた。

その後、何故か仰向けになったウルトラマンは走馬灯のように数々の戦いが流れていく。

その時、ドルチェンコが叫んだ。

ドルチェンコ「これだ！このアイディアを頂こう！」

カマチェンコ「あら、侵略作戦でも思い付いたの？」

ウドチェンコ「アイディアってガラオンにエネルギーを吸収した後、に倍增させてビームを撃たせるっていうやつ？」

ドルチェンコ「もう、ガラオンは死んだ！とにかく材料はたくさんあるから明日ぐらいには出来るだろう。まあ、期待している」

そう言ってドルチェンコは自分の部屋に向かった。

カマチェンコとウドチェンコは顔を見合わせる。

レストランの前に止まっているシャーロックを先日ウルトラマンを見ていた子どもが携帯で写真を撮っていた。

そこに昼食を済ませたアキラとミホが中から出てきた。

二人を見て子どもは驚き、その場から早く逃げようと走るが、アキラは彼を引き止めた。

アキラ「君、別に写真を撮ってはいけないとは言わないけどちゃんと俺たちから許可をもらわないといけないよ」

子ども「ごめんなさい・・・二人の写真撮ってもいいですか？」

アキラ「ああもちろん、なあミホ？」

ミホ「あゝあ、こんなことだたら化粧もうちよつとやれば良かったな。でもいいわよ」

二人はシャーロックの前に立ち、子どもの合図を待った。

子ども「それじゃあいきまゝす。はいチーズ」

写真を撮る音が聞こえ、子どもは二人に携帯の画面を見せる。

アキラ「写真撮ってくれてありがとうね・・・あ、そうだ！ちょっと待っててね」

アキラはシャーロックの中に入り、鞆からGUTSのマークのバッチを取り出し子どもに渡した。

アキラ「これは写真を撮ってくれたお礼。君もこれでGUTS・2ndの隊員だ。・・・そういえば君の名前は？俺はカンザキ・アキラ」

ミホ「あたしはサクマ・ミホよ」

子ども「僕の名前はコウタ！」

アキラ「よし、コウタ君。遊びも勉強もしっかりやるんだぞ」

コウタ「うん！じゃあね」

そう言ってコウタは走っていった。

その後、アキラは運転席に、ミホは助手席に座りシャーロックを発売させた。

ドルチェンコ「出来たぞ！これが新兵器、宇宙恐竜型メカニックモンスター ゼットンだ！！」

ウドチェンコとカマチェンコは期待した目でドルチェンコの指が指した方を見るが、そこにはぼちガラオン並みの大きさしかなく、形も不格好だったゼットンがいた。

頭に付いている角は大きすぎ、またテレビに出てきたゼットンはスマートだったのに対してこのゼットンは横に大きい。

カマチェンコ「これは・・・ゼットンと言うより？ゼットソ？って言うんじゃないの？」

ウドチェンコ「うん……」

ドルチェンコ「作戦はこれから始まるのだあ！！まずTPCのオメガファイルにハッキングする！この程度ミジー星人の技術では朝飯前だ！」

何故か得意そうな話すドルチェンコ。

ちなみに現在の時刻は早朝の5時、確かに朝飯前ではある。

果たしてハッキングは朝飯前までに成功するのか？

カマチェンコとウドチェンコは朝ごはんを作ることにした。

ダイブハンガー指令室、そこに通信がかかってくる。

？「ダイブハンガー指令室、聞こえますか？」

ワタベ「はい、聞こえます。そちらはどここの所属ですか？」

？「TPC情報局のヤズミ・ジュンです」

ヤズミ・ジュンは第一期GUTSのメンバーで、コンピューター等のエキスパートである。

シンジョウ「お、ヤズミ。久しぶりだな。最近家に帰ってるか？マユミにもし何かしたら……」

ヤズミ「シンジョウさん、分かってますよ。今日、こちらにかけてきた理由は……」

ヤズミの話を要約すると、まず情報局に保管されているオメガファイルに何者かがハッキングしてきた。

それをヤズミは止めようとしたが、結局データは盗まれてしまった。が相手の居場所を特定できたのでGUTS・2ndに行つてほしいと要請をしにきたのだ。

ヨシオカ「で、何のデータを盗まれたんですか？」

ヤズミ「ああ、カラス人間、レイビーク星人のデータだね」

シンジヨウ「レイビーク星人だと!？」

シンジヨウの突然の叫びにアキラたちは驚き、ヤズミは苦笑した。

ヤズミ「そういえば、シンジヨウさんはトラウマがありましたね」

シンジヨウ「お前、絶対に言つなよ…」

ヤズミ「僕は言いませんよ」

そう言つてヤズミは通信を切った。

アキラは少しふざけながら言つた。

アキラ「トラウマって何ですか？隊長？」

シンジヨウ「俺は絶対に言わん!!」

その時、ミホが質問をした。

ミホ「あの、オメガファイルって何ですか？」

シンジヨウはどこか得意そうに話し始めた。

シンジヨウ「オメガファイルって言うのは、今までの怪獣や宇宙人のデータが詰まったファイルってことだな。その他にTPCの歴史みたいのが入っている。あとは……俺が考えるに、最重要機密も入っているんじゃないか？」

話が長引きそうなので、タグチが口を開いた。

タグチ「えーと、行きませんか？犯人のいるところに？」

らくだ便と書かれた軽トラックが3人の男性を乗せて道路を走っていた。

運転手は右に曲がるため、周囲を確認するとどこかで見たことのある三人組を見つけた。

気になった運転手は助手席に座っている男性に話しかけた。

その男性は穴つき手袋をしている。

？「南さん、今さ俺ミジー星人見た気がするんだけど……」

南と呼ばれた男はこう答えた。

南「清水さん、ミジー星人が現れたってことはきっとゴルゴムの作業だな」

清水と呼ばれた運転手は困惑しながら言う。

清水「南さん、ゴルゴムって何さ？」

すると後ろに乗っている男も話し合いに参加した。

？「それではディケイドのせいだな！奴のせいでミジー星人が復活して世界が崩壊してしまう！おのれディケイドお！！」

清水「・・・なんか鳴滝さんってそんなキャラだったけ？」

後でTPCに連絡をしようと清水は思った。

ワタベはいつも通り留守番でGUTS・2ndはミジー星人がアジトとして使っていた建物に来ていた。

彼らは中を探したが誰かが何ヵ月か生活していた形跡は見つけたが、それ以外は……である。

アキラはイライラして、近くにあった壁を蹴った。

アキラ「くそ！何で見つからないんだよ！」

シンジヨウ「まあ、そう怒ってもいいことなんかないさ」

そこへ、ヨシオカとミホが走ってきた。

ヨシオカ「隊長！こんなものが見つかりました！」

ヨシオカが持っていたA4の紙をシンジヨウに渡す。

そこには『引つ越しました』と書かれていた。

シンジヨウ「あの野郎！」

ミホ「隊長、怒ってもいいことなんかありませんよ？」

アキラ「ミホ、他には無いのかよ？」

ミホ「無かったわね。隊長、多分これ以上探しても時間の無駄じゃないですか？」

と、ミホはシンジヨウに聞く。

シンジヨウ「ああ、一旦ダイブハンガーに戻る」

その時、PDIが電子音を鳴らした。

シンジヨウ「こちらシンジヨウ。何があった？」

通信をかけてきたのはワタベだった。

ワタベ「隊長、一般市民からミジー星人を見つけたとの報告がありました」

シンジヨウ「分かった、場所は？」

ワタベ「R2ポイントです」

一方、ミジー星人たちは奪ったデータを基に物体を巨大化させるレーザー銃を開発していた。

レイビーク星人の技術はレーザー銃を使って人を小さくさせることが出来る。

その技術をドルチェンコは応用してゼットンを大きくさせようと言うのだ。

そして、ドルチェンコの大きな一言が響いた。

ドルチェンコ「出来た!!! さあゼットンよ、大きくなってこの星を我らの手へと導くのだあ!!!」

レーザー銃から出た光線に当たり、小さなゼットンのみるみる大きくなっていった。

その大きさは50mだろうか？

ドルチェンコはポケットからボタンを取りだし、

ポチッ

と押した。

ゼットンの黄色い部分が光だし、ピポポポと不気味な音を出し始める。

カマチェンコ「行つて、ゼット？ソ？！」

ウドチェンコ「ゼット？ソ？、ウルトラマンやTPCをやっつけろ」

その時

？>誰だ！俺様をゼット？ソ？って呼ぶのは！<

何者かが訴えた。

突然の事態にカマチェンコとウドチェンコは困惑する。

ウドチェンコ「え？何今の？」

カマチェンコ「あたしは言っただんかいないわよ」

ドルチェンコは待っていましたと言わんばかりに説明し始めた。

ドルチェンコ「今まで失敗してきたのは、全部私達が操縦してきたからな。だから自動で動くようにしたのだ。ついでに喋れるようにもな」

ゼットン は彼らに向かってこう言い放った。

ゼットン「もう一度、俺様の名前を言ってみろ！<

カマチェンコ「だから、ゼット？ソ？なんでしょ」

ウドチェンコ「そうそう」

ゼットン は怒ったように彼らを攻撃し始めた。

ゼットン「俺様はゼットンだああああああああああああああああああああああああ！<

ミジー星人は叫び声をあげながら逃げていった。

ドルチェンコ「どうしていつもこうなるのだー！！」

GUTS・2ndはミジー星人が目撃された場所に着いたとき、ゼ

ットンは暴れていた。

ゼットンには正に本能に従ったの行動をしただろう。

シンジヨウ「空想の怪獣が現実に暴れているとはな」

タグチ「隊長、どうしますか？」

シンジヨウ「俺に良い考えがある。全員散らばって攻撃だ！」

アキラ、ミホ、オオツカ、タグチ、ヨシオカは頷き、シンジヨウはオオツカと一緒にデ・ラ・ムへ、に乗った。

ヨシオカとタグチはガッツハイパーガンを走りながら撃ちまくるが、効果は予想通り無かった。

アキラとミホは逃げ惑う住民を誘導している。

とにかく安全な場所へ行ってもらう、それから二人は攻撃を始めるつもりだ。

そしてその場に静寂が訪れる……遠くから爆音が聞こえる以外は。

ゼットンは火球を何発も出してデ・ラ・ムを破壊しようとしている。

が、デ・ラ・ムは右へ左へと走って撃つレーザーをゼットンに全て当てた。

効果はあったようで、ゼットンは少し後ずさりをした。

隣町ではコウタ少年がパチンコを持って友達と遊んでいたが、突然遠いがゼットンが現れたのでビックリした。

そして家に帰ると水筒やらお菓子やらをリュックサックに積めると母親にこう言った。

コウタ「お母さんお母さん！怪獣が現れたんだ！」

しかし母親は、

母親「まあ、怪獣なんて嘘でしょ」

とあまり信じてはいないようだ。

コウタ「嘘じゃないよ！本物の怪獣だよ！！」

そう叫ぶと、家のドアを開け走っていった。

ゼットンにガッツハイパーガンの攻撃は無意味の様だ。

が、無意味だと分かっているでも諦めてはいけない。

アキラとミホは『ZERO』の訓練生時代にそう習った。

アキラは弾切れを起こしたガッツハイパーガンを装填するがその途中で小さな人影に気づく。

もちろんその人影とはコウタ少年だ。

アキラ「あの子、どうしてここに！」

ミホ「え？」

火球が二人の近くの家を破壊した。

二人はそれによる爆風に耐えると、アキラはコウタ少年のところへ走っていった。

ミホもアキラに続いて走る。

アキラ「コウタ君、危ないだろう！」

コウタ「僕もGUTSの一員なんだ！だからイッパンシミンの避難を手伝いに来たんだ！」

ミホ「アキラ・・・あんたの責任よ」

アキラ「分かっている。……ミホ、コウタ君を頼む！」

アキラはゼットンの近くへと走っていった。

ミホ「ああ、ちよつとー!!……あのバカ!!」

ミホは悪態をつきながらもコウタ少年の右手を掴んでその場から離れていった。

タグチとヨシオカは攻撃をしていた。

が、ゼットンが突然喋り始めたので驚き、攻撃を止めた。

ゼットン「ほう、ウルトラマンか……。さっさと変身して俺様を倒してみろく

タグチ「ウルトラマンだって!!……ヨシオカ、お前か?」

ヨシオカ「そんな……僕じゃないですよ!」

しかし二人は後ろにアキラがいたことに気づかなかった。

アキラ（どうしてあいつは俺がツインと融合しているのを知っているんだ?……よし）

アキラは内ポケットからライト・カトリッジを取り出して上に掲

げる・・・と、そこまではやったが点火はさせずにまた内ポケットに左手を突っ込むと葉書を取り出した。

アキラ「突然ではありませんが、作者の親友から手紙が届いております。『アキラはよく？行くぜ、ツイン！？と叫びながら変身するけど、あれって仮面ライダーダブルの翔太郎のセリフをパクったの？』。答えは意識は全然してません。……さあ、今日も張り切って・・・行くぜ、ツイン！！」

今度こそアキラはライト・カートリッジを点火させる。

ウルトラマンツインは眩い光と共に大地に立ち上がった。

ゼットン「来たな、ウルトラマン。お前はこのゼットン様が倒しグハア！<

ツインはいきなりダート光弾を撃ち込み、喋っていることに夢中になったゼットンを吹き飛ばした。

ゼットン「貴様、卑怯だぞ！騎士の誠心といアベシッ！<

今度は両腕を胸の前で重ねエネルギーを溜めた後、素早く両腕を真横に伸ばしエネルギーを三日月状に放つ『ビームスライサー』を撃ち込んだ。

ゼットン>おのれ！それでも食らえ！！<

そう言うときゼットンは火球を放つ。

ツインは両腕を前に突きだし光のバリヤで身を守る。

そのままバリヤを球状にしてリバー光球を投げた。

だがいつまでも技を喰らっているばかりのゼットンはゼットンではない。

体の回りを覆い尽くす『ゼットンシャッター』でリバー光球から身を守る。

ツインは素早くジャンプして右手で急降下チョップをしようとした。

ゼットンは体をテレポートさせたためチョップを受けなかった。

ツインは地面に倒れ込むがすぐに立ち上がるが、火球を一発当たってしまった。

なんとか耐えるが、ゼットンは蹴りをいれた。

ツインは蹴りを喰らったものの、パンチでゼットンを倒そうとする。

そのパンチを右手で封じ込め、ゼットンはツインを持ち上げ、正面に投げた。

ツインは吹き飛ばされ、民家の上に落ちた。

民家は粉々に潰れてしまい、ツインは両腕を胸の前でX字に交差させゼットンの火球を防ぐ。

ツインは激しい攻撃を止むのを待つのみ。

その時、ツインのカラータイマーが赤く点滅して、音を出し始めた。ウルトラマンツインは地球上では3分間しか戦えない。

カラータイマーの光が消えるとき、ツインは死んでしまうのだ。

ツインよ、負けるな！

地上からデ・ラ・ムがゼットンにビームを当てる。

当たったゼットンは怯み、ツインは両腕を真横に伸ばしてセンチラル光線を発射させようとするが・・・

コウタ「駄目だよ！！ツイン、光線を撃ったらゼットンに跳ね返られちゃうよ！！」

ツインはコウタ少年の叫び声を聞いて、十字に組もうとしていた腕を止めた。

コウタ少年はまだ叫ぶ。

コウタ「指を壊すんだ！そしたらエネルギーを吸収しないと思うよ！！」

ツインは案を聞いて秘策を思い付く。

だがこれは陽動が必要だ。

ツインはテレパシーでシンジヨウに話しかけた。

ツイン>シンジヨウさん、聞こえますか？<

シンジヨウ「誰だ、その声は？」

ツイン>シンジヨウさん、俺はツインです。早速ですが頼みがあります<

シンジヨウ「頼みってなんだ？」

ツイン>あの怪獣を倒すために協力をしてほしいんです<

ツインはシンジヨウに作戦を話した。

シンジヨウ「・・・分かった。やってみよう」

ツイン>申し訳ありません。こんな危険な作戦引き受けてもらって<

シンジヨウ「いや、いいんだ。俺はあの怪獣を倒せるんだっただんなことでもやるぜ」

オオツカ「隊長、何一人で呟いてるんですか？」

オオツカはシンジヨウに聞く。

シンジヨウ「オオツカ、お前は降りろ」

オオツカ「はい!？」

シンジヨウ「いいか、これは命令だ」

オオツカ「……はい、分かりました」

オオツカはデ・ラ・ムから降りてシンジヨウは発車させた。

デ・ラ・ムはビームを撃ってゼットンをこちらを追いかけてくる。

火球を出す先ほどのように全て避けられてしまう。

その時、ツインはゼットンを羽交い締めになるとエネルギーソードを出してゼットンの両腕を体から離れた。

ゼットン「ぎゃあああああああああああああああああああ
!!<

ゼットンは肩から火花を大量に散らし倒れていった。

ちなみにミホとコウタ少年のリアクションはというと・・・

ミホ「これでいいのよね・・・?腕ごと切っちゃったけど」
コウタ「・・・うん」

ツインはゼットンを持ち上げ、こう叫んだ。

ツインハリケーン！！

ツインはゼットンを空高く投げセンチラル光線を発射。

ゼットンは大爆発を起こした。

ツインは空高く飛び立った。

数日後、ダイブハンガー指令室にてアキラたちは昼食を食べていたが、オオツカの叫び声が響いていた（シンジヨウは恒例だが会議に出ている）。

オオツカ「誰だ！俺のエビチャーハンを食べた奴は！！」

タグチ「そんなの知りませんよ」

ワタベ「そうそう、私たちは自分のご飯を今食べているんだから」

アキラ「副隊長、そのエビチャーハン大事なんですか？」

オオツカ「あれはな、俺の妻が手間をかけて作ってくれた最高の逸

品なんだよ！それなのにな！」

？「ゴメンなさい、僕が食べちゃった」

机の下から声が聞こえてきた。

ミホは机の下を覗くと、コウタ少年がそこにいた。

ミホ「な、何でここにいるの！？・・・アキラ？」

アキラ「俺じゃないよ！」

コウタ少年は答える。

コウタ「だってお父さんがTPCに働いているんだもん。だからここにきたんだ」

そう言ってヨシオカに尋ねる。

コウタ「ねえねえ、ここテレビ見れる？リモコンどこ？」

ヨシオカ「え、そこだけど？」

コウタ「ありがとう」

リモコンでテレビを着ける。

その画面には新番組『ウルトラマンネクサス』が始まっていた。

オープニング曲が流れ始めるなか、オオツカは絶叫する。

オオツカ「俺のエビチャーハンがアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

青き星、地球はいつまで宇宙人に狙われなければいけないのか？
アキラは宇宙人に問いかけられる・・・

「お前はウルトラマンに恐怖を抱かないのか？」
アキラの答えとは？

次回ウルトラマンツイン第12話「第3惑星の激闘（前編）」
さあ、次回も皆で読もう！

一応、今回のゼットンは二代目です。

元ネタ、いちいち言っていくの面倒なので（その割りにはあんまりなかったよな）書きません。

分からないネタがあつたら感想に書いてください。

感想、リクエスト等をお待ちしております。

さらに後書き（2011年7月26日）

次回予告なんです、少し内容を変えましたが前後編になっただけ。

理由は一応12話で1クールが終わって云々みたいに思っていたのですが、よくよく考えれば1クールって13話だよなと思って思ったので

もつと後書き（2011年7月29日）

歌詞が書かれた文章は消しました。

番外編 part 6 (前書き)

久々の番外編ですが・・・本編でなくてすいませんm――m

番外編 part 6

今年で二十歳になり、基本的にお酒を飲めるようになった僕、ヨシオカ・ケンジは困っています。

何で困っているか、それは酔っ払っている人への対応です。

怪獣を倒したからお酒を飲みに行くというのは分かるけど、どうして人は酔うと他の人にお酒を飲ませたがるのか分からないんです。

だからシンジヨウ隊長やタグチ先輩の行動が理解できない。

でもいつも勧めてくる時にカンザキ先輩やオオツカ副隊長が僕の代わりに飲んでくれる。

本当にこの二人には感謝しています。

あ、因みにワタベ先輩とサクマ先輩は二人で静かにノーアルコールのビールを飲んでいます（一回、サクマ先輩が日本酒を飲んだことがあるんですがその時のカンザキ先輩がすごくかわいそうでした）。

でも今日は・・・

ある居酒屋では、ヨシオカは自分の周りの状況に困惑していた。

まず、シンジヨウとタグチはいつものように酒を勧めてきているが、オオツカは自分の息子が誕生日という理由で帰宅し、ワタベは今日は合コンらしくいなくて、アキラはヨシオカを一人で庇い続けてきたためか完全に酔ってミホにまるで5歳の子供のように甘えている。

タグチはヨシオカに詰め寄る。

タグチ「ヨシオカ！おまえはもうはたちなんだからのめるってよ」

タグチのろれつは既にまわっていない。

シンジヨウ「まあ一回騙されたと思って飲んでみたらどうた？食わず嫌いは駄目だぜ？」

シンジヨウは顔は赤くなっているが、タグチと比べればまだ酒には強いだろう。

ミホ「隊長、それを言うなら飲まず嫌いじゃ……アキラ！」

ミホはシンジヨウに突っ込みを入れた時に、アキラが彼女の膝に（一応、皆は正座をしている）頭をのせた。

いわゆる、『膝枕』の状態である。

アキラ「ふえ〜？べつにいだろ〜」

ヨシオカはその光景を見て、やっぱり二人は付き合っているのか、
と思った。

が、自分の状況を見るとそんなことを考える場合ではない。

シンジヨウとタグチは執拗に迫ってくる。

いつもの頼みであるアキラは・・・である。

ヨシオカは悩む。

とことん悩む。

とにかく悩む。

これでもかというくらい悩む。

そしてな（ry

だが、ヨシオカは男である。

ヨシオカ「それじゃあ、一杯だけ貰います」

タグチ「おお、ヨシオカ、おまえもおとなだぜ！」

シンジヨウ「よし、・・・ほらよ」

シンジヨウに酒をヨシオカのコップに今にも溢れ出しそうなくらい
につぎ、ヨシオカに渡した。

ヨシオカは少し躊躇ったがコップを口につけた。

僕が目を覚ました時、頭が凄く痛かった。

多分これが二日酔いというやつだろう。

僕は昨夜のことは全然覚えていない。

僕ってそんなに酒が弱かったのか………と思いながら指令室に向かった。

僕は「おはようございます」って言って部屋に入る。

すると、タグチ先輩は怯えた感じの目でこっちを見てきた。

僕って何かしたのだろうか？

すると、カンザキ先輩とサクマ先輩と一緒にやって来た。

カンザキ先輩は頭を抱えていて、サクマ先輩は顔を赤くしていた。

ワタベ先輩が二人にどうだったと聞いたらなんかカンザキ先輩も顔を赤くした。

何があつたんだ、昨晚は？

なんて考えていると怪獣出現のアラームの無機質な音が鳴った。

隊長は出勤の準備だと叫んで僕たちを駆り立てる。

今日も終わったら飲みに行くのかな、そう考えながら格納庫に走って向かった。

番外編 part 6 (後書き)

今回の話は僕の父親が最近ノールコールを好むようになったところから思い付きました。

やっぱり仕事が終わったら飲みに行きますよねw

GUTS・2ndは怪獣・サソームと戦っていた。

サソームの名前の由来は蠍で、その名の通り蠍のような奴だった。

ミホの乗る1号はサソームの尻尾をビームで攻撃する。

サソームは悲鳴をあげ、大きなハサミの手で1号を掴もうとした。

が、アキラの乗るコネリー09がミサイルでハサミの動きを止める。

ミホ「サンキュー、アキラ」

アキラ「どういたしまして！」

今度はサソームが尻尾からミサイルのような物が飛び出てきた

1号と09がそれを軽々て避け、ビームを連発した。

一方、シンジヨウ、オオツカ、タグチ、ヨシオカが乗る2号がサソームの前に突然現れ、スペシウム砲を発射した。

サソームは口から赤い熱線を出して対抗するが、押し戻され光線は口の中に入り、木端微塵に爆発した。

ヨシオカ「やった!!」

その時、地面からサソームの尻尾と同じような物が突き出て上空を飛んでいた1号を絡み取った。

そのまま、サソームが再び現れる。

シンジヨウ「もう一匹いたのか!」

タグチ「多分、奴らの作戦なんだ。最初の奴は罠で俺たちの中から誰かを人質にするためもう一匹が潜伏していたんでしょ」

サソームは1号を掴んだ右手を楽しそうに振っていた。

アキラ「ミホ! 待ってるよ!」

09はサソームに近づいていく。

だが、ビームを当てようとしてもミホの1号に当たってしまう可能性があるため、撃つことが出来ない。

2号は後ろに回り込むが尻尾で叩き落とそうとしてくるため、なかなか近づけない。

その時、ミホから通信がくる。

ミホ「アキラ! 逃げて!」

尻尾の先端部から針が飛び出し、09の左翼に当たってしまった。

アキラ「ちくしょう、またかよ！」

アキラはライト・カートリッジを持ったまま脱出した。

09は地面に激突し、炎上してしまった。

アキラはそれを見届けながら、ツインに変身をしようとした。

?>駄目だ！変身してはいけない！！<

突然、アキラの脳内に声が響く。

アキラは戸惑うも、ライト・カートリッジを頭上高く掲げた。

アキラ「行くぜ、ツイン！」

ライト・カートリッジは輝きだし、その光は大きくなっていく。

そして、光はツインの体を形成していった。

ツインはいつものファイティング・ポーズを取ってサソームと向かい合う。

ツインは右手のアームドツインから光の縄のような物、『エネルギーロープ』を出し、サソームの右手に絡ませる。

そのまま、左手からダート光弾を出してサソームの右手に当てさせ1号を放させた後、空中へ投げ飛ばされた1号を『ウルトラ念力』でゆっくりとサソームから離れた場所に着地させた。

サソームは口から熱線、尻尾の先端部から針を連発させた。

ツインはバリアを作って全ての攻撃をバリアに吸収させながら身を守る。

サソームの攻撃が止んだときツインはバリアを丸め、リバーズ光球を投げた。

光球は直撃してサソームは後方に吹き飛ばされる。

サソームは地面に激突した後、痙攣しながらも徐々に動かなくなつた。

ツインはそれを見届けた後、両腕を下の方にX字に交差し、消えていった。

どこかの暗い空間。

そこにはツインとサソームが戦っている映像が流れている。

光が大きな光が小さくなっていき、アキラがその中から出てきた。

その場にいた人間の形をしているが、人間ではないものが呟いた。

？「見つけたぞ、ウルトラマン・・・」

彼はどこか笑っていた。

2日後、アキラはシャーロックに乗ってパトロールに出ていた。

その時、シャーロックの通信機が電子音を鳴らした。

アキラは車を一旦道路の端に止め、通信機のボタンを押す。

アキラ「はい。こちら、カンザキです」

ミホ「はい。サクマです」

ミホは陽気な感じで話しかけてきた。

アキラ「ミホ？どうかしたの？」

ミホ「隊長がk-6地区に今近いなら、すぐに向かえ、だってさ」

アキラ「は？何でさ？」

ミホ「変なエネルギー波が出てるから、その調査だって」

アキラ「それって・・・助っ人いる？」

ミホ「後で、あたしたちも来るから大丈夫」

アキラは頭を少し抱えたが、

アキラ「ふーん、分かった。・・・あ、ミホ」

ミホ「何、アキラ？」

アキラ「今度の休暇、俺ら被るじゃん。よかったら映画に見に行かない？」

ミホ「映画？どんな感じの？」

アキラ「地球の自然のドキュメントってやつ。どうよ？」

うーんとミホは唸ってこつ言つ。

ミホ「まあ、たまにはそうゆつのも悪くはないね」

アキラ「よっしゃー！じゃ、またあとで」

ミホ「うん」

通信を切り、アキラは車を出発させた。

目的地に着いたアキラは皆を待とうと思ったが、やることがなかった。車で外に出ることにした。

が、ここは森林であるため、出来ると言ってもちよつとの散歩くらいだろう。

アキラは深呼吸をした。

やはり森の臭いは都会と全く違う、そう思って歩こうかと行動に移り始めた。

歩いていく内にアキラは違和感を感じた。

それは表現しがたい違和感で、強いて書くならその場の空間が違うだろうか。

アキラは本能に従い、ガッツハイパーガンを取り出し、一歩ずつ足を出す。

ゆっくりと、ゆっくりと。

その時、彼の目の前に突然ヒトが現れた。

ヒトは人間のように人間ではなかった。

まず肌は黒く、目は黄色、口はない、そして体の所々に銀色の斑点がある。

アキラは銃をかまえ、こう言い放った。

アキラ「お前は誰だ！宇宙人か！」

ヒトは口が無いのに喋りはじめた。

ヒト「なるほど、この星の者は乱暴的だというのがまさか君までが乱暴だとは思わなかったよ。いや、そういう性格でなければ地球は守れないか」

アキラ「もう一度言う。お前は誰なんだ！答えろ！」

ヒト「おっと失礼。私はパークル星人のシーバだ」

アキラ「パークル……星人……なんでこの星に来たんだ！目的は侵

略か！」

フツとシーバは笑い、こう答える。

シーバ「侵略だと？笑わせないでくれたまえ。私は君に警告をしに来たのだ」

アキラ「警告だと？」

アキラはガッツハイパーガンを下ろした。

アキラ「信用しているわけじゃないけど、話は聞こうか」

シーバ「この星は私の同族が侵略をするために来ている。彼が邪魔なのは君だ、ウルトラマン。君さえいなければ地球は侵略出来たも同然だと思っている。そして、先の戦いで私が警告したにも関わらず本来の姿に戻ったことにより、もう彼には正体がバレているだろう。あの戦いは彼が引き起こしたのだ。あの怪獣は、サソームを放ったのも彼だ」

アキラは話の多さに困惑しつつも反論したいことを言った。

アキラ「一応言っとくけどさ、俺はウルトラマンツインじゃない。確かにツインとは融合をしているけど俺は人間のカンザキ・アキラだ」

シーバは驚いたがすぐにこう言う。

シーバ「そうか、それは失礼だったな。とにかく、君は今から逃げなければいけない」

アキラ「逃げるって・・・俺たちを狙ってんだろ？だったら、待っていればそいつと戦って倒せばいいんじゃないか？」

シーバ「いや、ゴールはそこまで甘くはない。今の君たちでも彼に勝てるのは4分の1と言ったところか？」

アキラ「ゴール？ゴールって誰だ？」

その時、アキラの近くの木が突然、発火した。

アキラはガッツハイパーガンでシーバに向けるが、

シーバ「違う！私ではない！・・・出てこい、ゴール！！近くにいるんだろっ！」

すると二人の近くの空間が歪み、もう一人パークル星人が現れた。

シーバとの違いは銀色の斑点ではなく、金色の斑点が目立っていたところだ。

シーバ「ゴール・・・私と一緒に帰るんだ。侵略など無意味だ」

ゴールと呼ばれたパークル星人はフツと笑い、こう言った。

ゴール「シーバよ、貴様も落ちたな・・・ハッ！」

ゴールはいきなり右手を前に出すと、突然シーバが吹き飛んだ。

そしてゴールはアキラに話しかける。

ゴール「とうとう見つけたぞ、ウルトラマンツイン！」

アキラはガッツハイパーガンを構えたまま、ゴールに対しこう叫んだ。

アキラ「こいつにも言ったがなもう一度言っ！俺はカンザキ・アキラだ！」

ゴール「ふん、そんなことはどっちでもいい。とにかく貴様が死ねば良いのだ」

アキラは銃を連射するが、ゴールはテレポートでその弾をすべて避け、再び右手をアキラに向けて出した。

危険を感じたアキラは身構えるが、吹き飛んだのはゴールだった。

アキラの後方から叫び声が聞こえる。

シーバ「まだ……まだ終わっていないぞ、ゴール！私と戦え、戦うんだ！」

アキラも、ゴールに再びガッツハイパーガンを撃った。

ダメージを喰らいテレポートが出来ず、ゴールの右肩に当たり痛そうな悲鳴をあげた。

シーバはアキラに近寄り、彼と共に走っていった。

アキラとシーバはなんとか逃げて、岩の陰に隠れた。

二人の息は絶え絶えだったが、アキラはシーバに確認するように言った。

アキラ「あいつは、ここまで……ここまで来れば追いかけて来ないか？」

シーバ「いや、それは分からない。奴はしつこいからな……カンザキ・アキラよ」

アキラ「ああ、何だよ？」

シーバ「君に二つ聞きたいことがある。……いいか？」

アキラ「別に良いけど……」

シーバは話し始める。

シーバ「まず、君は私のことを信用しているのか？」

アキラはハハッと少し笑った。

アキラ「信用していると言えば信用してるだろうな。何でか俺にもよく分からないけど」

シーバ「そうか・・・」

シーバは少し黙り、二つ目の質問に移った。

シーバ「二つ目は・・・君は怖くはなかったのか？」

アキラ「何が？」

シーバ「ウルトラマンツインと融合をして、恐怖を感じなかったのか？」

今度はアキラが黙り、頭を捻りながらこう答える。

アキラ「恐怖は・・・そんなこと一回も感じたことはないな。むしろ嬉しかったんだと思う」

シーバ「嬉しかった？」

アキラ「ああ、俺はツインと融合をする前にさ、ティガと融合したんだ、子どもの時に。だからだと思う。……………もう一つ理由があるんだったら、俺は彼のことを仲間だと思っているからかな。まあ、これに関して言えば後付けだろうけど。……………初めてツインの光でツインに変身した時は俺、完璧な神様と融合したんだ！って思ったんだ。だけど何回も変身していく内に分かった。彼は完璧な神様なんかじゃないってさ。一人の、俺たちの仲間なんだ。だから俺は仲間としてツインを精一杯サポートしたいんだ。・・・あ、話おもいきり変わってたわ。ゴメン」

シーバ「いや、気にしないでくれ」

その時、爆発音が森中に響いた。

アキラ「何だ？」

アキラは空を見上げると、突然頭が痛くなった。

アキラ「ヴッ！・・・アアッ、グッ！」

頭を抱え、アキラは地面に倒れ込む。

シーバ「カンザキ・アキラ！しっかりするんだ！」

そして、二人の前に再びゴールが現れた。

ゴール「ふん、人間とウルトラマンの意識と言うのは言われた通り、バラバラのようだな」

シーバ「貴様！何をした！！」

ゴール「この星の人間共にしか効かない超音波を出しただけだ。そして貴様はここまでの命だ！」

ゴールは目からビームを出す。

シーバはレポートをしてそれを避けたが、現れた場所にビームを撃たれた。

さらにゴールは右手から波動でシーバを吹き飛ばした。

その後、ゴールはアキラを担ぐとテレポートをした。

一方、GUTS・2ndは現場に来ていたが彼らはアキラを探していた。

が、必死に探してもアキラは見つからない。

ミホは心配になっていた。

なんというか、映画ではデートに誘われるとどちらかが行方不明、または死亡というパターンはもはや恒例だ。

コウタ少年が指令室に来てはよく見ている『ウルトラマンネクサス』という番組でも主人公とその彼女も良い感じになったところで、彼女は死んでしまった。

それが最近、というだけあってミホの不安を煽る。

が、ここでミホはある一つの壁にぶつかった。

ミホ（あたしたちって、付き合ってるのかな？）

他の人からは見たら単純ではある問題だが、当人からすれば結構深刻な問題。

ウーンとミホは悩むと、ドサッと、何かが落ちる音がした。

ミホはアキラだと思ってすぐに音のした場所に行くが、そこにあつたものを見て後退りをした。

あつたものはシーバだった。

シーバはミホを見ると、喋りかけた。

シーバ「君……はカンザキ・アキラの……。仲間か……。頼む、君たちの基地へと……。連れてって……。くれ」

ミホ「あんたは、アキラを知ってるの？」

シーバ「ああ……。そしてこの……。星のピンチを……。伝えたい」

ミホはP D Iを手に持つと、シンジヨウのP D Iに繋げた。

ミホ「隊長！宇宙人に遭遇しました！アキラについても何かを知っているようです！」

太陽系、第3惑星は今ピンチを迎えようとしていた・・・

ついに攻撃を始めたパークル星人 ゴール。

シーバはこれを止めるため、TPCにある作戦を伝える。

蘇れ、カンザキ・アキラ！

そして戦え、ウルトラマンツイン！

次回、ウルトラマンツイン第13話「第3惑星の激闘（後編）」

さあ、次回も皆で読もう！

ツインという作品で多分作らなければいけなかった話だと思います、今回と次回は。

今回はアキラの思い。

何故、ツインと融合をして、アキラは恐怖を抱かなかったのか？
また、アキラはツインという存在をどう思っていたのか、という感じで作りました。

ところで、今回と次回は、第6話辺りに入れたかったのですが、内容的に早すぎるだろうと判断しましたので1クール終了という区切りのいい場所に入れました。

感想とリクエストをお待ちしております。

第二部予告（前書き）

これからの展開のネタバレが含まれるので読む時は注意をしてくだ
さい

第二部予告

「どうして怪獣から逃げないんだ！？あいつらは悪魔なんだぞ！」

アキラは叫ぶ。

自分の考えがなぜ届かないと考えながら。

＼EARTH・ULTRA HERO 第1章 『ウルトラマンシン』 第2部『

「あの化け物は怪獣を食ったぞ！」

「どうしてだ！どうしていつもこうなるんだ！」

「まさか、スフィアがまた襲来して来たのか？」

「……………聖域が荒らされた時、物の怪は甦るであろう」

「副隊長、応答してください！副隊長！！！」

「嫌だ！来るな！やめてくれ！」

絶望に包まれる中でも人は戦う

「あたしが飛びます！飛んで、皆を助けます！」

「まだまだ！僕は諦めないぞ！」

「それくらいの時間があれば大丈夫だ。俺に任せろ」

「お前らなんか人類の未来を決められてたまるか！」

「光を………信じるんだ！！」

そして伝説の光の巨人が再び、

「ティガー！」

（近日公開）

第二部予告（後書き）

えーと、本編先にやる前に予告を投稿してしまい申し訳ありません
m (——) m

ただ、活動報告にも書いてある通り、最近小説書くのに行き詰まっ
てしまいましたので、番外編を書こうかなと思いましたがネタが浮
かばず・・・そんなわけでこういう形で投稿させて頂きました。

後、これに書かれた台詞は本編では流れない可能性がございますの
で、そのところはご了承してください m (——) m

リレー小説第3話 光の巨人と仮の体と疾走（前編）（前書き）

これはハナト先生が考案したリレー小説をゼロディアス先生から受け取ったものです。

この話より前の話を見たい方はハナト先生の『魔法仮面リリカルオーズStrikers』と、ゼロディアス先生の『仮面ライダーイクエイド ～異界の旅～』をお読みください。

因みに今回のお話は、時間軸的にはどこでもいいです。

僕もあまり考えていないので、何話の後とかは読者様の考えにお任せします。

リレー小説第3話 光の巨人と仮の体と疾走（前編）

仮面ライダーオーズ外伝 リレーと6人の作者

前回の3つの出来事！！

1つ、日野映司とアंकは、『まよチキ！バースの世界』の世界に辿り着いた！

2つ、その世界でグリード『ウヴァ』と戦い、2枚のコアメダル、『クワガタメダル』、『カマキリメダル』を手に入れた！

そして3つ、奈々の変身するディエンドによって、スバルとジロー、伊達と後藤、この4人による夢のコンビ×コンビ、WWバースが誕生した！

カウント・ザ・メダルズ、現在オーズの使えるメダルは？

タカ×2枚

トラ×1枚

バッタ×1枚

クワガタ×1枚

カマキリ×1枚

ゴリラ×1枚

タコ×1枚

？物語を始める前に映司とアंकが辿り着く世界の説明をしよう？

？物語は2027年、超古代文明の遺跡『ルルイエ』の周辺から光の巨人の石像が見つかったことから始まった？

？地球平和連合『TPC』はこれを回収するが、怪獣ウイグルが襲撃してくる？

？TPCに所属する特捜チーム『GUTS・2nd』はこれを迎え撃つがカンザキ・アキラ隊員は重傷を負ってしまった？

？だがその時、突如光の巨人は蘇りウイグルと対決、これを撃破する？

？その後、光の巨人はアキラと融合し、『ウルトラマンツイン』はこうして誕生した？

？そして、カンザキ・アキラとウルトラマンツインは地球を守るために、お互いの短所をカバーしあいながら戦うのであった……？

アキラは最高時速300キロメートル以上が出るウルトラオートバイ『オートスタッガー1号』に乗って、後輩のヨシオカの乗る『オ

ートスタッガー2号』と並走していた。

彼らの目的地には、謎の怪人が暴れているとの報告があり、二人は一応『調査』と言う形で向かっているのだった。

二人は高速道路から一般道路に出ると一回止まり、アキラは頭に着けているヘルメット『ガッツメット』の通信装置のボタンを押す。

だが、通信装置からは嫌な音が鳴り響いておりとても通信できる状態ではない。

ヨシオカ「カンザキ先輩？まさか、通信できないんですか？」

アキラはやれやれと言った感じで頭を振り、

アキラ「どうやらその通りらしいぜ。妨害電波でも出てんだろ？何回目だよ」

ヨシオカ「最近の怪獣って僕たちの技術を分かってきましたからね」

アキラは、ガッツハイパーガンを構えながらこう言う。

アキラ「ったく。だったとしたら、俺たちが苦労しちまうだろ。高い給料払ってもらってるけどさ、嫌になるな」

ヨシオカ「ええ、全くです」

ヨシオカも銃を構え、一般道路を歩き始めた。

一方、日野映司とアंकはこの世界に着いた場所は誰もいない町であつた。

その光景を見て映司は

映司「まさにゴーストタウンって感じだね。この世界はもう、グリードにやられたんじゃない？」

しかし、アंकは聞いていないようだ。

映司「アंक？」

アंक「…………ヤミーだ」

その一言で映司はどこかのんびりとしていた顔が真面目モードになった。

映司「ヤミーだって！どこだ！」

アंक「俺だって詳しくは分かんねーよ！とにかく付いてこい。今だったらお化けとか言われなさそうだからな」

映司「……もしかして前の世界のこと、引きずってんの？」

アंक「う、うるせー！！」

腕だけのアंकがあるロボットのロケットパンチの如く飛んでいて、映司はそれを追いかけるのであった。

アキラは、少々いやかなりのウンザリとイライラしていた。

まず、この町は既に避難警告が出たため住民は全員避難したが、それにより不気味さが出ており、かなり怖い。

そして、いつもは巨大な怪獣と戦っているから目標は簡単に見つかった。

だが今回は怪人だ、普通の人間くらいの大きさしかない。

よってなかなか見つからないのだ。

今までの仕事の中でこれが最悪の仕事のベスト1に入るだろう、なんて考えていると、ヨシオカがアキラの肩を叩いた。

アキラ「何だよ、ヨシオカ？」

ヨシオカは彼らの近くの家の角を指で指しながらこう言った。

ヨシオカ「あそこに人がいたような気がしたんですけど、気のせいかな？」

たまに自分の意見に自信の無くなるところが彼の悪い癖だ、アキラはそう思うと、

アキラ「だったら行ってみようぜ。まずは行動からだ」

二人は警戒しながら角に近づく。

すると、コンクリートの地面が爆発し、それに巻き込まれ二人は吹き飛んでしまった。

地面に倒れ込んだアキラは前方を見ると、そこにはクワガタミーミーが立っていた。

アキラ「何だよ、あいつは？……ヨシオカ、大丈夫か！」

アキラは大きな声で叫ぶが、反応はない。

今度は周囲を見渡すが、ヨシオカは電柱にもたれ掛かっており、気絶をしていた。

なんてこった、アキラはそう思い、ガッツハイパーガンを連射した。しかし、効果は無いようでクワガタミーはアキラに近付き、一発蹴りを入れる。

その蹴りによりアキラはまたしても吹き飛び、ヨシオカの近くに落

ちた。

ウルトラマンツインと融合したため体が強化しているとはいえ、アキラは元々運動が苦手だ。

その為、反撃できずただ痛みを堪えながら体を起こそうとしても、また倒れてしまう。

クワガタヤミーは走ってアキラを止めを刺そうとした。

アキラは内ポケットからライト・カトリッジを取り出してツインに変身しようと構える。

が、突如建物の影から何かが飛び出し、彼のピンチを助けた。

その何かとは、勿論映司の変身した『仮面ライダーオーズ タトバ コンボ』だ。

オーズはまず、クワガタヤミーに飛びかかって押し倒すと、とにかくパンチを両手を使い、我武者羅に繰り出した。

因みに、アंकはいつの間にか映司に追い抜かされたらしく、メダジャリバーを持ってやって来た。

アंक「おい、映司！俺を置いていくな！」

オーズ「ええ？うわっ！？」

一瞬、アंकに構ったせいかオーズはクワガタヤミーに投げ飛ばされ、ドサツと地面に倒れる。

アंक「ったくよ。これを使え！」

アंकは大きな剣を投げ、それは地面に突き刺さる。

映司「アンコ、ちゃんと投げろよ」

少々、悪態をつき（アंकは後ろでわーわー）メダジャリバーを手にすると、迫ってくるクワガタヤミーに対し剣を振る。

クワガタヤミーは肩を押さえ、オーズはこれでもかと言うくらいにメダジャリバーで攻撃した。

その光景を見て、アキラは『ずっと何か（念のため書いておくがオーズのこと）のターン』状態だと思った。

アキラが思った通り、オーズはクワガタヤミーには反撃の隙も与えない。

そして、

オーズ「セイヤー！」

その言葉と共に、メダジャリバーを振り上げるとクワガタヤミーは一瞬宙を舞い、地面に不時着した。

オーズはクワガタヤミーから落ちたセルメダルを3枚拾うと、メダジャリバーにセット。

それをスキャンして>トリプル！スキャンングチャージくと音声一鸣り響いた。

オーズ「セイヤー！！」

オーズはメダジャリバーを振るとその剣先から衝撃波が飛び出て、クワガタヤミーに直撃！

クワガタヤミーは悲鳴のようなものをあげ爆発し、大量のセルメダルを落とした。

アキラ「うわ、お金が大量だ！？」

いきなりのことだったので、日本語がどこかおかしくなっちゃったアキラ。

オーズは変身を解除して、アキラに近寄る。

映司「大丈夫ですか？」

アキラは、

アキラ「君は何なんだ？って言うか、後ろのお化け何？」

後ろのお化け、読者は誰のことか分かるだろう。

アंक「だからお化けと言うな！」

そこまで叫んだとき、アंकは彼に違和感を感じた。

どこか自分達と同じようで違う、そんな存在という感じの違和感だった。

映司は上空を見上げると、黄色い横幅に広い飛行機がこっちに向かって来ているのが見えた。

アキラ「で何なんだ？君たちは？」

アキラは質問を続けてくる。

映司「あ、俺は日野映司って言います。でこっちはアंक。以外と引きずるタイプなんで、傷つけるようなことは言わない方が良いでしょう」

アंक「だからそんなんじゃないー！」

黄色い飛行機は近くに止まり、中からアキラたちと同じ服を着た女性が現れた。

今度は映司から質問をする。

映司「あの飛行機って何ですか？見た感じ、あなたたちの仲間のような感じですけど」

アキラはその質問に答えようとした時、

ミホ「アキラ！」

ミホはアキラに走って近寄ると映司を弾き飛ばして（映司「ひでぶ！」）、抱きつくかと思ったらアキラを殴り始めた。

アキラ「だ！？痛いって！何するんだよ！」

ミホ「これくらい当然よ。だって通信をしなかったじゃない。隊長も心配になってあたしを送ったのよ」

アキラ「一人で説明してる。俺たちは怪人と戦ってエライ目に遭った……って、アッ……！！！」

アキラは何かを思いだし、すぐに走り始めた。

とは言うものの、彼が到着した場所はすぐ近くのヨシオカが気絶している場所だった。

アキラ「ヨシオカ！しっかりしろ！」

アキラが叫んでるなか、ミホはやっと映司たちの存在に気がつき、アングを驚いた感じの目で見ていたが……

ミホ「か、」

アング（何だよ、怪物って言うつもりか？確かに俺は怪物だろうけど、言った瞬間殴ってやろうか？）

ミホ「かわいい……！！！」

アング「え？うわっ！？」

突然、体（腕）を抱き締められアंकはとても苦しそうだ。

アキラ「そんなことより、ミホ！ヤバイぞ！ヨシオカ、息してねー！」

ミホ「嘘！？ヨシオカ君！」

ミホはアंकを道路の用水路に捨て、ヨシオカに近寄った。

ミホ「ヨシオカ君！」

映司「ヨシオカって人、どうにかなんないの、アंक？ああそうだ！セルメダルとか使ってさ！」

用水路から出てきたアंकは今度は映司に捕まって上下に揺らされながら言わされ困っていた。

だが、これは後の世界のことを考えると使えるチャンスかもしれない。

アंक「分かった、俺に任せな」

アंकはそう言うとヨシオカの元へ飛び、彼の右腕に触れた。

そして・・・

ヨシオカの目が開いた。

しかし、髪の毛の色が金髪になっていたりとかかなりの違和感があった。

その違和感の答えは右腕にアंकがくつついていたのだった。

いや、くつついていたと言うよりも融合していると書くべきか。

その右手を額に添えると、そのまま30秒間動かなかった。

そして、ヨシオカは口を開いた。

ヨシオカ「驚いたか、カ・ン・ザ・キ先輩。サ・ク・マ先輩。俺は今、アंकの意識だ。……さていきなりで悪いが、お前たちは俺の下僕になれ」

一瞬の間が訪れて、

映司「何言っただよ？アंक、そんなことしちゃ駄目だよ！」

アキラはガッツハイパーガンを構えるが、

ヨシオカ「そんなことして、こいつの体がどうなってもいいのか？」

アंकは右手を首の前で絞めるような感じで動かした。

アキラ「く、やっぱり化け物は化け物だな」

アキラはそう言うのとガッツハイパーガンを地面に置いた。

ミホ「アキラ……」

ヨシオカ「アंक（以下Aヨシオカ）はその光景を見て笑い始めた。

Aヨシオカ「ハハハハハハハハハハハハ！まさか、人間がここまで素直だとは思わなかったぜ！」

映司はやはり彼も怪物なんだ、と思い始めた。

が、次のAヨシオカの一言がその場の空気を変える。

Aヨシオカ「なんてな」

アキラ「は？」

ミホ「へ？」

映司「え、どういう事？」

Aヨシオカ「まあ、簡単に説明するが腕だけつてのもあれだから、自分で行動できる体が欲しかったわけよ。しかし、体があるって良いね」

Aヨシオカは腕を伸ばしてストレッチを始めた。

アキラは映司に問い詰める。

アキラ「おい、何なんだよお前ら!？」

映司はしどろもどろに

映司「え」と、話せばかなり長くなるから、あなたたちの基地で話した方がいいかな？」

ミホ「どうして基地で話を聞かなきゃいけないのよ。今ここで話さない！」

どこかいつもより怖いミホに押され、映司は話し始めた……

そんな彼らを見ていた一人の少年がいた。

彼は立ち去ろうとするが、コンクリートの地面が突然火花をあげる。

少年は後ろを見ると帽子を被った青年がこちらに銃を構えていた。

青年「やあ、突然で悪いけど、僕のお宝『コアメダル』を渡してく

れないか？」

そう言つて、一枚のカードを銃にセット。

『K a m e n R i d e』と電子音が鳴るなか青年は
こう叫んだ。

変身！

銃のトリガーを引き、『D I - E N D !』と電子音が再び鳴り、少年の目の前には映司とアंकが前の世界で奈々が変身した『仮面ライダーディエンド』が姿を現した。

それを見ていた少年の姿は何処にもなく、代わりに立っていた場所にはグリードの『カザリ』が立っていた。

カザリはディエンドに走って近づいて行く……………

リレー小説第3話 光の巨人と仮の体と疾走（前編）（後書き）

最初の『ウルトラマンツイン』の歴史みたいなものは実験的に入れてみました。

もし好評であつたら、また入れたいと思っています。

もう一つの理由は初めて僕の作品に来て、読む方もいらっしやるだろうから書いてみました。

ところで、今回ツインが登場しなかった理由ですが、一応『仮面ライダーオーズ列伝』の主人公は日野映司なので、彼より目立ってしまふ恐れがありました。

まあ、プロット段階ではクワガタヤミーを倒した後に怪獣出現 アキラ、ツインに変身みたいな展開はありましたが。

というわけで、次は後編。

前編と同様、時間がかかってしましますので、明日くらいには投稿したいですが、まだこの時点で書いてすらいないので今しばらくお待ちください m (_ _) m

リレー小説第3話 光の巨人と仮の体と疾走（後編）

その後、ダイブハンガーに映司とアंकゥヨシオカ（以下Aヨシオカ）を連れて行って事情を聞いたGUTS・2ndの隊長、シンジヨウ・テツオはとりあえずアキラとミホに彼らの監視を命じた。

とは言うものの、アキラは今度の土曜は非番である為、その日はミホに任せようとしたのだが……

アキラ「何でお前たちまで付いてくるんだよ!!」

アキラの車の中では、アキラの他に映司とAヨシオカ、そしてミホもいた。

因みにミホは彼らの監視であるため、制服を着ている。

映司「別に良いだろ？旅は道連れって言うしさ」

映司は窓から見える風景を見ていてかなり嬉しそうだ。

助手席に座っているミホは鞆からCDを取り出すと、アキラに曲を

聞いていいかと聞いてきた。

アキラ「駄目だって！今から『週間88』が始まるんだからさ！」

『週間88』とは10年以上続くラジオ番組で、たった30分しか放送しないがかなりのリスナーから支持されているのだ。

その中には勿論アキラもいた。

ミホ「どうして、あんな番組が長続きするか分からないよ。あたしには」

アキラ「何だと！だったら、聞いてみるよ！」

すると、車内にあるスピーカーから「時刻は10時です」と聞こえた後、若い女性が喋り始めた。

ミホ「うーん、あたしはこの人が好きじゃないからな」

アキラ「そっからかよ」

ミホ「そっからよ。まあそんな訳であたしのCDで良いわね」

ミホはCDを入れ（アキラは抵抗しようとしたが、運転中であったため出来なかった）、最近話題のアメリカンで派手な曲が流れ始めた。

アキラ「運転出来ん！もっと静かな曲は無いのかよ？」

ミホ「いいじゃん、ラジオに比べたらマシよ」

アキラ「って言うか、お前今仕事中だろ？いいのかよ？」

ミホ「な、あたしは……………」

二人が口喧嘩のようなものをしている時、i P h o n e のようなものをいじっているながらアイス食べていたAヨシオカ（なんて器用な b y 作者）はこう呟いた。

Aヨシオカ「なるほど、この二人のことを？リア充？って言うのか」

アキラ ミホ「リア充じゃない！」

二人は大きな声で言った時、ハモったのでAヨシオカは、やっぱりリア充だ、とまた呟いた。

一方、映司は気になっていたことをアキラに尋ねてみた。

映司「あの、アキラさん？俺たちってどこに向かっているんですか？」

すると、アキラは今までの高いテンションを一気に落として、こう言った。

アキラ「俺が・・・育った故郷さ」

映司「へー、そこって明るいところなんですか？」

アキラ「明るいか、どうかは自分で判断しろ」

それからアキラは黙り続け、車内も静かになり始めた……

1時間後、アキラの車は森に囲まれている町に到着した。

映司「へー、良い場所だねーアंक」

未だにi P h o n eを見ているAヨシオ力は特に興味は無いようだ。

ミホ「ねえ、アキラ。もしかして目的地って・・・」

アキラ「ああ、ミホと約束した場所だ。まさかこんなに早く連れてくるなんて思わなかったけど」

アキラは苦笑して、1つの大きな家を目指した。

大きな家は保育園のような感じであった。

何故なら、大きな家に負けないくらいの大きな庭があり、そこでは子どもたちが遊んでいたからだ。

車を近くの駐車場に止め、映司たちは車から外に出る。

映司「目的地ってここですか？」

アキラ「まあ、そんなこつた」

4人は歩き始めると、Aヨシオカは映司を一旦呼んだ。

映司「何だよ、アंक？」

アंकは間髪を入れずに言い始めた。

Aヨシオカ「カンザキには気を付けて見張っておけ」

映司「はあ？何だよ？」

Aヨシオカ「あいつの中には何かがいるんだよ。何て言うか俺たちに似てるが違うって言うか・・・」

映司「そんなのアंकの勘だろ。とにかく行こつて」

映司はアキラとミホを追いかけ始め、仕方なくと言った感じでAヨシオカもそれに続いた。

4人が大きな建物の門に近づき、アキラは子どもたちに声をかけた。

アキラ「おーい！皆、久し振りだな」

すると遊んでいた子どもたちは門へ駆け寄って、1人の子どもが開けるとアキラの回りに集まっていた。

アキラ「おおマユ、また大きくなったんじゃないの？」

マユと呼ばれた少女は笑って、アキラに抱きついた（因みに大きくなったって言っても、彼女の大きさにアキラの足に抱きついたと言った感じ）

映司の顔は正にポカンと言った感じだった。

そして、こう考えた。

アキラは先程故郷に行くに行っていた。

そして、たくさん子どもたちがいるこの場所に着いた。

もしかしたら彼は……

アキラは映司の顔を見てその考えを読み取ったのか、こう言った。

アキラ「ああ、俺は孤児だよ。そしてここが俺にとっての故郷だ」

映司は自分は酷いことを言ってしまったのではないと思った。

ミホ「アキラ、いいの？そんなこと言って？」

ミホはどこか悲しそうな顔で聞いてくる。

アキラ「別に俺が話すって決めたんだから良いだろ？って言うか、

ミホも映司もそんな顔すんなよ。そんな顔するんだったらこいつらと遊んでやってくれよ」

すると、2人の男の子が映司の周りに集まって突然映司のズボンのポケットからパンツを取り出し（ミホを含め、女の子たちはキヤーと言って目隠しをした）た。

映司「ああ、ちょっと！」

映司は取り替えそうとするが、2人はとても素早く建物の庭に逃げ込んだ。

映司「待ってたらー！！！」

映司はそれがこの世で一番大事な物が取られてショックだ、という顔で彼らを追いかけた。

その後を残りの男の子たち（年齢的に幼稚園〜小2くらい）がダダダッと走って付いていった。

因みにミホは、近くにいた女の子たちに、ままごとしない、と言われたので頷いて歩いて砂場まで行った。

アキラの周りには小3〜中3くらいの子どもたちがあり、Aヨシオカに声をかける。

アキラ「ヨシ・・・アंकは行かないのか？」

Aヨシオカ「俺はいい。ロリコンなお前とは違って子どもには興味が無いからな」

それを聞いて、小5くらいの少年が反論をした。

少年「アキラ兄さんはロリコンじゃないよ！僕たちのヒーローなんだ！」

そうだそうだ、子どもたちは口を揃えて叫んだ。

そんな中、アキラの名を呼ぶ男性がいた。

？「おーい、アキラ！久し振りだな」

あ、とアキラは呟くと男性に近づいて、

アキラ「おやつさん、元気でしたか？」

と笑顔で聞いた。

おやつさんも笑顔で答える。

おやつさん「いやいや、この通りぴんぴんしてるよ。そついや、お前さんが連れてきた3人は誰だい？」

アキラ「あそこで、カンタたちと遊んでる奴は日野映司。マユたちとままごとをしているのは同僚の、サクマ・ミホです。で、こいつは……」

Aヨシオ力を指しながらアキラは考えて、

アキラ「アंकニーア・シューニベッツ、外国人です」

Aヨシオカ「な!？」

おやつさん「あ、外国人か。なるほど、だから金髪か」

Aヨシオカ「ちょっと待て!カンザキ、おま」

アキラ「アー!!アンクニア・シューニベッツ君、ちょっとこち来ようか？」

アキラはいきなりアンクの右手を掴むと、少しおやつさんたちから離れて、

アキラ「勝手に名前決めたのは悪いわ。でも名前付けておかないと後々困るだろ？」

Aヨシオカは右手の人差し指を自分に向けながらこう言った。

Aヨシオカ「だからってこいつの名前で良いだろうが!お前、ネーミングセンス無さすぎだろ」

アキラ「俺の中ではお前は?アンク?であって?ヨシオカ?じゃない。だからああしたの」

その時、アキラは謎の気配を感じた。

それは以前彼が怪獣の居場所を悟った感覚に似ている。

だが、今回は小規模と言った感じであった。

Aヨシオカ「どうした？」

その一言でアキラはすぐに物事を整理し、判断した。

アキラ「アंक、悪いけどちょっと俺散歩してくるわ」

Aヨシオカ「はあ？何だよそれ？」

しかし、アキラはアंकの質問には答えず走っていった。

おやっさんはAヨシオカに近づき、アキラはどこに走っていったのかを聞いた。

Aヨシオカ「散歩だよ」

おやっさんはなるほどいかにも分かりやすい顔をして、

おやっさん「だったら、アキラが帰ってきたら昼飯だ」

と言って子どもたちを連れていった。

Aヨシオカ「嫌な予感がするな」

Aヨシオカはそう呟くとおやっさんに付いていった。

感覚に従ってアキラは孤児院から少し離れた場所に着いた。

ここは川が流れており、近くには森林があるため昔は皆で遊んだなとアキラは回想する。

が、その回想はすぐに終わりいきなりアキラは叫んだ。

アキラ「さっさと出てこいよ！いるのは分かってんだ！」

すると、林の間から黄色の上着を着ている銀髪の少年が少し驚いた感じで出てきた。

？「君って人間？僕を見つけるなんて凄いな」

アキラ「お褒めの言葉、ありがとよ」

アキラは間髪を入れずに、普段はあまり使わない護身用の拳銃をポケットから取り出し少年に放った。

少年は普通の人間なら見えない撃たれた弾丸を軽く避け、猫系グリード・カザリへと変貌した。

アキラ「やっぱり怪物か。人間に化けるなんていい度胸だな」

カザリは何も答えず、一瞬でアキラの目の前に現れ、鉤爪で彼を攻撃した。

アキラは鉤爪をなんとか抑えたが、カザリは右足で彼を蹴り飛ばし川の底へと落とす。

川から上がって、ずぶ濡れになったアキラは拳銃を連射するが先ほどのように全て避けられてしまった。

猫野郎め、とアキラは悪態をついて拳銃をもう一度構えるがカザリは右手を突き出して竜巻を発生。

竜巻に吹き飛ばされたアキラはそのまま川岸にあった大きな岩に頭をぶつけてしまった。

ぐったりと横になるアキラをカザリは無表情ではあるが軽蔑するような眼差しで見た。

そして、その場を後にした。

一方、孤児院の客室ではもう30分以上経っているのに帰ってこないアキラをミホと映司は心配していた。

ミホ「アキラってさ、なんか怪獣を倒す時によくいなくなるのよ。でも今日は怪獣なんて出てないし……どこに行ったんだろ？」

映司「アंक、アキラさんどこに行ったか聞いてないの？」

Aヨシオカは知らねえよ、と言って話を続けた。

Aヨシオカ「そんなことより、俺たちこんなところに居ていいのか？ さっさと、グリード見つけようぜ」

映司「そりゃそうだけど、ぶっちゃけ探しても見つからないって。地球はでかいんだからさ」

Aヨシオカ「お前、あいつらが俺たちのところに来てくれないかって思っ
てないか？」

映司「まあ、それが一番楽だろ。アंकもそう思っ
てんじゃない？」

ミホは飲んでいたコーヒのカップを机に置くと彼らの話に割り込んだ。
だ。

ミホ「お話の途中で悪いんだけど、この世界に本当にグリードって奴は来てんの？」

その質問にAヨシオカが答える。

Aヨシオカ「間違いは無い筈だ。少なくともいなかったら、ここには来ない。……だがな」

Aヨシオカは顔を暗くして話を続ける。

Aヨシオカ「もういないってこともあるかもな。別の奴に倒された

か、この世界から移動したか」

ミホ「だったら、あなたたちはまた別の世界に行くのよね？ヨシオカ君の体は返してくれるの？」

Aヨシオカ「まあ、そう判断した時だな、体を返すのは」

その時、部屋の扉が開きおやっさんが入ってきた。

おやっさん「やあ皆さん、コーヒーのおかわりはいかがですか？にしても、アキラの放浪癖には頭が痛くなりますな」

ミホ「アキラって昔からどこかに行ってたんですか？」

おやっさん「本当に出掛けては行方不明扱いになりますから、あいつは。困ったもんですよ」

そう言った瞬間、遠くからバーン！と何かが爆発する音が聞こえた。何だろうと、映司は窓の近くに行つて外の様子を見ると、あ、と叫んだ。

映司「アंक！こつち来て！」

Aヨシオカも窓に近寄ると、

Aヨシオカ「なるほどカザリか。映司が思った通りの展開になったな」

孤児院の前にはグリードのカザリがいた。

外にいた子どもたちは建物の中へ逃げていった。

おやっさん「何じゃありゃ!？」

おやっさんの問いにミホはガッツハイパーガンを持つと、

ミホ「危険ですので、ここから出ないでください」

と冷静に言った。

Aヨシオカは映司にオーカテドラルとタカ、トラ、バッタの三枚のコアメダルを渡し、ミホと同様にガッツハイパーガンを取り出した。

ミホ「何でアンタが持つてんのよ？」

Aヨシオカ「別に良いだろ？」

と言って、三人は外に出た。

建物の外に出た三人はカザリと対峙する。

カザリ「アंक、僕のメダルを返してもらっよ」

Aヨシオカ「へっ、お前は完全体になれねえよ。映司、分かってんな？」

映司「ああ！」

映司はオーカテドラルを腰に添える。

すると右腰にオースキヤナー、左腰にオーメダルネストが出現してオーズに変身するためのベルト、オーズドライバーが出来た。

そして、タカ・コアとバッタ・コアをそれぞれ右手と左手に持ち、オーカテドラルにセット。

そして、トラ・コアをオーカテドラルの穴の真ん中に入れ、斜めに傾ける。

映司はオースキヤナーを持つと、オーカテドラルの前を通るようにスライドさせた。

スライドさせていく度にキーン！と言った音が三回鳴って、

映司「変身！」

- タカ！トラ！バッタ！ -

- タットツバ タトバ タットツバ -

すると、彼の周りに色んな動物の紋章が現れ、その中からタカ、トラ、バッタが上から順に映司の前に並んでいた。

それが合体した時、日野映司は「仮面ライダーオーズ」へと変身が完了したのだった。

ミホ「何よ、今の歌？」

オーズ「歌は気にしない方が良いでしょう」

Aヨシオカ「俺の台詞を取るな！」

Aヨシオカが叫ぶなか、オーズは両腕に付いているトラクローを展開、カザリに近づいて白兵戦を行う。

カザリも鉤爪で対抗し、Aヨシオカとミホはオーズをガッツハイパーガンでオーズを援護する。

がカザリはオーズの攻撃を避けて反撃しながら、弾をなんとか避けていた。

孤児院の中に入っていた子どもたちは、

映司さんは仮面ライダーだったんだ！
スゲー、TVで見るよりカッコいい！
頑張れー！！

ミホさん、猫野郎なんか倒せー！！
アंकニア・シューニベッツさんも、負けないで！！

と、彼らなりに出来ること、応援をしていた。

戦いは長引きそうだ・・・

アキラが起きた時、すぐにカザリがないことに気がついた。

アキラ（つたく、最近全然活躍出来ね〜）

ガンガン痛む後頭部に触れると、膨らみが出来ていた。

どうやってカザリを探そうか、と考えていると一人の帽子を被った青年が近付いてきた。

？「やあ、君がカンザキ君かい？」

アキラ「誰だよ、アンタ？」

？「まあ、僕のことはいいさ。そんなことよりもさっさと孤児院に戻りたまえ。さっき君を襲った猫ちゃんがそこにいるよ」

アキラは驚いて、

アキラ「本当か！？」

と、青年の答えを待たず孤児院に戻っていった。

青年は顔に笑みを見せると森の中へ姿を消した。

……アキラは走りながら、考えていた。

恐らく今向かっても自分は負けてしまうと、だったら……

アキラはズボンのポケットからライト・カートリッジを取り出し、
頭上高くあげて、

アキラ「行くぜ、ツイン！」

ライト・カートリッジからは目映い光が溢れ出す。

オーズたちとカザリの戦いはオーズたちの方が劣勢だというのは隠しても隠しきれない真実であった。

最初は子どもたちの声援もあっていつもよりやる気が出ていたオーズであったが、カザリはかなり強い。

そこで、まず追い込まれる原因となったトラクローでの攻撃はやめ、メダジャリバーで応戦し始めたが戦局は変えることが出来なかった。

オーズ「アंक！カマキリとタコ出して！」

オーズとカザリから少し離れたところで援護をしていたAヨシオカはタコ・コアとカマキリ・コアを取り出しそれを投げながら叫んだ。

Aヨシオカ「何か秘策でもあんのか!？」

オーズ「やってみるしかないよ!」

二枚のコアメダルを受け取ったオーズはトラ・コアとバツタ・コアを取ったオーズドライバーにセットし、オースキャナーでスキャンする。

- タカ! カマキリ! タコ! -

今度は歌は流れず、亜種形態 - タカキリタ - となった。

オーズはカマキリソードを腕に持つとカザリに駆け寄っていく。

そして、タコレッグを文字通り? タコの足? の如く八本に分けた。

ミホ「何あれ、キモッ!」

足を絡ませ、身動きが出来なくなったカザリをオーズはカマキリソードでただ切っていく。

何回か切った時、カザリから何枚かのセルメダルと二枚のコアメダルが飛び出てきた。

それを見たAヨシオカは右腕を本体であるグリードの右腕に変貌し、ヨシオカの体から切り離れた。

右腕だけのアंकは落ちていくメダルを吸収して、

アंक「映司にしてはよくやったな！」

と言つてすぐにヨシオカの体へと戻つていった。

オーズはカザリの体から離れると、スキヤニングチャージをしようとするが……

カザリは竜巻を起こして、オーズを吹き飛ばす。

オーズは抵抗するように手足をばたつかせるが無駄で庭にあった大きな木に当たつてしまった。

今度はAヨシオカとミホにいる場所に竜巻を向かわせた。

迫り来る竜巻に二人は逃げ切れずミホは目を瞑つた……………

ミホが目を開けた時、自分が無事だとすぐに分かった。

そして、目の前にはいつもより小さいもののもう見慣れている背中

がそこにはあった。

ミホが言葉にしようとした瞬間、子どもたちがそれを代わりに言った。

ウルトラマンだ！

本物ウルトラマンツインだ！

仮面ライダーと一緒にグリードをやっつけて！！

ウルトラマンツインはバリアーを使って竜巻を吸収していた。

そのバリアーを小さく球状にしてカウンター技、リバーズ光球を力ザリに投げつけた。

光球は力ザリに直撃して、セルメダルを大量に落としたが致命傷には至らなかったようだ。

ツインはオーズに近寄って、右手を差し伸べる。

オーズは彼の行動を理解してその手を取って立ち上がった。

オーズ「行けるかい？」

ツインは無言で頷く。

そして、力ザリと再び対峙する。

大量のセルメダル、二枚のコアメダルを無くしたのだから今なら倒せるかも知れない、そう思ってオーズはカマキリソードを持って走り始めたその時だ！

森林から黒くて大きな化け物が飛び出してきたのだ！

よく見ると、化け物はバイクのような感じではあるが前輪となる部分が動物の前足の如く動いていた。

ツインは新しい敵かと思い、攻撃をしようとするがオーズがそれを止める。

オーズ「アंक、さっきのメダル出して！その二枚があれば黄色のコンボになれるから！」

Aヨシオカは先ほどのコアメダルを出すと、確かにライオン・コアとチーター・コアだった。

Aヨシオカ「駄目だ！お前自分の言ってる

映司「だからこそやるんだ！それに黄色のコンボだったらあれを操れるかもしれない！」

と言って、Aヨシオカに近寄ってコアメダルを取っていった。

Aヨシオカ「ああ、テメー！」

オーズは無視して、オーズドライバーにセットされていた三枚のメダルを全て出すと、ライオン・コア、トラ・コア、チーター・コアを挿入。

オーズキャナーを持って先ほどと同じようにスキャンをした。

・ライオン！トラ！チーター！・

・ラッタラッタ〜 ラットラ〜タ〜 ・

仮面ライダーオーズはタカキリタからコンボ・ラトラーター・へと変身した。

すぐさま、オーズはジャンプをして化け物の上に着地。

すると、化け物は煙を出して動きは止まった。

まるで、最高の飼い主に出会えたかのように……

オーズ「よし、行くぞ！」

オーズはカザリに向かってバイクを発進させた。

ツインもそれに続いて、走り始める。

カザリは竜巻を発生させて、彼らを近づせまいとするが、バイクはそんなものは通用しない感じでバイクは変則的に避けた。

その後ろからはツインがダート光弾を放った。

光弾に当たって、またセルメダルを何枚か落とすカザリに今度はオーズの乗るバイクからメダル状の光弾が発射され、豪快に吹き飛び倒れた。

が、カザリはすぐに立ち上がるとバイクの光弾を避けながら、バイクに向かって走り始めた。

そこへ、ツインが前に飛び出てエネルギーソードでカザリに応戦。

鉤爪と光の剣が何回もぶつかって火花を散らす。

これでは決着が着かない、そう思ったツインは右足でカザリを蹴った。

そして、ノーモーションでセンチラル光線を撃った。

光線は真っ直ぐ伸び、カザリに直撃したがエネルギーを溜めずに撃った為か、セルメダルを少し落とすも、カザリはかなり弱っていた。

一方いつの間にかバイクから下りたオーズはオースキャナーを手に持ってオーカテドラルの前でスライドさせる。

「スキャニングチャージ！」

オーズの体が金色に輝き始め、彼とカザリとの間に3つの黄色いリングが現れた。

チーターレッグで加速をして一つずつリングを通過して行きながら一気にカザリとの距離を詰めていく。

そして！

オーズ「セイヤー！！」

この叫び声と共に両腕に付いているトラクローを上から下にX字を書くようにカザリを切り裂いた！

これがオーズ、ラトラーターコンボの必殺技『ガツシュクロス』だ。
カザリはセルメダルをこれでもかと言うくらいに落とし、その体は
たくさんメダルの山となった。

はあはあと息切れしながらツインの方へと歩いていく。

それに気がついたツインは彼に右手を差し出した。

オーズもまた同じように右手を出して、仮面ライダーとウルトラマ
ン、二人のヒーローは握手をしたのだった。

子どもたちとミホは彼らの姿を見て歓喜の声をたくさん出した。

手を離れた後、ツインは院内から走って出ていき、子どもたちのた
めだろうか、少し離れた場所ですごい巨大な姿へと変わっていく。

そして皆にサムズアップをした後、腕を高く伸ばし大空へ飛んでい
くのであった……

変身を解除した映司はミホとAヨシオカの元へ駆け寄って行った。

Aヨシオカ「映司、さっきのバイクはどうした？」

映司「あ、本当だ。無くなっている」

二人の言う通りだった。

先ほど、映司が乗ったバイクはいつの間にか無くなっていたのだ。

Aヨシオカ「まあ、いいか。それよりメダルだ」

そう言つて、Aヨシオカは右腕を切り離そうとしたが、

？「やあ、ご苦労様」

突然誰かの声が聞こえたかと思つたら、メダルの山には既に先客がいた。

ミホ「あんた、誰よ？」

？「まあ、僕は君たちを影ながら援護していたと言つた感じかな？

……お、あつた」

メダルの山に突っ込んでいた手を取り出すとそこには六枚のコアメダルがあつた。

Aヨシオカ「あ、この盗人！」

Aヨシオカは青年を殴ろうと飛び上がってパンチを繰り出すが、軽く避けられてしまった。

？「さっきのバイク、トライドベンダーって言うんだけど、」

一枚のカードを取りだし、それに描かれている絵はバイク・トライドベンダー……であった。

？「これも僕のお宝さ。古い知り合いから貰ったものだけど」

「貰った」の部分はかなり棒読みであった。

？「つまり、君たちは僕に感謝してこのコアメダルを渡さなきゃいけないのさ。でも、このメダルはあげるよ。ありがたく受け取りたまえ」

そう言つて、青年はメダルを一枚投げる。

Aヨシオカはそれを素早くキャッチし確認したら、それはライオン・コアであった。

青年は手を降りながら去ろうとする。

Aヨシオカ「待て！お前は何者だ！」

？「通りすがりの仮面ライダーってところさ」

そして、突如現れた灰色のオーロラの中へ青年は消えていくのであった。

その時、アキラが

アキラ「おーい！」

と叫びながら帰ってきた。

ミホ「映司君、無視よ無視」

映司「え？あ、はい」

二人がこんな会話をしているなんて知らずに、アキラは笑顔で走ってくるのであった。

その後孤児院では『ウルトラマンツインと仮面ライダーオーズがやって来ましたパーティー』が開かれ、子どもたちは映司に変身をしてくれと頼んだが無駄だった。

それから三時間後、アキラ、ミホ、映司、Aヨシオカは帰るために孤児院を後にしてアキラの車に戻ったが、Aヨシオカはこう言った。

Aヨシオカ「さて、俺たちは次の世界に行くぞ」

映司「え、もう出発するのか？」

アキラ「別にまだこの世界にいても良いんじゃないか？」

Aヨシオカ「いいや、さっきの泥棒野郎のようにコアメダルを狙ってる奴らがこの先現れるかもしれないからな。さっさと行った方がいい」

と言って、Aヨシオカはヨシオカの体から本体であるアंकの右腕を切り離した。

ヨシオカはぐったりと倒れる。

ミホ「やっぱりお別れって寂しいわね」

映司「またいつか会えますよ、そうだ！」

映司は何かを閃いたかのように空中に浮いていたアंकを手にと、突然振り始めた。

映司「アंक、メダル出して〜！」

アंक「な、お前やめろ！」

何枚かコアメダルやらセルメダルを出したアंकを投げ捨て（ひ、酷い b y 作者）、二枚のセルメダルを二人に渡した。

ちなみに落ちたコアメダルの中にあったライオン・コアが震えたことに誰も気づかない。

映司「これ、持ってください。それを見て俺たちのことを思い出してくださいね」

アキラ「ああ！」

ミホ「モチのロンよ」

アキラ「ミホって古い言葉知ってんだな」

ミホ「うるさいわね」

……こうして映司とアंकは別の世界へと向かって行ったのだった。

アキラとミホは倒れているヨシオカを車に乗せ、ダイブハンガーに帰っていくのであった……

それから数十分後、アキラの車の中では……

ヨシオカ「うーん、ああここはあ？」

目を覚ましたヨシオカは一瞬この世の全てが理解できないような顔をしたが、

ヨシオカ「そうだ！あの怪人はどうなったんだ！？」

アキラ「落ち着け、ヨシオカ。もう怪人なんかいないって。それに叫んだって意味ないぜ？」

アキラは運転をしながら、彼に言った。

ヨシオカ「え、カンザキ先輩？・・・それにサクマ先輩も？2人ともどうしてここにいますか？」

ミホ「あんたは5日間は寝てたのよ。その間に色々あってね。まあ色々の部分は後で話すわ」

ヨシオカはそれを聞いた後、アキラの方を見ていた。

アキラ「なんだよ、ヨシオカ？俺の顔に何か付いてんのか？」

ヨシオカ「いえ、その何て言うか……」

ミホ「言った方がよいよ。その方がスッキリするし」

ヨシオカは言いづらそうに口を開く。

ヨシオカ「・・・その、カンザキ先輩がウルトラマンツインじゃないかって言う感じがするんですね。多分僕の気のせいだと思うんですが……」

一瞬の間、そして静寂を破ったのは、

ミホ「アキラがウルトラマンツイン？まさか、アキラは弱虫なのに、ウルトラマンじゃないって！」

アキラ「ミホ！弱虫ってどういう意味だよ！」

アキラはミホの返答にありがたいとは思ったが、弱虫と言われたことにはさすがに怒ったようだ。

ミホ「だってそうじゃない。さっきの戦いであなた逃げてたし」

アキラ「だからそれは猫野郎にやられて気絶しとったって言ったじゃないか！」

ミホ「本当かどうか怪しいところね」

アキラ「何だと！」

ヨシオカはやはり言わなければと思ったが、喧嘩をしているところを見て『リア充』なのかなと思ったが、

ヨシオカ（あれ、前にもこんなこと思った気がするけど………いつだっけ？）

と考え込むのであった。

オーズが使えるコアメダル

タカ×2枚

トラ×1枚

バッタ×1枚

クワガタ × 1 枚
カマキリ × 1 枚
ライオン × 2 枚
チーター × 1 枚
ゴリラ × 1 枚
タコ × 1 枚

リレー小説第3話 光の巨人と仮の体と疾走（後編）（後書き）

2011年8月26日

最後に少しばかり付け足しをしました。

次回の仮面ライダーオーズ列伝は！

ヴィヴィオ

「お・・・お化け・・・!?」

アंक

「違えよ!!」

ガメル

「メズール、どこ？」

浩&映司

「「変身!!」」

『殲滅者と魔砲と迷子の怪人』

次回はカオス先生の作品、『魔法少女リリカルなのはStrike
rs』世界の殲滅者ディガルド』でやりますので間違いの無いよう
うにお願いします。

さあ、『仮面ライダーオーズ列伝』と『ウルトラマンツイン』の次
回も皆で読もう!!

第13話 第3惑星の激闘（後編） - 粒子宇宙人 パークル星人 シーバ

本編、遅れてしまい本当に申し訳ありませんm（――）m

真夜中のとある街は静かだった。

誰もが寝ていて道路にある車は少ししか無いのも理由に入るだろう。

だが、その静寂はたった一つの禍々しい光が上空から地上に到達した時破られた。

光が落ちた場所は爆発を起こし、近隣の建物を巻き添えにした。

爆発が出てきて現れる煙が消えた時、そこには怪獣のサソームがいた。

突然の出来事で人々は何のことか一瞬理解できなかったが、誰かが「怪獣だ！！」と叫んだ瞬間あの怪獣から我先にと逃げ始めた。

北へ、東へ、西へ、そして南へ、目的地なんて分からない、とにかくサソームから逃げた。

が、彼らが逃げた先にも同じ怪獣がいた。

サソームは口から火球を連発した。

火の玉によって人々は為す術もなく燃やされていく。

その光景は、地獄と表現するべきだろうか？

とにかく、無抵抗な人々をサソームは殺していく。

その街は僅か5分で何も無くなった……………

パークル星人、シーバはGUTS・2ndに保護と言う扱いでダイブハンガーへ連れていかれた。

シーバの怪我は完治とまではいかないものの、既に苦もなく体を動かせるようだ。

そして、アキラがゴールに連れ去られたこと（一応人質として、と伝えた）、同じパークル星人、ゴールが地球を侵略しようとしていることを話した。

なお、どうしてゴールが侵略しようとしている理由は、彼らの故郷パークル星は今他の惑星と戦争をしていた。

しかし、パークル星人たちはさらに戦うか、和平をするかで二つに別れている。

交戦派は地球を前線基地とするため、ゴールを派遣した。

一方、和平派であるシーバは彼を止めるため単独で地球に向かったのだ。

そんな彼は今、ダイブハンガーのとある部屋にいた。

ただ動きもせずじっと何かが来るのを待っている。

そんな状態を少なくとも5時間は続けていた。

彼の静寂が破れたのは、扉がゆっくりと開く音が聞こえた時だ。

扉から部屋に入ってきたのは、TPC情報局所属のイルマ参謀だった。

シーバ「もうそろそろ来ると思っていたよ。いや、予定より遅すぎたかな？」

イルマ参謀はそれを無視して、用件を伝えることにした。

イルマ「あなたの同族がこの星に来て、侵略をしようとしているって本当なの？」

シーバ「私は嘘はつかない。最も、簡単に信じてもらえるとは思ってはいないがな」

イルマ「確かにあなたの言う通りだわ。でも今はあなたを信用しなきゃいけないの」

シーバは少し驚いた素振りを見せたが、すぐに言った。

シーバ「恐らくゴールは大量のサソームを使って世界中の国々を攻めていくつもりだ」

イルマ参謀は闇が世界を覆うところを思い出したが、それとこれとは話が違うと思った。

シーバ「だがそんなことはさせてはいけないうに決まっている！」

シーバは感情的に叫び、右足でコンクリートの床を蹴った。

シーバ「だからこそ、だからこそ君たちと協力して彼を止めたいのだ。私ならゴールの宇宙船を特定できる」

イルマ「それは本当なのかしら？」

シーバ「勿論だ」

その一言にはシーバの自信がかなり詰められていた。

イルマ参謀は個人的な質問を彼に聞くことにした。

イルマ「話を変えるけど、GUTS・2ndのカンザキ・アキラ隊員はどうして連れ去られたの？」

シーバは少し間を置いて、

シーバ「…………それは人質だろう。何故分かりきったことを聞くのか？」

イルマ「気になったただけだわ」

それを言って、イルマ参謀は部屋から出ていった。

全てが暗い空間にアキラはいた。

アキラは倒れており、その顔には苦痛が現れていた。

その空間には既にパークル星人、ゴールが立っていた。

ゴールはアキラの前にいて、彼に向かって喋り始めた。

ゴール「出てこい、ウルトラマン。そこにいるのは分かっているぞ」

それから3秒が経った時、アキラの体から光の球体がゆっくりと出てくる。

光の球体からは小さいながらも、ウルトラマンツインの姿が確認できた。

ツイン「パークル、侵略は宇宙の掟に反する。それを理解しているのか？」

それを聞いて、ゴールは笑い始めた。

ゴール「ハハハハハハハ！宇宙の掟だと？そんなものはもう無いわ！やはり貴様は古いな」

ゴールはさらに言葉を続けた。

ゴール「……………だったら逆に聞こう。貴様たち、ウルトラマンはどうなるのだ？貴様らの戦争によって古代文明は滅びたではないか！ウルトラマンの掟とやらはどうした？答える！」

だが、ツインの光はアキラの体へ戻っていった。

ゴールは失望し、アキラの前から立ち去っていった……

それから一日後、GUTS・2ndはシーバの話を元にゴールの宇宙船があると言う場所に来ていた。

シーバの話を信じた理由は、イルマ参謀がナカタ総監にゴールの宇宙船を破壊するためにはシーバが必要だと進言した為だ。

勿論、シバタ参謀をはじめ右翼派の参謀たちからは反対意見が出された。

だが、既に各国の主要都市は襲撃された現状では彼の力を頼らざるを得なかった。

因みに場所はかつてルオードとツインが戦った山脈だった。

シーバは作戦を語る。

まず、ここにはガッツウィング1号が2機とコネリー07がある。

ゴールの宇宙船は普段は透明のバリアーで覆われている。

そこへシンジウとヨシオカ、ミホがそれぞれ乗る1号がゴールの宇宙船を攻撃する。

恐らく、宇宙船は反撃をするためにバリアーを一時的に解除するところを、タグチ、オオツカ、ワタベの乗るコネリー07が潜入し内部から破壊していくと言う内容だ。

シーバ「私たちは、と言うより君たちはカンザキ・アキラを助けたいのだろう？」

作戦を伝えた時、シーバは通信機の方こう側からそう言った。

シンジウ「確かに、カンザキは大切な仲間だ。あいつは絶対に助けなきゃいけないんだ」

タグチ「カンザキがいなきゃ、俺たちは明るくなれないんだよ。・・

・サクマ、心配すんなよ。俺と副隊長があいつを助けてやるからさ」

ミホ「ありがとうございます、タグチさん」

ワタベ「タグチ、誰かを忘れてない？」

ワタベは少々怒っている感じで言った。

オオツカ「今から、任務だって言うのに喧嘩すんな。隊長、俺たちはいつでも動けますぜ」

どこかおかしいオオツカの発言に皆は少し笑い、

ヨシオカ「僕も大丈夫です。隊長」

シンジヨウ「よし、GUTS・2nd、作戦開始だ！」

ミホ、オオツカ、タグチ、ワタベ、ヨシオカ「了解！！」

一方、宇宙船の内部ではアキラは目を覚ましていた。

アキラは頭を両手で抱え、唸っている。

彼は自分が今どこにいるのか分からなかったが、とても低い声が答えを出した。

ゴール「お前は、俺様の宇宙船にいるのだ。だから、助けなど来ないぞ」

それを聞いた時、彼は何が起こったか瞬時に理解した。

アキラ「確か・・・お前はゴールだったか？へー、助けが来ないって？そりや凄いな。つまりお前の船は隠れてるんだろ？コソコソ隠れてばかりいる性格なんだな、お前は」

ゴール「挑発をしているのか？ふん、くだらないな地球人は」

アキラは舌打ちをしてもしもの時の為に隠していた拳銃を制服のポケットから出して、連射した。

が、ゴールは当然の如く全て避けた。

アキラ「やっぱり通用しないよな」

そう呟くと、アキラは拳銃をゴールに向かって思いっきり投げた。

ゴールはそれを右手を振って爆破させる。

その瞬間、アキラは叫びながら走って、ゴールにパンチを繰り出した。

が、これもあっさりと避けられ衝撃波でアキラは吹き飛ばされた。

床にぶつかったものの、アキラはまたゴールに向かって走る。

今度はゴールはアキラが突き出した右腕を掴むと、背負い投げした。投げられたアキラは背中を右手で抑え立ち上がったが、ゴールは右足で胸に蹴りを入れる。

痛みに叫ぶアキラは胸を抑えるように、右腕と左腕をX字に交差させた。

その時、突然ゴールは苦しみ始めた。

アキラは驚いたが、すぐにもう一度殴りかかろうとした。

だが、間髪入れずにその空間は揺れた。

アキラはひっくり返ってしまい、ゴールも倒れてしまった。

その時、ゴールからライト・カートリッジが転がった。

アキラはそれを見て、あ、取られてたんだとこの状況にも限らず樂觀的なことを思った。

しかし、すぐにライト・カートリッジを取り返すと、右手で何発も殴った。

そして、ここから脱出するためカートリッジを頭上高く上げた。

コネリー07は未だに現れない宇宙船を待っていた。

にしても遅すぎる、まさかシーバは自分達を裏切っているのではないだろうか？とタグチは疑い始めていた。

そんな中、ワタベはタグチを叩いた。

タグチ「何だよ、ワタベ？」

ワタベはタグチを無視して、オオツカに話しかける。

ワタベ「あれって何でしょう？」

ワタベは外に人指し指を指していた。

そこは歪み始めていて、とてもおかしい光景だった。

それから5秒も経たず、突如爆発を起こした。

タグチは驚愕した。

無理もないだろう、恐らく爆発したのはゴールの宇宙船だ。

理由は分からないが、まだ自分の後輩がいるのにいきなり崩壊したのだから、そのショックはかなり大きい。

しかし、爆発の後の煙に何かがいるのをタグチは感じた。

煙は段々と消えていく。

そこにいたのは……

ヨシオカ「ウルトラマンツインだ！」

通信機から聞こえてくるヨシオカの叫びに、タグチはああ、そうかと思ったが、どこか複雑な気分になった。

ツインは両腕を下の方に向けた瞬間、背後に光のようなものを撃たれた。

ツインは驚いて振り向くとそこには巨大化したゴールが立っていた。

ツインとゴールは何回か手を動かして何分かが経った。

その時の2体はまるで喋っていたかのように・・・

そして、2体はぶつかり合った。

ぶつかった時に2体は押し合い、互いに力を増していく。

再び通信機のスピーカーから声が聞こえたが、今度はシンジウからだった。

シンジヨウ「ツインを援護するぞ！」

オオツカが了解と言って、コネリー07を近付けていった。

ツインは両腕を下の方に向けた瞬間、背後に光のようなものを撃たれた。

ツインは驚いて振り向くとそこには巨大化したゴールが立っていた。

ツインは叫んだ。

ツイン> パークル、地球から出ていくんだ！今ならまだ許される！<

ゴールもそれに負けんと言わんばかりにツインを右手の指を指して叫ぶ。

ゴール> 黙れ、ウルトラマン！貴様は何だと言うのだ！ただの戦士か？神か？それに何故この星を守る？貴様が地球を守る行為は、俺様から見れば立派な支配だ！！<

ツインは左手を握りしめ胸の前に持つてくると、再び叫んだ。

ツイン> 確かにそう言う気持ちがあるのかもしれない。

……だが、俺はもう後悔したくないんだ。かつて、この星を守れなかったこと。仲間を守れなかったこと。親友を救えなかったことを……。だから、俺は地球を、仲間を、親友を守りたいだけ！行くぞ、ゴール！！<

左手を振り払い、ファイティング・ポーズをツインは取る。

ゴール>来い！ツイン！！<

そして、2体はぶつかり合った。

ぶつかった時に2体は押し合い、互いに力を増していく。

だが、力はゴールの方が上だった。

徐々に押されていくツインは逆に押すための力を弱くした。

そのまま、ツインはゴールを背負い投げをする。

地面は揺れた、ゴールが倒れたところをGUTS・2ndの戦闘機が追い討ちをかけるように、レーザー、ミサイル等を撃ちまくった。

ゴールは何発か当たって悲鳴のようなものをあげる。

ツインはエネルギーソードを出して、ゴールの首を切ろうとするが、それに気がついたゴールは瞬間移動でなんとか避けた。

なるべく、ツインから離れたゴールは右手から衝撃波を放って、ツインを吹き飛ばす。

そして、ゴールはレーザーをGUTS・2ndの戦闘機に放つ。

レーザーはミホの乗るガッツウィング1号に当たってしまった。

シンジョウ「サクマ、脱出するんだ！」

しかし、脱出用のレバーを引いても脱出が出来ない。

1号の墜落先には山がある。

ミホは、アキラの所へ行くのかな・・・あれ、何でアキラのことを考えたんだろう、と思った。

が、ツインは1号をウルトラ念力で激突直前で止めることに成功した。

そのままゆっくりと1号を地面に降ろす。

ツインはその場から、ジャンプをして、ゴールに蹴りを繰り出した。

だが、蹴りを受け止められ弾き飛ばされてしまう。

ゴールはさらにツインを殴ってきた。

ツインはただそれを耐えるのみ。

今度はゴールが右手から禍々しい光の剣をだしてツインの背中を攻撃した。

何回も切り刻み、とうとうツインの背中では光の血を出した。

ゴール>仲間に背中を任せるとはよく言うが、貴様の背中はがら空きだな。簡単に攻撃出来たぞく

ツインは苦しみながらも、エネルギーを溜めずセンチラル光線を撃った。

だが、ゴールは光線を簡単に吸収して紫色の光線を出し、ツインに大量のダメージを与えた。

ツインのカラータイマーが赤に変わり、無機質な音が鳴り響く・・・

シンジヨウはツインを援護しようと、オオツカたちに通信をしようとした。

が、それを理解したのかツインはテレパシーで、シンジヨウに話しかけた。

ツイン>お願いがあります。すぐにここから離れてください！く

たった二言とは言え、どこか気迫のあったツインの声にシンジヨウは隊員たちに命令する。

シンジヨウ「ここから、離れるぞ！」

ヨシオカ「どうしてですか！？ツインが苦しんでるんですよ！」

ワタベ「そうですよ！」

だが、シンジヨウの意見に同意する人物が一人いた。

タグチ「……………隊長の言う通りにしようぜ」

オオツカ「タグチ、お前本気で言ってるのか？」

タグチ「本気じゃなかったら、こんなこと言いませんよ」

ツインはガッツウイング1号がここから離れていくのを見届けると、ゴールを殴りにかかった。

だが、簡単に避けられ頭突きで地面に倒れてしまう。

ツインの今度の攻撃はゴールの足を引っ搔けると言うものだった。

いきなりだった為、ゴールも地面に倒れる。

ツインはゴールを持ち上げて、ガッツウィングから、ミホから出来るだけ遠ざけるように、カ一杯に投げた。

ツインは両腕を胸の前で交差させた。

それと共に、体から光が溢れ出てくる。

何か危険を感じたゴールは衝撃波を連発するが、衝撃波はツインの体に吸収されていく。

そして、ツインは体をゆっくりと回転し始めた。

徐々に回転するスピードを上げていく。

シンジョウたちはただ見守っていることしか出来なかったが、何か危険なものが起きると感じた。

ゴールはもまた腕に右腕にエネルギーを溜めていく。

高速で回転していくツインは突如止まった、手を握り両腕を真横に直線に伸ばしたまま。

その両腕には大量の光が詰まっていた。

両手をそれぞれカラータイマーの横に添えて、そのまま右腕を上、左手を下にやる。

ゴールは右腕をツインに向かって伸ばし金色の光線を、ツインはゴールに向かって両腕を伸ばして青色の光線を出した。

光線はぶつかる。

だが、ぶつかった瞬間からゴールは押されていた。

焦り始めたゴールは更に威力を増す。

しかし、結果は変わらない。

ヨシオカには一時間は光線の撃ち合いをしていると感じたが、正確にはたったの5秒でゴールは弾かれた。

少なくとも3キロは飛ばされただろう。

ゴールは苦しみ、ただ体を震えさせている。

ツインは殆どのエネルギーを使いきったのか、ドサリと地面に倒れるように膝をついた。

ゴール>俺様たちは間違っではない筈だぞ、ウルトラマンツイン……！我が故郷は太陽系第3惑星を手に入れることを望んでいた。それが、星の崩壊を防ぐ唯一の方法なのだ！！<

ツインは彼に対して反論をした。

ツイン>お前が間違えたことは・・・全てだ<

ゴール>だったら、どうしろと言っただ！？貴様には分かるまい。今の俺様の気持ちを……チクショー！<

ゴールはその叫びと共に大爆発を起こした。

いつもの怪獣とは違う、まるで彼の怒りを表すかのよう……

爆発が終わった地面は抉られていた。

戦いは終わったが、ミホは泣いていた。

アキラがとうとう死んでしまった、と思ったからだ。

もちろん、それは今から5分後に違うと分かるのだが。

一方、アキラは墜落した1号へ向かっていた。

だが、歩く度に意識が遠くなっていく。

歩き方も危なく、間違えればすぐに転びそうだ。

やっと見えた、安心しきった時、遂にアキラは倒れた。

倒れてから10秒くらい経って自分の名前を叫びながら呼ばれるのを聞きながら、目の前が真っ暗になる……

アキラは目を覚ました時に一番に思ったことは、また病室か、である。

彼は元々怪我をすることが多く、ツインと融合してからは更に病院送りが増えた為、簡単に病室だと分かったからだ。

部屋はとても暗かった、どうやら今は夜らしい。

アキラはベットから降りようとしたが、体が言うことを聞かなかった。

アキラ「イってゝな、もう・・・」

シーバ「無理はしない方がいい。医者の話によると2週間はここにいなければならぬらしい」

その時、アキラは初めて病室にシーバがいるのに気付いた。

アキラ「シーバ？・・・あ、怪我大丈夫なのか？」

シーバはフン、と笑い、

シーバ「だったらここにはいない。君が誘拐されている間に色々と

あつてな。私は故郷に帰らせてもらつよ」

アキラ「え？………そうか、行っちゃうんだな」

シーバ「引き留めないのか？なんだか寂しいな」

シーバは少し苦笑しながらそう言った。

アキラ「別に、今回の件が終わったからお前は帰るんだろうな、って思ってたし」

シーバ「そうか、では私は帰るとしよう、地球の平和の為に頑張ってくれ、カンザキ・アキラ、ウルトラマンツインよ………さらばだ………」

そう言い残すと、シーバは体を下半身から消していった。

アキラはそれを少ししか見れなかったものの見届け、眠りに就くのだった。

第13話 第3惑星の激闘（後編）

・粒子宇宙人 パークル星人 シーバゴ

第2部、始まる！

アキラが目覚めた時、どこか違和感があった。

ここは本当に自分の知っている世界なのか？

次回ウルトラマンツイン、第14話『イセカイノヒト』

さあ、次回も皆で読もう！！

今回から後書きに次回予告を入れました。

感想、リクエスト等をお待ちしております。

第14話 イセカイノヒト - カイジユウ くえす -

「…………お前さん、大丈夫か？」

誰だよ、俺はまだ寝てたいんだよ・・・

「寝てたいって…………お前さん、ここで野宿でもしとつたんか？」

はあ？野宿って何言ってるんだよ？

「……公園だけんど？」

公園って…………ええ！？

俺は目が覚めたら何故か公園にいた。本当に謎だ。どうしてここに
いるんだ？俺は病院にいたはずだぞ？確か、昨日はシンジヨウ隊長
たちがお見舞いに来て、寝たんだっけ？それだったら、俺は病室に
ちゃんという筈だぞ。本当に理解が出来ない…………

「んでえ、お前さん名前は何だい？」

え、俺はカンザキ・アキラだけど、おっさんの名前は何だよ？

「おらあ、まだ30代じゃ。とにかく、こんなところにいたら風邪引くつぺよ」

いや、だから名前を……………

「いいから、いいからおらん家に来んさい」

なんか不審者みたいだな……………

おっさんは正直に言う顔が醜かった。しかも、かなり臭い。何日かお風呂に入ってないんじゃないのか？だから家なんかゴミ屋敷だろうな、と思っていた。だが、公園から歩いて30分、俺は驚いた。とても綺麗なのだ。何と言うか、とにかく綺麗としか言いようがない。

しかし、まだ俺を驚かせるものがあつた。家からたくさんの醜いおっさんたちがやってきたのだ。全員が全員、特徴のある醜い顔をしている。な、なんか目眩がしそうだ……………

「それで、お前さん何食っていくか？」

いや、腹減ってないからいいですよ……………

「遠慮はしたらイカンよ……………イカ……………よし、イカ料理を作るっぺ」

おいおい、駄洒落で決めんなって。それにもう一回言っけど腹は減ってないし……………あ、そうだった。ここはどこなんだよ！

「何を言っ取る？ここは日本列島に決まっ取るだろうが？」

だから、日本列島のどこかって聞いてんだよ！

「……………可哀想に。お前さん、頭大丈夫か？」

な、俺を馬鹿にしてんのか！？

そんなやり取りを繰り返している最中に、何か大きな足音が聞こえた。一瞬耳を疑ったが、一応その方面のプロである俺には何の音かすぐに分かった。怪物が多分こっちにやって来ているのだ。

「おお、五郎や。あいつが来るぞ」

あいつ？まさかおっさんたち……………

「そ、指差した方向を見んさい」

ギャオーン！

嘘だろ…………

「…………おーい！！『くえす』やーい！！」「」「」

まさか、本当に怪獣が来ちゃった…………。しかし、おっさんたちはあの怪獣を知っているようだ。だが、俺はあんな奴見たことは無いぞ。って言うか、変な怪獣だな。腹には角が生えているわ、上半身は太って下半身は痩せているわ、尻尾と足と腕なんか可哀想と思ってしまうくらい短い。オマケに頭なんかアホ面で笑ってしまう。あいつなんかガッツハイパーガン、一発で倒せるんじゃないか？怪獣の色なんか白黒だし。ん？白黒？そーいや、この世界は全部が白黒に見えるな。何でだろう？…そんなことより、今はおっさんたちをここから逃がすべきだ…………

アキラ「皆さん、ここは危険だ。怪獣から出来る限り離れてください！」

アキラは早口で言った。

しかし、おっさんたちは、

- 何を言っつか？何が危険なんか？ -
- 怪獣？何やねん、そりゃ？ -

と、アキラにとって意味不明な答えが返ってきた。

アキラは『くえす』と呼ばれた怪獣を指しながら、

アキラ「ですから、あの化け物のことだって！」

と、少々困惑した感じで叫んだ。

- 『くえす』が危険？あんたは馬鹿か？ -
- そうそう……… やっぱり頭狂ってんじゃないか？ -

おっさんたちは、アキラを罵倒するような発言ばかりを次々にしてい
いく。

アキラは苛立った。

アキラ「どうして怪獣から逃げないんだ！？あいつらは悪魔なんだ
ぞ！」

アキラは叫ぶ。

自分の考えがなぜ届かないと考えながら。

そして、怪獣に向けて何故か持っていたガッツハイパーガンを撃つ
た。

バン！

弾は『くえす』のお腹に当たった。

腹からは血が大量に吹き出て、苦しみにより体を痙攣させた。

そして、『くえす』は倒れた。

それから5分は誰も喋らなかった。

鳥の鳴き声も、風の音も、とにかく無音だった。

しかし、静寂はたった一言で破れる。

- 何で、くえすを殺した..... -

一人の男性が、アキラの服を掴んだ。

アキラ「何でって・・・それが俺の仕事だからだ。何で分かんないんだよ？」

- ふざけるな！ -

男性はアキラを殴った。

地面に倒れたアキラは、何するんだ！と叫ぼうとしたが、また殴られた。

男性はただ自分が感じている怒りを全て、アキラを殴るための力にした。

アキラの腹を殴っては、次に肩を殴る。

顔を殴ったら、胸を殴る。

アキラは何故、自分が殴られるか分からなかった。

そして、この理不尽さに彼は怒り始めた。

バン！

音は鳴ってまた5分は経っただろうか？

その音が再び鳴った時、アキラは全く理解ができなかった。

その音はなんだ、どこから来た、何で男性は殴るのを止めたのか、と。

だが、音が鳴ってから3秒で彼の右腕は生暖かいと感じ始めた。

ゆっくりと、自分の視界に入るように右腕を動かした。

赤かった。

右手は赤かった。

手には、右手より更に赤くなっているガッツハイパーガンを持っている。

アキラは周囲を見渡してみた。

自分を殴った男性は死んでいた。

腹部からは大量の血を流して息はしていなかった。

アキラ「あ、あ……………」

回りの男性たちは、硬直している。

中にはかなりショックを受けた人もいるようだ。

[illegible]

絶叫したまま、アキラは意識を失っていく……………

目を覚ましたアキラがいたのは病室だった。

ベッドから飛び降りるように起きたアキラは、息切れを起こしながらもあそこで何が起っていたのか、アキラは頭の中で再確認した。

『くえす』、おっさんたち、真っ赤な右手と銃（これを思い出した時、アキラは震えた）。

その後は、ニュースで『くえす』が出てないかを確認した。

しかし、怪獣のニュースはどこもやっておらず、唯一やっていた番組では、パークル星人の事件以来、怪獣は現れていないと言ったことであつた。

そのことはただただアキラを混乱させるだけであつた。

夢なのか、いやそんな訳はない。

何故なら、アキラはあれについてハッキリと覚えているからだ。

だったら何なのか？

考えても考えても、答えは出ない。

その時、病室のドアからノックの音が聞こえ、返事も無しに部屋に入ってきた。

その人物はミホだった。

ミホ「お土産もらってきたわよ」

そう言いながら、ミホはアキラに近づく。

しかし、ミホは一瞬止まった。

ミホ「どうしたの、アキラ？何で……………泣いてるの？」

第14話 イセカイノヒト - カイジユウ くえす - (後書き)

ルルイエから、皆も知っている『あの怪獣』が復活した。

アキラは、ツインは勝てるのか!?

次回ウルトラマンツイン第15話、『ゴルザの果てしなき攻撃』

さあ、次回も皆で読もう!!

言い訳コーナーです……………

一応、今回はアキラの心の闇をテーマにしてみました(分かってくれた人少ないよな…………)。

何でこんな作品になったかと言うと、僕が読書感想文を書く際に読ませてもらった太宰治先生の『人間失格』の影響を受けて書いたからです。

まあ、『ツイン』を書き始めた初期からこの作品のアイデアはあったのですが、ツインは出る予定だったんですよ、本当に。

ただ、『人間失格』を読んでいる&執筆している最中に「あれ、ツイン出たら読者様はかなり混乱するんじゃないかね?」と思って省きました。

……………この作品、作らなければ良かった、と後悔しております……………

多分重要な回になると思いますが

第15話 ゴルザの果てしなき攻撃（前編）

- 超古代怪獣 ゴルザ？ - （前編）

ウルトラマンティガ、15周年を記念して・・・

第15話 ゴルザの果てしなき攻撃（前編） - 超古代怪獣 ゴルザ？ -

あるマンションの中で一人の男が録音されていたラジオを聞いていた。

DJ「週間88の時間がやってきました。

突然ですが、今日は何の日か知っていますか？

今日ですね、あのウルトラマンティガが復活してから15年目なんです。

ティガといえば私の中で1番思い出があるのは、やはり邪神との戦いですね。

私もあの時、光となりティガと一緒に邪神と戦いましたからね。

そんなわけで、今日はティガ特集。

今日のオープニングは……」

ここでラジオは切れた。

ルルイエの地底では、TPC科学班が調査をしている。

研究員A「何かここから変な熱源反応が出ているんですけど・・・」

「

1人が壁に指す。

壁には、古代の戦士たちと怪獣が戦っている絵が描かれている。

その1つにゴルザがあった。

研究員B「この奥に何かあんのか？……よし、ダイナマイトで爆発するぞ」

研究員C「でもいいんですか？遺跡を簡単に壊しちゃうなんて」

研究員B「今まで壊してきたんだから、大丈夫だって」

20分後、ダイナマイトはセットされた。

TPC一般隊員「準備出来ました。・・・爆発まで5秒前。

4

3

2

爆破！！」

ドオオオオオン！という音と共に火炎が目の前に広がる。

それらが収まると研究員たちは壁に近寄る。

壁があつたところには大きな穴が出来た。

その穴に入ろうとするが、研究員たちの足が止まる。

そこには、ゴルザが立っていた。

ゴルザは彼らに気がつかないまま、その巨大な足を一步前に出す。

一部の人間は逃げ出すが、ほとんどの人間は潰されてしまった。

叫んで逃げる人たちに気づいたゴルザは角を不気味に光らせる。

そして…

？全ての物語は2007年、全ての争いが無くなり平和となった地球に一つの隕石が落ちたことから始まる？

？地球平和連合 T P Cに所属する特捜チーム『G U T S』がこれを調べた結果、地球は超古代文明を滅ぼした『闇』に再び狙われていることが判明し、それに対抗するためには『ティガの地』に眠るウルトラマンの力が必要だと知る？

？ティガの地、そこは光のピラミッドがあり、三体の巨人の石像があつた？

？が、怪獣『ゴルザ』と『メルバ』の攻撃により二体の石像は破壊されてしまったが、最後に残された石像はある超古代の戦士の血を受け継ぐ一人の青年が光となり石像と融合？

？巨人は、『ウルトラマンティガ』はこうして復活したのだ？

？これを境に地球は怪獣頻出期へと入っていき、2010年、そして2012年に超古代文明の遺跡『ルルイエ』での決戦で闇を打ち破ったかに見えた？

？時は流れて2017年、人類は宇宙に進出し、『ネオ・フロンティア時代』と呼ばれる時代に移った？

？しかし、今度は謎の生命体『スフィア』が襲来し火星を攻撃するが、伝説のパイロットの息子が宇宙で出会った光で『ウルトラマンダイナ』になり、スフィアを追い払うことに成功する？

？2020年、スフィア最大の攻撃に『S - G U T S（スーパーG U T S）』が立ち向かい、人類最大の兵器『ネオマキシマ砲』と

ウルトラマンダイナの攻撃でそれを倒すが、ダイナは行方不明となってしまう？

？再び時は流れて2027年、ルルイエ周辺から見つかった巨人の石像は『GUTS・2nd』に所属しているカンザキ・アキラと融合し、『ウルトラマンツイン』が復活した？

？二人は融合しても互いの短所をカバーしあいながら、仲間を、親友を守るために戦うのだった？

それから一日が経ち、2027年9月7日、日本の岩手山近郊の上空ではガッツウィング1号が飛んでいた。

1号にはカンザキ・アキラが乗っていた。

今日の空中パトロールはアキラが担当で、場所は『ティガの地』の上空を飛んでいる。

因みにアキラが退院したのは9月6日、つまり昨日だ。

なおタグチ曰く、「なんかとっても暗い顔してんな」だったそうだ。

……さて、実はアキラが『ティガの地』に来たのは確かにパトロールと言ったこともあるのだが、先日の『夢』からどうしても立ち直れなかった。

そこで、アキラは一番最初の巨人が蘇った場所に来れば何か気持ちを変えることが出来るのでは、と考えたのだ。

彼はヘルメットの通信装置を入れ、ダイブハンガー指令室へ繋がった。

アキラ「こちら、カンザキ。ダイブハンガー指令室、どうぞ」

通信機からは同じGUTS・2ndの隊員である、ワタベ・アヤの声が聞こえる。

ワタベ「はい、カンザキ君聞こえるわよ。どうしたの？あ、ミホに変わりたいのかしら？」

アキラ「そんなんじゃないかもしれませんよ。ただ、ちょっと寄り道をしてから帰りたいな～と思うたりしたわけですよ」

ワタベ「そう言うのは仕事の怠慢って言うと思いますよ、カンザキ君？」

アキラは少し苦笑して、

アキラ「はい、分かっていますよ。でも見てみたいところがあるんです」

ワタベ「うん・・・今度ジュース奢ってくるなら考えてあげても良いかな？」

アキラ「ああ、分かりました。じゃあ、お願いします」

ワタベ「あ、ちょっと」

通信を切ったアキラは1号を着地出来る場所を探した。

一方、『ティガの地』には一組の夫婦がやって来ていた。

その二人とは、マドカ・ダイゴとマドカ・レナ、かつての『GUTS』のメンバーだ。

二人は何故、地球に来ているかはこの作品の『番外編 part1』
『番外編 part2』に書いてあるのでそちらを読んで頂くとし
て、この『ティガの地』に来た理由は今日と言っ日にある。

今日が彼ら（特にダイゴ）にとって？始まり？であるからだ。

二人の子供、ヒカリとツバサは一応地球の学校に通っている。

ダイゴ「なんか懐かしいな、ここも」

ダイゴは嬉しそうに語った。

レナもそれに同意して、話す。

レナ「今考えるとさ、あの時のダイゴの行動ってなんかおかしいよね？どう思ってたの？」

ダイゴ「え？……多分俺の中にある遺伝子がそうさせた、とか？」

レナは微笑んで、訳が分からないと呟いた。

レナ「本当、色々あったよね・・・」

ダイゴ「え？」

ダイゴは神妙そうな顔をしているレナを見つめた。

レナ「今更だけどダイゴがティガになって、本当に辛くなかったの？」

今度はダイゴが笑顔になり、こう答える。

ダイゴ「前にも俺の後輩に言っただけだし、なぜ戦うのか？自分は何者なのか？誰かにその答えを教えてほしかった。って思ってた時期はあったよ。でもそんな考えよりもただ皆を守りたかったんだから戦えたんだ」

真剣に語った彼を見て、レナは夫の名前を呟いた。

1号から降りて、辺りを歩いていたアキラは偶然か、ダイゴとレナを見かけた。

二人に見覚えのあったアキラはすぐに思い出そうとしたが、なかなか思い出せない。

少々悩みつつ、アキラは『ピラミッド』があった所へ行こうとした時、

ツイン>ティガ！？何でここに！？<

中からツインが叫んだ。

一瞬何のことか、アキラはサッパリだったがその言葉で二人が誰なのかを思い出した。

さらに場面は変わりダイブハンガー指令室、ワタベはシンジョウにアキラが寄り道をしてくることを伝え（1号が故障したと言うことになっている）、コーヒーを飲んでいとタグチが部屋に入ってきて

た。

タグチ「隊長、聞きましたか！」

シンジヨウ「何だ、焦った感じ出してよ」

確かにタグチは走ってきたのか、かなりの汗が出ていた。

タグチ「何だよ、じゃありませんよ！ルルイエの調査隊が行方不明になったらしいじゃないですか！」

ワタベはコーヒーに砂糖を入れてこう言った。

ワタベ「通信機が壊れたとかじゃないの？タグチは何を焦ってんだか」

シンジヨウ「ルルイエか……」

シンジヨウの弦きがヨシオカの耳に入り、彼に聞いてみた。

ヨシオカ「隊長、どうかしたんですか？」

シンジヨウは飲もうとしていた水の入っているコップを机に置いて、思い出すかのように話し始めた。

シンジヨウ「あそこはヤバい場所だから……。調査隊は冗談抜きで何かあったんじゃないかって思ってたな」

タグチ「だったら、すぐに行きましょうよ！」

タグチの意見にミホも、

ミホ「そうですよ、隊長！」

と、同意した。

シンジヨウ「確かに行きたい気持ちはあるが、今はやらなきゃいけない仕事をするぜ、ワタベ」

と言って、突然鳴り始めた警報を指差した。

ワタベはすぐに通信席に座り機械を操作する。

ワタベ「こちら、ダイブハンガー指令室。はい……はい………分かりました」

通信を終え、ワタベは皆のいる方向を向いて言った。

ワタベ「警報がなった時、嫌な予感はしていましたがね。怪獣を探知。向かっている先は『ティガの地』だそうです」

オオツカ「ティガの地って言ったら、『ウルトラマンティガ』が蘇った場所じゃないか。どうして怪獣はそこへ向かってんだ？」

シンジヨウ「さあな、分からないが、とにかくGUTS・2nd、出動だ！」

第15話 ゴルザの果てしなき攻撃（前編）

- 超古代怪獣 ゴルザ? - （後書

次回は来週9月14日の午後六時に投稿します。

9月14日 あとがき

すいません、諸事情により投稿できませんでした。

番外編 part 7 - チーム最年少と特別隊員 - (前書き)

かなりお久しぶりの投稿でございますが、本編ではなくこのような形で申し訳ございませんm(_____)m

今回書き方を少し変えております。

第二部では今回のように書き方を何回も変える可能性があるのですが、そのところは暖かい目で見守ってください。

番外編 part 7 - チーム最年少と特別隊員 -

時刻は午後1時。

昼休みの為誰もいない真つ暗なダイブハンガー指令室だったが、突然自動扉が開いた。

それと同時に幼いながらも大きな声が室内に響いた。

コウタ「こんにちはー！ハヤカワ・コウタただいま学校パトロールから戻りましたー！」

コウタ少年は一応GUTS・2ndの特別隊員である（彼がどうして特別隊員になったかは第11話を参照）

そして学校パトロールとは、以前彼は「特別隊員だから学校なんか行かなくていいんだ！」とGUTS・2ndのメンバーに言ったことがあった。

が、それに対しワタベ隊員が「じゃあ、その学校は誰が守るの？あなたしかいないじゃない！！」と言われたことを真に受け、学校パトロールは誕生したのだ。

コウタ少年は部屋の明かりを付けて、真ん中にある大きな机にランドセルを置いた。

すると、ランドセルは突然生きているかのようにジタバタし始め机から落ちてしまった。

コウタ「ああ、ダメだよ。大人しくしていなきゃ」

そう言ってランドセルを開けると中には教科書等が入っており、代わりにいたのは黒い毛に包まれた物体がピクピクと動いていた。コウタ少年は物体を取り出して、机の上に置く。明かりに照らされ

た物体の形からしてどうやら子猫のようだ。
恐らく野良猫を拾ってきたのだろう。

コウタ「待っててね。牛乳持ってくるか・・・」

子猫は突然明るい場所に移されたことに驚いたのか、あるいは今まで狭いところに入れられていたが広い部屋に出されたことに嬉しく思ったのか、真ん中の机からコンピューター等の精密機械が設置されている机に飛び移ってしまった。

ダイブハンガーの食堂。

ここではゆっくりとサラダ多めの定食を食べているヨシオカ隊員がいた。

野菜は残りお茶碗5杯分くらいでヨシオカ隊員もどうやって完食しようか悩んでいた。

その時、PDIがいつもの電子音を鳴らす。

ヨシオカ隊員は持っていたフォークを皿の上に置き、PDIを持って操作をする。

機械の画面に映っていたのは指令室からのSOS！

ヨシオカ「え？・・・ええ！？」

それはもう隊の中で一番若いヨシオカ隊員は頭のネジがグルグルするくらいビククリしたんだとさ（後日談）

彼は頭の中で物事を整理する。

（えーと、SOSってことは敵、多分宇宙人辺りに乗っ取られたん

だよ。こういう場合はまず武器の確認……全部指令室だ……。あ、今、ダイブハンガーにいるのは、シンジョウ隊長は昔の同僚とあっていて、タグチさんは研究会に出席。ワタベ隊員は非番で合コンに行っているんだっけ？カンザキ先輩とサクマ先輩はパトロールと言つ名のランチデート……。後誰か一人忘れているような気がするけど、ここにいるのは僕だけじゃないか！！）

とにかく、どうするべきか悩む悩む。

（こう言つときは皆を呼ぶべきか、とりあえず一人で指令室に向かうべきか……。いや、おじいちゃんが何としてもこの基地を守るうとしていたんだ。だったら今度は僕が守ってやる！）

展開が早すぎるかもしれないが、ヨシオ力隊員は決断し、皿に置いてあつたフォークを持って指令室に走って向かった。

コウタ「待つて、待つてよー」

コウタ少年はあれから机から机へと跳んでいく子猫を捕まえようとしていた。

が、触れることが出来てもギリギリで逃げられてしまう。そんな状態が何回も続いていた。

コウタ「ああ、もう！せつかく助けてあげたのに。恩を仇で返さないでよ」

すると、自動扉が開いてフォークを構えたヨシオ力隊員が部屋に豪快に前転しながら（何で？ by 作者）、入ってきた。

ヨシオカ「そこから動かないください！・・・あれ？」

ヨシオカ隊員の目に入ってきた光景、それは普段は大人しかいない指令室なのにコウタ少年と子猫が部屋にいたことであった。

ヨシオカ「え」と、コウタ君？何やってるんですか？」

ヨシオカよ、何故子供に敬語を使う？と言う突っ込みをしなくなったコウタ少年であったが、とりあえず質問に答えることにした。

コウタ「僕が連れてきたこいつが勝手に動きまわって捕まらないんです。ヨシオカさん助けてよ」

ヨシオカ隊員はもちろん困惑。

だが、真ん中の机の上にチヨコンと座っている子猫を見て、指令室から送られてきたSOSは恐らくこいつが動いている内にコンピューターのスイッチを押したんだろう、と考えた。

ヨシオカ隊員は歩き始めると、コウタ少年が捕まえることに苦労した子猫を両手を使い、あっさり捕まえることに成功する。

ヨシオカ「はい、これ。ここはペット持ち込み禁止ですよ。僕が何とか言っておきますから、こいつはちゃんと持ち帰ってくださいね」

そう言いながら、ヨシオカ隊員は子猫の背中を掴んでコウタ少年に渡した。

コウタ「ありがとう、ヨシオカさん」

コウタ少年は子ども特有の小さな手を伸ばす。

と、その時子猫はジタバタと暴れだした。

ヨシオカ「うわッ!?!」

突然も突然、ヨシオカ君かなりビツクリ。

ヨシオカ隊員は子猫を離してしまい、尻餅をついてしまった。
子猫は今だとばかりに走って指令室の外へ出てしまった。

コウタ「あ、待てー!」

驚いたコウタ少年。

慌てたのか、ヨシオカ隊員を踏んづけて行っちゃった。

ヨシオカ「ぐわっ!!」

子どもだから歩数(?)は少ない。

それだけにたくさん踏まれたヨシオカ隊員はそのまま倒れてしまった。

ヨシオカ「痛たたた・・・。あ、コウタ君、待ってくれー!」

しかし、すぐに立ち上がって子猫を追いかけるべく、彼も走って行った・・・。

この後、ヨシオカ隊員は指令室からのSOSが誤操作であったと言
うことを伝えなかったためシンジヨウ隊長から怒られたのは、また
別のお話・・・。

お知らせ（『ウルトラマンサーガ』のネタバレあり）

ここ最近『ツイン』が更新できず申し訳ありませんでしたm（――）

言い訳になりますが、原作キャラは扱いがとても難しく一旦書き終えてもダイゴのキャラとなんか違う、と言った感じになってしまうのです。

書いては削除しの繰り返しでした。

その為『ツイン』を休載にした方が良いのでは、と思っていました。

そんな時に2012年3月24日公開の『ウルトラマンサーガ』の情報が入ってきました。

今までの情報から舞台は『ティガ・ダイナ』の地球で間違いないと思います。

正直これにはかなり困りました。

DAIGOさんが演じるタイガ・ノゾムはスーパーGUTSに入隊しているようなので、時代はネオスーパーGUTSが発足される2027年より前でしょうが（念のため説明するとGUTS・2ndはネオスーパーGUTSと同時期に発足された設定です）、『サーガ』と設定を合わせる為3月くらいまで『ツイン』を休載にします。

今まで『ツイン』を読んでくださった皆さま、本当に申し訳ございませんm（――）m

必ずウルトラマンツインはGUTS・2ndは戻ってきます。

その時は暖かい目で彼らを迎えてください。

それでは・・・

2011年11月13日土曜日 棒人間

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6731s/>

ウルトラマンツイン

2011年11月17日19時02分発行